働く少年少女の生活記録

雨にもめげず 風にもめげず

労働省婦人少年局編

雨にもめげず
風にもめげず

働く少年少女の生活記録

1955

労働省婦人少年局編

働く少年少女の作文によせて

当然、高校にゆけると思っていたのに、やらしてもらえず、絹織工として家業にしたがう娘の抱負。

同年輩でも高等学校を出た人には「××君」と呼び、「おい、とんま、あれをしろ」「おい、小僧あれをしろ」といわれ、こうした社会への憤りを胸に秘めて夜学に通う少年。

ただまじめに働くことが、いちばんたいせつだと思うのに、上役や先輩の気に入らなければならないという、矛盾になやむ変換手。

こうした働く少年少女の作文を読むと、あまりのけなげさ、いじらしさに胸せまる思いがします。

きのう、工場で印刷したチラシが新聞に入ってきたのをみて、働くことの喜びとチラシへの愛着にひたる印刷工など、思わずほほえましさをおぼえるのです。

実社会に出て初めてふれる大人の世界は、感受性が強く純粋な彼らにとって、これはまた、どんなに大きな刺激であったかは、はかりしれぬものがあります。

この矛盾相克との闘いのなかで、ある者は定時制に、そして通信教育に、労働に疲れた身体をひっさげて、勉学に取組む真剣な姿が、私たち大人に深い感銘を与えるのも偶然ではありません。

労働基準法が完全に守られ、よりよい労働環境のなかで、教育の機会にめぐまれつつ働けるとした

ら、早くから世に出て働かなければならない少年少女にとっても、けっして不幸とは申せません。

いまでは、こうして、めぐまれて働く年少者も少くはないことでしょう。しかし、大部分の年少者がこの作文にみられるような苦しみ、悲しみから解放され、働くことの喜びと誇りをもちつづけることができるよう、祈らずにはいられません。

わたくしどものなすべきことの多きを思い、働く年少者への期待も大きいのです。

せめてこの作文集が世に出ることによって、大人のよりよき理解と協力がえられ、そしてあらゆる職場に散っている数百万の働く少年少女のはげみになることができれば、幸いこれにすぎるものはありません。

この発刊については終始熱意を示され、お引受けくださった読売新聞社出版局の御努力に対し、ここに厚くお礼を申上げるしだいでございます。

昭和三十年八月

労働省婦人少年局長　谷野せつ

おことわり　ページ数のつごうにより、入賞候補・入選の作品全部を収録できず、その中から、編集部でえらんでのせました。

目次

働く少年少女の作文によせて……谷野せつ…一
女工日記……中川トク…二
僕の職場生活……関市郎…六
赤い自転車……相場和雄…三
機業の家……舟久保とし子…三
ぼくらの軌道……青木鮑…三
社会に生きて……但馬嘉勝…四〇
ある日のこと……川向秀武…三〇
三百円の万年筆……前田尚美…三七

生活記……川崎昌男…六
指……斎藤義祐…七二
働きつつ学びつつ……小出敏世…七四
一週間の職場……水村信子…八〇
私の報告書……斎藤隆子…八四
卒業してから……竹村淳子…八七
だまって別れた……中川典子…八八
馬小屋の中で……清原正行…九〇
住込みの日記から……志賀幸一…一〇一
立ちん坊……田原中平…一〇四
私の過去と現在……高橋淳子…一〇八
生活記……川谷広志…一一〇
一つの訴え……岡野英子…一一三

心の歌……福井勇二…二六
日記の中から……井田武夫…二三
思い出……武田静子…二五
働くよろこびと苦しみ……若井嘉子…二三
入社した若い人たち……安中弘資…二五
日記から……仲野政義…二五
日記……奥村勝…二五

俳句

竹原虎男…四八　村田八重子…四八
深瀬悦弘…四八　酒井兼二…四九
阿久津政治…四九　関勝男…四九
大滝実…四九　泉崎創平…五八

短

稲継舜一…八四
庄司国枝…一〇六
北川正徳…一五七
時任利彦…一五七
稲泉清祐…九一
川崎義光…一五七
酒井徹…一五七

歌

矢崎健彦…一七
阿久津政治…一七
稲継舜一…七九
北条松広…七七
深瀬悦弘…八九
三百合…一〇七
飯島一秋…一四八
村田八重子…一七
久保田耿平…一七
山口栄三…七九
遠田啓文…七九
時任利彦…一〇七
関口和章…一〇七
上原正夫…一四九

詩

岩城散人…一四九
坂内銀也…一四九
工藤智恵子…一四九
甲山明春…九〇
鈴木光義…九一
永井光子…一一九
甲山明春…一三一
津田滋子…一三六
向井利彦…九〇
甲山明春…一一八
市川嘉寛…一二〇
石川巍嗣…一三一

装本　恩地邦郎
カット　手塚一郎

雨にもめげず風にもめげず

女工日記

中川トク
〔千葉県　製糸女工　十六歳〕

×月×日

今週は早番なので、朝の五時から一時四十五分まで働く。朝はやくても現場は日中と同様に暑く、背中のくぼみを流れる汗がはっきりわかる。一年中、白の半袖シャツのわたしの現場は、夏冬の区別はない。天井からは蒸気がムンムン出ている。八時まで夢中で働く。糸が切れて、わたしは二つの機械のあいだを走るようにして往復する。

一日中歩いていなければならないわたしの職場だ。他の現場では半年ももつズック靴が、わたしのところでは二ヵ月も使わないうちに、底が切れてしまう。丸稀が真っ白になるほど切れるのに、むこうの台では、A列の班長と、台持ちの人が立ち話をしている。人をばかにしたような大声で笑ったり、肩をたたいたりしてふざけている。こんなとき、一本でもいいから手伝ってくれたらどんなに助かるかしれないのに、班長なんていつも腕をくんで中央通りを行ったり来たりしている。それでなければ、自分の机の前に行ってほおづえをついてぼんやりしている。「話なんかしているどころじゃないわ」といいたくなるときがあったが、いつものことなのでなれてしまった。不公平な大人の世界よ。

×月×日

仕事が終るといそいで学校にむかう。二時の太陽は私

の頭をカンカン照りつける。けれど、学ぼうとするひとびとは三十分の道を足をはやめながら歩いている。この服装学院の中には特別にわたしたちの会社の級があり、七十名にちかい人たちが、二人の先生を相手に、貴重なわずかな時間を洋裁の勉強につぎこんでいる。仕事をしてきたせいかすこし疲れる。自分の座席に着いたらぐったりしてしまった。

暑いなかをきたせいか、だれの顔も赤くほてっている。三時から五時半まで、わたしたちは熱心に製図をする。けれども、いつのまにか頭がぼーっとしてきて、先生が黒板になにを書いているのかわからなくなってしまった。鉛筆は持っていても、ぜんぜん動いていない。わたしは、急にくやしくなって舌をかんでみた。けれどもかめばかむほど眠くなった。わたしのような人がたくさんでてくると、先生はたまりかねて「では製図はこれで終りにして、あとは実習にしましょう。みなさん疲れているようですが、疲れた力はうしろのほうで休んでいて結構です」といった。わたしは、その言葉を聞いて胸がいっぱいになり、眠いのなど忘れてしまった。

× 月 × 日

仕事をしていると指導員のTさんが呼んでいる。Tさんは小柄でやせぎすの三十をずっと過ぎた人である。わたしは急いでいってみた。「ちょっと手伝ってもらいたいことがあるんだけど」といって紙管場へはいっていった。箱がおいてあって、中に単子玉の四分の一ぐらい糸の巻いてあるのがたくさんはいっていた。単は、つぎの工程にかからずそのまま輸出されるので、少しでも不良があるといけない。いま箱にはいっているのも、なにかの失敗で巻きはじめたのを抜いてしまったのだろう。

わたしの仕事は、紙管にまいてある糸を全部ほぐすということである。担当のOさんに見つからないように」とのことだった。わたしはすみの方で小さくなって六百五十本の抜玉の糸をほぐしにとりかかった。大きな失敗なのだから、もし担当に見つかったら大目玉である。わたしは急いではぐしたが、なかなか容易ではなかった。そのうち担当の出勤の時間になり、大きいお腹を心もち前に出すようにしてイスについた。

わたしは知らんぷりしてつづけていたが、やはり不審に思ったのだろう。紙管のことなどについてだれかと話

しあっていたが、とうとうわたしのそばにきてしまった。もう出来たと思うと急におどおどしてきた。担当は私の肩をたたいてニヤニヤ笑いながら、「おい、なにしてるんだ」といった。わたしは、はずかしくて赤くなるのがはっきりわかった。そして下をむいていると、「おい、どうしたんだ。お前は気違いか。なに台で抜いた玉だ」といわれたが、わたしはただTさんにたのまれてしているだけだ。「知りません」と答えると、Oさんは、なおも肩をつかんで「知らないことはないだろう」と問いつめる。

わたしは腹が立ってしまった。二人の紙管係はなにもいってくれない。わたしはTさんにいわれたままの仕事をしていたのに……。

けれど、あとで腹を立てるなら、どうしてあのとき「ほんとうになにも知らないのです。Tさんにたのまれてしているのです」と、はっきりいいきれなかったのだろう。

× 月 × 日

朝食をすませて部屋に帰ると頭痛がした。学校が夏休みにはいってから、わたしは気が抜けたようになってしまった。朝も早く起きないでいい、夜の十時半に仕事が終ってからも宿題をしなくてもいい。

ぼーっとして、いろいろの物が二つにも三つにも見えたりする。私はフトンを出して横になった。横になるといっても、二十五畳の部屋には十二人の人々が生活している。歌をうたうものもいれば、このあいだの花火大会でだれかが買ってきたヨーヨーをつくものもいるので、眠ることなどできない。わたしはゆかたを頭からすっぽりかぶって、わけもなく悲しかった。刺しゅうのしてあるマクラカバーの上に、たまあたたかい涙が落ちた。わたしの目の前に母の顔が現われて、五つになったり六つになったりしてチラチラ動いた。わたしは少しうとうとしたらしかった。目をあけると自治委員のMさんの手がわたしの額の上にあった。「熱はあまりないのかね」と腰をかがめながら笑った。

幼いころ、わたしは弱虫でよく寝ていた。そんなとき母は野良から疲れて帰って、Mさんのように手をのせて熱をみる。手の汚れているときは、自分の額を私の額の上にのせてみることがあった。いまのMさんの手は母の

手に似ていた。

けれども、わたしが小学校の上級のころになると、病弱だった母の体は急に悪化して、働くことの好きだった母は、働くことができなくなってしまった。わたしは、毎日学校の帰り、町はずれの高台にある日赤病院へ寄って薬をとってきた。母はいつもわたしの帰りを待っていた。そして「疲れたろう」と元気づけてくれた。わたしを末に生んで、あんなに若く白く広い額にも、もう無数のシワが深くできてしまった。

× 月 × 日

三十度の暑さと闘いながら二つの走紡機のあいだを往復する。ミュールの台はいつも歩いているので、いくら糸が切れないときでも、いっしょについていないと、両端に台が入ってしまえば一人のこされる。のこされると遠くからでもめだつ。汗のために、だれの背中にも薄い地図が描かれている。みんな赤い顔をしている。けれども目はかがやいている。やっと見えるような細い毛綿糸を、中指のツメでつぎつぎと継ぐ、棒毛の白くからまった丸棒を、台の出るとき右手で二本ぐっと引抜き、台の入るまでには棒毛を取り、いそいで入れる。めまぐるしいほどの動作がつづけられ、汗が顔中流れても、それをぬぐう間のないときには、口のなかまで流れこむことさえある。こんなとき、冷たいお茶の設備などがあったら、どんなにうれしいだろう。きょねんは、レモン水やイチゴ水が氷といっしょに入っていたのに、ことしはまだない。

× 月 × 日

仕事をしながらしみじみと手を見る。工場に働きはじめてから一年数ヵ月、四人姉妹の末に育ってなにも知らなかったわたしの手は、すっかり大人の手になってしまった。細かった指は太くなり、やわらかかった皮膚は固くなった。甲をかざしてみるとピリ伸しに使われる部分だけが白くなっている。丸棒取りに使われる親指もすっかり固くなってしまった。白いというよりすこし黄色じみた手。青い脈がはっきり見えて、それが腕のほうまでつづいている。わたしの若い血はそのなかを流れて、わたしを勇気づける。

ああ、甘やかされていたわたしの手よ。お前はもっと

もっと苦しむのだ。電灯に向けると、赤く燃えている。手よ、お前は弱かったのだ、少しのことにくじけた手よ。強くなるのだ、固くなるのだ、けれどお前はなんと美しいのだろう。どんなに赤くマニキュアをした指よりも……。

× 月 × 日

姉が面会にきた。すぐ上の姉はわたしとは七つのへだたりがある。面会室でマクラをならべて夜のふけるのも知らず語りあった。自分で出てこられない母は、わたしが卑屈になりはしないかと、いつも姉を栃木の家からここまでよこす。けれども、かえってそれがよけいにわたしを卑屈にしてしまうような気がする。わたしはそうされるのがたまらなくなってきた。もう一人前に生きているのにそれを認めてくれない。

わたしは姉に、「ねえ、わたし、いなかに帰ってどろんこになって働いてみようかなあって、思うことがあるの」というと、「まあ、トコ（家の者はみなこう呼ぶ）百姓なんてばからしい仕事よ、日中の暑いときに田んぼに出て、どろんこになって働くのなんて、わたし考えたこともないわ」と顔をしかめていった。わたしはじょうだんにいったつもりなのに、あまり意外なことをいうので驚いてしまった。百姓とは、そんなにばからしい職業かしら、と考えなおしてみた。わたしにはそうは思えない。お百姓だって立派な職業だと思う。

姉さん、あなただってお百姓の子よ、それなのにばからしいという姉さんを軽べつします。いったい百姓がいなかったらどうなるのでしょう。それは、姉さんのように美しい方には百姓なんて考えもつかないことでしょうが、わたしはその反対よ。どんな職業だって働くよろこびは同じだと思います。わたしはなにだってなります。

お母さんのもとで暮している姉さんには、働くよろこびがほんとうにわからないのだと思います。

× 月 × 日

朝から小雨のふる休日だった。

久しぶりで乙番のNさんにあったので、娯楽室で過した。Nさんとは同じ級だったのに、Nさんは乙番、わたしは甲番なので出勤時間が反対で、ゆっくり話しあうチャンスがない。きょうのように久しぶりであったりする

と、二人は大よろこびで故郷の思い出や、苦しみなどを打明けあう。Nさんは色の白い小さい人で、いなかなまりがよく抜けきらない。

このあいだお母さんが来たそうだ。そのときは早番で休むのも惜しかったので、八時で中退したそうである。Nさんの現場の親父（組長さんをいう）は、むずかしいので工場内でも指折りである。その日も「母が来てるんですが、中退させてください」というと、「成績が下がってもいいのか」というので、「成績のことなど眼中におきません」と答えてやったそうだ。Nさんは自分の思うことをズバリと言えるようになった。わたしだったら、こんなときなんにもいえず、そのまま従ってしまうだろう。「まったく場ワタの親父って、有給休暇をとるのに二時間も待っていないと、休ませてくれないときがあるのよ」とNさんは一人で憤慨していた。その点ミュールの親父はいいと思った。

× 月 × 日

わたしは働きながら、いろいろ空想するのが好きだ。ときには、その空想と現実との差を考えると、ふっと悲しくなることがあるが、働いているときのわたしの頭は、いちばん冴えている。

わたしはいままで弱かった。自分のすることに自信の持てない人間だった。わたしは大人の世界を軽べつしていた。けれどもいまその世界に入ろうとしている。罪悪とうそで固まっているように見えた大人の世界、どこへ行っても欲望ばかりの大人の世界、わたしはそのなかへとけこんでいく勇気がなかった。

けれどもわたしはほんの一部しか見ていなかった。みにくい大人の世界にも、美を求めながら努力している人もある。わたしはその人に負けてはいけない。人生のオアシスに向かって、ひたむきに進むのだ。わたしたちは夢を持つ特権を持っている。両手を大きくひろげて自然にとけこんでいける自信がある。強く生きたい。そしてもっともっと苦しんでみたい。きょうも洒ぎった機械は、大きい音を立てて動いている。

矢崎健彦

〔山梨県　電工夫　十七歳〕

電工の見習として一年間五里はなれたる甲府に通う

朝々を母がつくれる弁当の温みありがたく勤務に出づる

ペダル踏む足もせわしく寝すごせし朝近道を急ぎぬ

村田八重子

〔兵庫県　事務員　十八歳〕

とつぎ来て今日はと思う日のなしと母のなげきは我が胸をさす

苗札にしるせし母の仮名文字のにじみてよめず梅雨ふる中に

阿久津政治

〔群馬県　工員　十八歳〕

くずれてはくずれてはまた盛りあがる雷雲のごとき心なりたき

生れ来て今日十七の誕生日はじめて祝える生活となりぬ

久保田耿平

〔青森県　店員　十七歳〕

働けど望みはないと言う友をはげます我も彼に似ており

水煙の雲にぞ似たり夏の日の入道雲は人を殺さず

仕事終え宵の月をながむればつかれしからだ望みわきくる

僕の職場生活

関　市　郎

〔山形県　学校給仕　十五歳〕

僕がこの学校の給仕となったのは、四月のはじめであった。それも僕の入学するはずの学校であり、入学式を二、三日後にひかえた日であった。その期間中に、僕の先輩であるMという人から、仕事の内容などをいろいろと教えてもらった。仕事の主な内容は、だいたい先生方にお茶を出すこと、謄写版刷りなどであった。最初に、僕のいちばん閉口したのは、先生方の湯のみ茶わんを覚えることであった。なにしろ四十数人の茶わんがあるのであるから……。

そこで僕は、机の脚についている先生方の名札と、茶わんをいちいち指示してもらい、形や色などを雑記帳に細かく記入して覚えようとした。しかし、それもうまくいかなかった。というのは、四十数人の先生方に時間の合間を見て、いちいちお聞きするのがあまりにも面倒だったからだ。それでも二十ぐらいはいまでも僕のノートに下手な絵まじりで書かれている。もう慣れてしまったいまとなって、それを見るとひとりでに苦笑を禁じえないのである。

しかし、人間というものは、ふしぎなもので、前から、ちょっと名前を聞いていたり、外形上に特徴を持っている先生は、第一印象でぴったりと名前をすぐ覚えることができる。と同時に、その先生方の茶わんまで、覚えることができるものだ。ある先生の茶わんなんか、その容貌と茶わんとをたくみにマッチさせることができ

た。

その先生は顔がどす黒くて、背の低い、ずんぐりと太っている容貌を持っている。茶わんを指示されてよく見たら、その茶わんが先生にそっくりなのである。色が黒と緑をまぜたような、ふちの厚い、細工をこらした、ずんぐりとした茶わんであった。（しかし、いまはもうその茶わんもない。とうとうわってしまったのだ）こんなふうに、いろいろと方法を考えて、一週間ぐらいたってすっかり覚えてしまった。

その一週間の長かったこと……。明けても暮れても、茶わんのことばかりであった。そのあいだに、謄写版刷りも二、三回やった。中学のときも、わずかにやったことがあったが、そんなことはここではなんのたしにもならなかった。というのも、この学校では、布をはらないで、すぐ原紙をはり、その上をローラーで往復させ、謄写版の手前にある紙ばさみも使わないからだ。だから、ちょっと、油断するとパターンという音とともに、ビリッとにぶい音をたてて原紙がやぶけてしまうのである。これには相当まいってしまった。

一ヵ月ばかり経ったある日のこと、ちょうど頼まれて、室のすみのほうにある謄写版がおいてある机の上に、原紙を貼きながら、はろうとしたら、そばへきたある先生が、冷やかし半分に「原紙やぶりの名人か」といった。僕はじょうだんとは知らないので、はげしい憤りを感じた。「だれだって、最初はそうですよ。はじめから上手な人なんかいないもの」僕の顔が興奮して熱くなるのを感じながら、こういってやった。

するとその先生はうなずいて、「うん、そうだ、はじめからうまい人はいないな」といわれた。僕はなんだか、ほっとして晴々したような、また先生に対して失礼だったような、妙な気持になった。あとで思い出して考えてみると、「自分はずいぶん乱暴だったなあ、よくいったものだ」とつくづく考える。

さて、もう一つの主な仕事というのは、授業の始まり、終りの合図である。この学校ではベルを用いている。これもできるだけ正確にしなければならないのは、いうまでもないが、はじめはずいぶん神経質になっていた。十分ぐらい前でも、僕の机の前の左の壁にあるベルのそばに来ていなければ気が済まなかったほどである。おまけに、時計が真うしろにあるのだから、うしろをむいて、

そわそわしたり、どうも落ち着かない。ちょうど授業中便所へ行きたくて、気がせかせかしている時の気持に似ている。それを気づいた先生方は、にやにやと笑っている。どうも気まりがわるい。

こんなふうであったが、ちかごろ慣れきってしまったのか、逆に正確ではないときも出てくるようだ。一ヵ月ぐらい前のある日のことであった。その日はどうも睡眠不足で眠くてしようがない。机の前にすわると、なんとなしに、うつらうつらしてしまう。ピーン、ピーン、ピーン時計が十時を打ちはじめた。と、僕は無意識にかたわらのベルをぐいとばかりに押した。授業の終りのベルが、鋭く校内へ鳴りわたった。それによって、僕の全神経がさっと緊張した。

そのとき、さっと一つのことが脳裏をかすめた。「しまった。四十分授業だった」僕の口から、なかば、うめき声のような、悲痛な声がもれた。それと同時に、僕ははずかしさでいっぱいになってしまった。先生方もなんだかふに落ちないようすで、僕の全身にいっせいに目をそそいでおられる。僕は気が気でない。いそいで職員室を出てむこうを見ると、早くも、N先生がパターン、パターンと、上ばきをならしながら、やって来るではないか。

「先生、いまのベル、まちがったんです」「そんなことといったって、もうみんな出てしまったよ」と、まるで、まちがいをはじめから意識しておられたような冷たい言いぶりだ。このときほど、自分は給仕というものの、情けなさ、つらさを強く感じたことはない。

そのうち各生徒代表までがあたふたと駆けこんでくる。まったくなにをしていいかわからないので、ただ、うろうろするほかはない。しかし、その場はどうにか先生方の計らいで、事なきをえたが、あとで、授業へ出られた先生方に、いちいち、あやまって歩いた。「たいせつな時間なのだから、気をつけなければならないよ」とか、「神様でないのだから、まちがうこともあるね」と、やさしくいってくださる老先生もあった。これもその先生の長い教員生活における賜物であろうか。僕にとっては、慈愛のこもった、あたたかい言葉に聞えた。僕の目には、知らず知らずに涙が宿っていた。

それは、父親のない僕にとってほんとうの父親のような、慈愛のこもった言葉であったから。こういうこと

は、二度とくりかえすまい。そして、つねにその先生のような大きな心を持っていたいものだ。僕はつくづく感じた。そんなことがあってからは、合図には細心の注意を払ってやるようにしている。もう一つのお茶出しにしても、はじめのようにくよくよしないことにした。「飲みたいときにはご自由にお飲みください。すべて準備してあります」このようなゆとりのある心にもなった。けれど、朝と昼だけは特別に熱いお茶を配ろうと心がけている。

勝写版刷りの力は、いまもって好きにはなれないが、これは自分の義務ででもあるのだから一生懸命やろうと思っている。

だけど、試験が近づくとちょっと憂鬱になる。こんなとき「負けないぞ。どんな困難をも克服してみせるぞ。プリントぐらいなんだ。そんなことにくじけるな、関市郎がんばれ、お前は高邁な理想をもって進まなければならないのだ。若いんじゃないか」そういう声が心の奥から聞えてくる。これは僕のつらい苦しいときのみ聞えてくるなぐさめの言葉なのである。

赤い自転車

相場和雄

〔秋田県　郵便局員　十七歳〕

雨の日も風の日も休みなく、時間に追われながら、一心不乱に町々を赤い自転車で走りまわるのが私の仕事である。郵便配達といえば、のんきな人間の形容詞に用いられているかとんでもない。人員はどんどん整理され、郵

便物はどんどんふえてくるばかり。私たちは朝七時半に出勤して、まだ町々の眠っているうちから働きはじめる。私たちの職場には二百五十人ぐらい職員がいるが、そのうち外務員は百人足らず、私たちのような年少者は二、三人だ。

私がここにつとめるようになったのは、いまからちょうど三年前のことである。幼いとき父母を失い、遠い親戚に育てられた私は、どうしても念願の高校進学を許されなかった。そこで、家の仕事である養蚕を通して自分を完成する道を求めようとしたが、朝早くから夜おそくまで働きづめで余暇はまったくなく、通信教育をうけるにも本を買うにも、金の入る道はなかった。

こうした毎日のうちで私は前途が不安になり、なんとかして自分で生計を保てるような職業をもたなければならないと、深く決心しはじめたのである。ちょうどこのころ、赤い自転車にのった郵便屋さんが思いがけなくうれしい便りをもって来てくれた。それはかつて中学在学中に、家の人にも教えず、まったくかる自信もなく受験した「四級職公務員試験」の合格通知書だった。僕はうれしくて飛上がってしまった。そして就職に反対する家人に、「必ず立派な職業人になるから」と誓って、やっと許可をえたのであった。

五月二十六日、初出勤の日、私は胸いっぱい希望と感激にみちあふれて、朝一番に秋田郵便局にかけつけた。その日付で本俸三千八百五十円の辞令をもらったときの晴れがましさ、はじめてみる職場の明るさ。私はあの日の感激を一生忘れることができないだろう。私が最初に命ぜられた仕事はポストをあけることだった。秋田市内の主な官庁の在り場所さえしらない自分にとって、これはなかなか苦しい仕事だったが、日ごとに郵政事務の重大な役割がわかりはじめた私は、一日々々ほんとうに働き甲斐のある日をすごすことができた。

この仕事が一月ほどつづいたあとで、はじめて配達にまわされた。一人前の郵便屋さんになるには三年もかかるといわれているが、たしかに一見ただ手紙や葉書をとどけさえすればよいようにみえるこの仕事も、やってみればなかなかむずかしいものである。第一、郵便に関するおびただしい法規をしらなければならないし、配達する際には世帯主はおろか一軒々々の家族の名前を全部おぼえていなければならない。佐藤だとか、高橋だとかのあ

りふれた名前で、しかも子供どうしやりとりした手紙は僕たちにとって、いちばん大変なお客様である。

あるときこんなことがあった。書留郵便を配達しに行ったところ、折あしく受取人不在で代人がうけとってくれた。規則によれば代人の場合、代人の資格とか姓名を書いてもらうことになっている。そこで僕も「名前と資格を書いてください」といったところ、相手の人は「お前はおれを知らないか、おれはおれだ、おれは秋田市に一人しかいないんだ」とおそろしい見幕でおこり、「郵便局長をおれは知っているんだぞ」とかなんとかいって、なかなか書いてくれない。

そこで説明したり頼んだりしてやっと書いてもらい、やれやれと局に帰ったところへ、早くも先刻の人から局長のところへ、「郵便配達人は生意気だ」とのおしかりが電話されている。不親切ではいけないと上の人に注意されたが、私はそのとき、ほんとうにむずかしい仕事だと痛感した。

あるときは番犬にかまれ、あるときは猛吹雪のなかで歩けなくなって、田んぼの真ん中で電柱につかまってしまったことなど、つらいこともあったが、またたのしいことも数かぎりなくあった。なかでも年末、皆が徹夜をつづけて整理した年賀状をもって、元旦の朝早く凍てついた道を家々に配達するときの気持など、郵便配達以外の人々には想像もできない喜びだろう。

ところがこんな毎日のうちに、ときもとき、私の身の上に大きな変化がおこった。それは生れてはじめて病気にかかったのだ。

当時私の日程はちょうど農繁期にあたっていたので、朝一時ごろ起きて家の刈入れの仕事をし、六時半に出勤、帰ると待っていましたとばかり田に入って、夜九時すぎやっと晩飯というありさまだった。

私は病気になったとき、つかれが出たのだと直感した。そして忙しい家の人の様子をみると、早くなおらなければと苦しんだ。しかし、このとき家の人は予想外に私に冷淡だった。仕事をする気がないからだ、顔が青い、悪い病気だろうなどと冷ややかにいわれて私は気が狂いそうに悲しかった。そして身寄りのない私は、しみじみ父母が生きていたらなあと思い、同時に、自分で生きなければだめだ、自分以外頼るものはないのだと痛感した。

ふだんから私が郵便局につとめることに賛成でなかった家の人と、この病気を機に折合いがわるくなって、私はとうとう十月三十日に家を出てしまった。その晩はなにも考えずに、ただ寝るところを一生けんめい探し、友だちのA君の家にとめてもらった。

こうして私は現在の生活に入った。私はこの日を「人生の再出発」だと考えている。考えれば考えるほど、不安と希望が入りまじって、そのなかでも私は第一に経済問題に悩んだ。そして悩めば悩むほど、あらためて職業のたいせつさをはっきりと感じ、仕事を通してしあわせになりたいとしみじみと思った。「生」を保ち、幸福を願うことは、職業をたいせつにし、立派な職業人になることだろう。私はこうしたうちに一人で将来のプランをたてた。

第一に考えついたことは、中学校卒業以来三年間の念願だった。定時制高校への入学だった。一通り仕事の知識を身につけた私は、もっと広い知識を身につけたい、実力をつけるには、学校にゆくのがいちばんよい方法だろうと考えたからである。そしてことしの三月試験をうけ、さいわい合格したので、はりきって通学している。

きょうは一日あつくて、配達の途中頭が痛いほどだった。でも配達の途中、道路の真ん中で、おれの郵便をくれといってきた人に、相手の気持をわるくせずに説明することができた。これもつとめはじめたころにくらべてなんという違いだろうと、三年の歩みをふりかえってわれながら心楽しかった。

あすからまた楽しい学校の生活がはじまる。みんな真っ黒な顔でやってくるだろうなあ——同級生のうちには職場と学校が両立するかどうかと話している人も多いが、私はどうしても両立させようとはりきっている。そして全国で何百万という青少年のうちには学校にもいかれずに、黙々と働いている人もたくさんいるのだと思うと、私はまだまだわがままな日をすごしているのだと気がねさえ感じてしまう。

よき職業人として学ぼう——これをモットーとして立派な人間完成のため、がんばるつもりである。

機業の家

舟久保　とし子
〔山梨県　絹糸機業　十六歳〕

×　月　×　日

「ああ、きょうもまた一日、織るんだなあ。ほんとに織りづらくていやになっちまう」と、ひとり言をいいながら、つらそうに立ちあがっていく姉たちのうしろ姿を、食事のあとかたづけをしながら見おくっていて、なんともいえないさびしさにおそわれた。中学一年どころまでは、このハタの音も、私たちを養ってくれる両親のように尊く思われ、ズシン、ズシンとひびいてくるハタの音を、ブランコにゆられながら、オルゴールでも聞いているように心地よく、深い眠りにつく私だったのに、デフレ政策にともなう内需の不振から、換金売り、不渡手形の増加、手形の長期化がその深刻さをきわめて、倒産、賃下げ、廃休業、賃金遅払、解雇などがとてもはげしくめだってきた。このため金は少しもはいってこないし、糸を買う金さえなく、バタバタと倒れていく中小企業者が目に見えてふえてきた。この恐慌到来の憂色につつまれ、ひとすじの冷たいものが背中を流れるのを感ずる。そして大人たちの争いもつねに耳にする。

×　月　×　日

勝手のかたづけをようやくすませて新聞を手にしていたら、やはり新聞を読んでいた父が「とし子もそろそろ工場に入っていまのうちに仕事を覚えるんだなあ、土屋さんのA子さんはへえ、工場に入って一人で一台平気で

織れるそうだぞ、それに羽田さんの子なんか中学どころか、小学校さえ卒えてないんだ、それからみるとお前なんか幸せだ」とつぶやくようにいった。またいつもの癖がはじまったとは思いながらも、とてもつらかった。いま機業は私たちの予想外に深刻な危機に立っているらしい。だから私にも、ハタの織り方を覚えさせて、いざ生産に拍車をかけるときには、普通の女工同様に一生懸命織らそうと考えているのだろう。あんなにも頼んだ高等学校へやってもくれないで、だれがいまから工場なんかに入るものか、いくら、家内工業とはいえ、私の友だちのうちには、洋裁に行っている人だってあんなにたくさんいるんじゃあないか。電話を入れ、電気蓄音機を買い、庭に植木を植えて、なんの価値があるのだろう。八人もの姉弟がありながら、無理に好みもしないハタに入れなくとも、自分一人ぐらい学校にやってくれてもいいじゃないか。それに学校に行くあいだに、勝手の力を手伝ったり、休みを利用しては、そのあいだに少しずつ織り方の練習をすれば、時間ももっと合理的だし、政養もつくし、二つの利益になるじゃあないか。また無理に私が家の職業につかなくても、別の場所で働くことだって許されていいはずではないか。私はいままでの不満がムラムラとわきあがり、胸がむかむかしてくやしさにふるえ、自分でもおさえきれないほど興奮してきた。そして心にもない反抗をしてしまった。父が「お前などは理想ばかり高くて、どうしようもない」と、どなり出した。私は仕方なしに、そこを立ちのいた。当然のことを望むのさえ、理想という一言で頭からおさえられてしまっても、私らはじっとがまんしていなければならないのだろうか。

× 月 × 日

工場に入れば大部分の人たちがはじめのうちは何回となく織り込むという火を、私もきょう経験した。かけちがいをしたのだ。はじめのうちはぼうぜんとしていた私も、同わきで腹をかかえて笑っている姉たちの声でやっと気がついたのだ。一回火を織り込むと一ヤール引かれるそうだが、はじめてなので、別に文句もいわれずにすんだが、幾百本かの切れた糸を一生懸命入れてくれる姉たちには悪かった。私が社会人となり、工場に入ってからはじめてのことなので、驚くのもあたりまえだろう。それ

にしても、けさからの私はなにかに心をうばわれていて、じっくり織機と一つになっていられなかったようだ。いったい、なにが私の心をこんなに落ち着かせないのだろうか……。私はそれをちゃんと知っている。知っていながら、それを考えまい考えまいとしていたのだ。

きょうは土曜日で、市民合唱団の練習の日だった。私の友だちの幾人かは、楽譜をかかえて、きょうも市立図書館へ集まっていることだろう。コーラスは中学時代の私のもっとも大きな心の糧だった。それが卒業を期に、まったく私から遠ざかってしまったのだ。毎日家にばかりいて、頭のなかがくしゃくしゃしている私に、コーラスがどれぐらい必要かわからないのだが、家の都合で練習に通うことは、ほとんど絶望に近いのである。

考えてみれば、私たちの町には、流行歌をうたうだけの気持はあっても、内外の名曲を鑑賞したり、心を一つにして、楽しい歌を合唱しようなどという気持はさらに感ぜられない。その一つの例として人気流行歌手などが来たときは、なにかの祭日のように、にぎわうのに、独唱会などはほとんどの人が、「あんなものをきいてもなにがなんだかわからない」というしまつだ。町ぜんたいの人が機業の仕事に追われているのも原因だが、もっと根本は、そういう音楽には、ぜんぜん無関心なのだ。だから私が「音楽にやってください」と父兄に頼めば、きまって「そんなに夜おそく」と時間をいい口実にされ、その後にはそんなものを習ってなんになるのだ、お嬢さまとは違うんだぞ、と二の句もなくことわられてしまうのが常である。いまごろ友だちはなんの歌を練習しているのだろうか、あるいは発声練習かな、大きく口を開いている場面が想像され、心がいらだってどうしようもない。

× 月 × 日

父が青い顔をして家に入ってきた。私らはなぜだかだいたい見当がついた。きっと織物に関してのことだろう。きょうは市だったのだ。父は勝手に入って行き、母や兄と力ない低い声で何事かを話していた。倒金されたのだそうだ。いまどきたとえ少ない金にしても、中小企業の私たちの家には大きな影響である。最近、そこここの家から道路工事に出る男の人が多くなった。現金収入の目当てだろう。ハタ織の景気がよかったころは土方などみな侮蔑していたのに、その土方さえも満員だそうだ。女子

でも勤めに出たいと願っている家が何軒かあるというが、いまさら急に勤めるにしても、何の準備もしてない人々にどうして勤められよう。私はいまほど、高校を卒えて銀行や市役所へ通っている人たちが、うらやましく思われたことはない。それと同時に、私の進学に反対した人たちには大きな顔をしてやりたかった。いまこそ、大人の人たちがこの不況をまねいた原因を反省してくれるだろう。売れるからといって、子供の教育も、要求もかえりみず、無茶苦茶に織り出せば、生産と需要のアンバランスから不景気がおそうことぐらい、当然すぎる理屈ではないか。

× 月 × 日

ほとんどの家のハタは止まった。織っている家でも、せいぜい一台か二台をピッタラ、ピッタラである。織っているとはいっても、ただ名だけで、利益はなく、ほとんど元値同様だそうだ。姉たちが織って、私たちは全部で田の除草である。そちこちの田に女の人の姿が見えた。いままではあまり見たことのない風景だ。田の草取りも苦しい、これまで野良仕事をさせられたことはほとんどなく、なれない仕事だけに苦労だった。この土地の女は損である。ハタが売れ出すと年齢も考えず徹夜同様に織り、売れなくなると、田畑につれて行かれては思いきり使われ、女親などは家に、疲れて帰ってきては、また食事の用意をするのである。なんと悲しい女の立場ではあろうか！ 自分もそんな身になっていくのだろうかと、情けなく思いながらも稲株のあいだの泥をゴッゴッとかきまぜつづけた。ときどき腐ったいやなこやしのにおいを鼻に強く感じながら、腰の痛くなるのもこらえているうちに、手はゴッゴッになり、死皮がぶっくりふくれていまにも破れそうである。疲れたせいだろう。寝床に入ってからも、身体のそこここがひりひり痛んだ。

× 月 × 日

半日、工場に入った。このあいだからなんだか工場に入るのがおっくうになった。ステッキをかけるにも間違いはないだろうかと何回も見なおす。姉たちはみんなにやにやしながら私に注目している。ステッキをかけて少しも織らないうちから、糸が二本も三本も切れる。これもコツがあるそうだが、私にはなにがなにやらさっぱりわか

らない。きょうはただステッキをかける練習だけだ。二時間も立っていると、足が棒のようになり、体がしだいに疲れていくのを、自分でもはっきり感じるくらいだった。いったい、こんなに立ちきりの職業は数少いであろう。ハタが狂いはじめると一日立ちきりである。私などまだたれないためだろうか、夕食のときはあまりの疲れに、体がぐったりしていた。みんながとてもうまそうに食べる飯も、私にはその味がわからないばかりか、ほとんどのどへも通らないほどだったが、みながなん杯も食べるので、私もしゃくにさわって、むやみに食べてお代りを要求した。なにがなんだかわからない、ただみんなと同じように食べただけのことだ。腹がぶくぶくしているようだ。機業の女工たちは、きょうの私のように黙黙とたくさん食べては一日立ち通し、そしてまた寝ては起きる。こんな調子の毎日を送っているから、身長が短く、体重が重くなり、横にばかり太るのだと考えた。現に私自身、二、三日工場へ入っただけで、もう足がむくんできたような気がする。

× 月 × 日

あすは金曜日だ、ハタを市に入れるため、昼間一生懸命織ったので早じまいだった。みんなはもうとうから電気を消して寝てしまったらしい。私はこのあいだから読みはじめた本を今夜も読もうと思って開いたが、まだどこかで織っているらしいハタの音がガチャガチャし、空モーターがウーウーうなり、大ベルトと、鉄のすれあう音が、いっしょになって回っているので読書もできない。そして姉や妹たちが睡魔にとりつかれたように、ぐっすり眠っているのを見ると、いやに腹が立つ、仕方なしに床に入り横になるが、まだハタの音が頭から離れない。

× 月 × 日

昼ごろ、若草会（自由詩研究会）に入らないかと電話があった。在校中から誘われていたが、会員がみな光輝ばかりなので遠慮していたが、大部分がハタ屋の人々だと聞いて安心した。毎日家にいて、なんの不平もいわず、いわれるがままに黙々と仕事をすれば父兄は満足かもしれないが、私という人間はなんの発展も進歩もなく、月日の流れとともに落ちぶれていくだけではないか。限られただけの食物を与えられて、その味さえわからずに

満足して働いている馬や牛とは違うのだ。そうだ、若草会へ入ろう。そして大いにはりきって書こう。この町には、こういう会はほかにはないのだ。たとえへたな作品であっても、いくつもいくつも書いていくうちには、少しは上達するだろう。もっと自分を愛し、自分を見つめて進んでいこう。他人がなんといおうとも——。

× 月 × 日

買物に行った帰りに、友だちから定時制高校へ行かないかと誘われた。私はすっかり、あきらめていた勉強がまたできるのかとうれしくてたまらず、心がうきうきした。〝まだ勉強する機会は残っていたのだ〟と、もう、あれこれと高校生活を想像した。南風と北風が交互に吹いて寒暖晴雨のような落ち着きのない一日であった。空は水のように澄み、夕風が吹き落ち、紫の影があたりいちめんになるころ、力強い晩鐘の音がひびいてきた。私はいつものようにその音に誘われて、小走りに寺の土手にかけのぼった。そして、私は小暗い杉の木の陰に立って、静かにくれていく山の端をながめた。青田が見え、林が見え、風がはこんでくるハタの音と、高台の木立のなかからひびいてくる鐘の音をききながら、きょうの高校のことについて考えた。しかし現実は、私の喜びを、より高めてはくれなかった。家に帰るや、いきなり定時制高校進学のことを父に話してみた。父は「女が一人で夜道を歩くなんてとんでもない、いくら勉強のことだとはいえ、お前は親や姉弟の顔を汚すつもりか。そんなところに行ってもろくなことは覚えない」目をグリグリさせ、それだけいってどこかへ出て行ってしまった。私はその言葉に対しての意見をいおうとしても、だれも聞いてはくれない。ただ、すぐ上の姉だけは、自分も私と同じ経験をしてきただけに、「なんとかして父をなっとくさせてやりたいものだ」といろいろ協力してくれたが、私の町では夜学など女の行くところではない、ときめこんでいるため、どうすることもできない。だから、いままでの定時制には女は一人も行かなかったのだ。だれもかれも夜学を毛虫のようにきらって、良い方には理解してはくれないのだ。だから、だからこそ、私は行きたいのだ。いまここで、私が倒れては、私たちの町の女性は永久に救われないのだ、しかられてもかまわない。

× 月 × 日

私は定時制高校志望のことを再び父に話そうと常に機会をうかがっていたが、またいつかのように、かえってお説教されるだろう、あるいはもう相手にはしてくれないだろう、という気持が先に立って、ついに言い出せぬまま、きょうになってしまった。教育にてんで無理解な父、夜学にやるだけの関心があったらこんな悩みはないであろうに、いまごろ定時制の募集をしているのも、行く人が少ないからだ。親たちに理解がなく、行きたくても行けないからだろう。こんなことをくりかえしくりかえし考えては思い悩み、苦しい何日かは過ぎ、とうとう父に頼む勇気が出なかった。そして、自分がしみじみとあわれになった。あまりにも弱い。もっと勇気を出して、けっしてくじけてはと思えば思うほど、胸のうちが苦しく煮え立つ。もう考えまい、自分で自分を苦しめるだけのことであるから。もう私には学校と名のつくところには縁がないのだ。私にはまず、私に与えられた仕事に全力を傾注してみる必要があったのだ。歯をくいしばって、一つの仕事に突き進めば、おのずから自分の進むべき道もひらかれ、いわずとも、私の悲願を周囲の人たちが理解してくれる日が来るにちがいないのだ。

× 月 × 日

夕食後、帳面や本をぎっしりつんで日記を書いていたら、うしろでだれかぶつぶついう声が聞えた。ふりむくと父が、いま湯から上がって上気した体をふきながら、「とっとと早く寝ろよ、学校を終えればもう勉強はいらないのだ、それよりあすの仕事のことを考えるんだ……」こんな父の言葉も最後までは聞きとれなかった。きょうの父の言葉はいつもと違う。学校へ行っているときも、これと同じようなことは何回となく聞いたが、そのときは、私の健康を親の立場として考えてくれたからで、きょうのように学校を終えれば、もう学問とは無関係だという父。あまりといえばあまりである。景気のよさそうな織物が出れば前後のことも考えず、労働基準法の時間さえ守れず、そのうえ、自分のかわいい子に学校を長欠までさせて織らせ、大人は市のたびに金があるにまかせて、酒をのんでは遅くなって帰り、家人が一日の仕事をようやく終えてくたくたに疲れて眠っているのにもかかわらず、大きな声をしてはどなり、また歌をうたってはさわぎ、疲

れては床につき、朝は遅くまで、ぐっすり眠るのだ。そして、女工は朝早く起きては、工場に飛びこみ三度の食事も思うようにきらくな気持では食えず、休むひまはもちろんない。こんなことでいったい、いつ好きな本や毎日の新聞が読めるというのだろう。よりよい、消費者の要求に応じた製品をつくるのに必要な技術や方法は、機業に従事している人々が自ら進んで研究しなければならないのだ。こんなことを考えれば、大人たちが反対している学問はぜひとも、この土地、この職業にこそ必要なのではないだろうか。私も人間の一人である。どんな上手な口実をいって私をたぶらかそうとしても、いまの私にはなんのききめもない。もうそんなことに負けないぞ、私たちはロボットではないのだ。ただ毎日々々なんの進歩も反省もなく一日を過すので、もはや真に生きていないのと同じなのだ。黙々と働いている女工らよ、なんの目的のために、ただ機械のごとく、字も書かず、本も読まず、時が来ては流れ、流れては来る日を、食っては寝、牛や馬のようになんにも考えず、からからに干し上がった切り干のように、ぼんとうにしぼんだ頭をそのままかかえて、主人のいうがままにやっていていいものか。空中にくっきり浮ぶ一つのゴム風船のようにふくれるだけ自己を伸ばすのだ。あの風船だって、空気を入れてやらなければ、けっしてけっして、あのような弾力ある丸い風船にはならないのだ。このままほうっておいてみろ、このしなびた頭はなおさらしおれて、野道にすてられた草のようになるのだ。親たちは自分の子供がまた自分と同じ苦しい道を歩んで行けとでもいうのか、ばかな。私はこの町の全部の人々に向って叫びたい。来る日も来る日もなんの変化もない。そして、楽しさを知らずに働いて、なんの目的で、なにを築んで働くのだ。義務教育である中学さえも終らせないで、なんのために、なに者のために犠牲になっているのだ。そして自分もしだいに周囲の悪環境にとけこんでいくのだろうか。いや、なってたまるものか、どんなアラシがこようとも、私は私の道を行く、そうしてこそ人間の価値が生れていくのだ。

× 月 × 日

毎日々々工場に入って織っていてもその製品がなにに使用されるか、特徴、その製品については、自分で織りながらもしらない人が多い。私もその一人だったので、

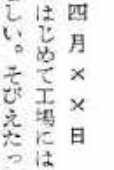
ひまな時間を利用して父たちにいろいろ聞いてみた。いま、私たちの織っているサテンが案外売行きがよく、とくに洋服の裏地に使用されるそうだ。サテンとは、しゅすの織物のことで、上等のサテンだとなめし皮のような感じの非常に高級な織物だ。しゅすは手触りがよく柔らかでとても滑らかで、なんともいえない味である。これはできるかぎりの細いたて糸をたくさん使い、それがすべて表面に出るからだそうだ。しゅすの品質を現わすのに三六〇〇本級とか、六〇〇〇本級、八〇〇〇本級というが、これは織物のなかにたて糸が何本使ってあるかを現わす数字で、数字の多いほどたて糸が多く使ってあるので高級品だ。私の町では、まだこのようなよい品を織っているのは数少なく、普通人絹を使ったサテンでは、まだこのようによい品をつくり出すことはなく、せいぜい六〇〇〇本から七〇〇〇本級までの物で、だいたい三六〇〇本級の粗末な物が多い。出来上がった製品の風体も本絹にくらべて、数段見劣りがしている。人絹は細い糸をつくることができても上手に織ることができないので、なかなか困難だったが、いまでは細い糸を製造することに成功し、新しく研究完成された合成たて糸糊付剤の使用によって、ついに一万本以上の高級なサテンができるようになった。このしゅすが洋服裏地としての必要条件は、㈠摩擦に強いこと ㈡伸び縮みしないで、ひだにならないこと ㈢織物の表面が平らでよくすべることで、この三つの特徴を備え、樹脂加工の完成で、防皺、防縮ができている。以上のことを父の話や、新聞、参考書のなかから調べて、ようやく少しばかりの知識をえた。そしてハタについてもいろいろな興味がわいて来た。

× 月 × 日

最近工場で、何ものかを見出した。そしてそれが私をいつも元気づけ私の心を暖かくふくらませてくれるのだ。その柔らかい絹糸、一つのクレから、ワクに移す。そのはじめは、薄くてなんの興味もひかないが、十分、二十分とたつうちに、ワクいっぱいになる。ふっくらとなめし皮のようにつやのある絹糸が、青虫のようにふくれているのを見ると、だれもが気持よくなる。人間の心もつねにこのようにふっくらとして暖かい心であったらなあ。……だから、私は工場に入って、いちばん早く行くところがこのくりこし台だ。「糸正直」といって糸ほど

正直なものはない、とよく耳にするが、私は自分で実際に絹糸を扱ってみてはじめてよくわかった。このよこ糸の絹糸も、一回も切れずにすむこともあるが、そのうちには、よこの糸といっしょにくっついてすぐ切れるのもある。そんなとき、糸口を見つけだすのが、なかなか思うようにいかず、そっち、こっちいじくり、しまいには、くしゃくしゃにしてしまうこともある。この絹糸も、人間と同じように、進む道はただ一つなのに、そのなかにいろいろの邪魔物が入り、その未来をめちゃめちゃにしてしまうのだ。そんなときには心がいら立つが、しかしここで捨ててしまってはもったいない。これまでに織れるようにするには、容易なことではない。何人かの手数が、かかっているのだ、と思っては一生懸命でさがすのである。そして、その糸口が見つけ出され、いつまでもいつまでも長くつづいて切れず、フクいっぱいに満ちたときの私の喜び、このいやな社会をも、また、自分のとがった気持をも、あのふっくらした糸が、やわらかい絹糸が、みごとに吹っとばしてくれる。そして、たえず私を見守ってくれるような安心感がする。こんなことから、ハタについてなにもわからない私にも一種の好奇心がわいてくる。そしてハタを織りながらも、この私が織ったのを、どこのどんな人が着てくれるのだろう、どんな気持でと、ふと楽しい空想にふける。すこしばかりのキズを織っても、人の顔にキズでもつけたような気がして、たまらなく可哀そうになる。だから、ちょっとのキズも織らないようにと一生懸命になるので、しぜんにハタに関心がわいてくる。と同時に、この織物が内需ばかりでなく、ひろく海外へ輸出されるようにならなくては、と考えた。それにはもっと良い機械をどんどん研究しなくてはならない。第一に、高い技術を身につけるため、ぜひとも教育が必要であろう。私たちが大人になって、この町を背負うようになったとき、多くの私たちの子らを教育させ、長欠など一人もさせないようにするのだ。いまの親たちは生れながらにして、教育より、人間完成より、むやみに働くことのみを重んじるこの町の慣習のなかに生活してきたのだから、いま急にそういう考えを捨てろといっても無理かもしれない。だから、自分たちの未来を考えて、あせらずたゆまず、まず自分の道を切りひらいていくことに努力しなければならないだろう。そうして、自己の特徴も、希望も頭から否定されて、根強

い封建性の犠牲になっている私たちこそ、だれよりも先立って新しい幸福な社会建設の歩みを力強くつづけなければならないのだ。



ぼくらの軌道

青木　健
〔長崎県　機械工　十七歳〕

四月××日

はじめて工場にはいった。おどろいた。大きくてやかましい。そびえたっているんだから。ぼくはきょうからこの古い伝統をもつ造船所の一員なのだ。

四月××日

造船部の二年生の人たちのハンマーふりを見る。ピー、ガチャン、ピー、ガチャン。ピーはふえの音、ガチャンはみんながそろって打った音。うまいものだ。ぼくがあれほどになれるだろうか。――あっ！　だれかが手を打った。血が出た。血のついた手がふるえている。いたいだろう。でもやめたりなどしない。つぎの瞬間にハンマーは確実に、タガネの頭に食いついている。指導員があわててやめさせた。大きな吐息がぼくの体から出る。ぼくがあのように強くなれるだろうか。

四月××日

はじめてハンマーをにぎる。バイス台に手をかけるのもはじめてだ。ちゃんとゴムの輪が用意されている。そのあたたかい心に感謝する。M先生は、あっちにいったり

こっちにきたり、ひどく気をくばっている。きょう一日をケガすることなく実習しえたことを神に感謝する。

五月××日

うまくいかぬものである。タガネを持ってもヤスリを持っても。はじめての応用作業だというので、すごく張りきってたのに、時間はかかり、寸法は違い、でも、ものをつくるということはたのしい。

六月××日

ぼくらは、機械、器具、製罐、鋳造と二ヵ月ずつ工場の実習をまわるのだそうだ。自分に一番適する職種をはっきりと知るためだとのこと。で、三十五人を四つにわけた。ぼくらは器具工場からはじめることになった。ぼくはまだ器具工場を知らない。どのようなところかはあすわかる。きょうははやく寝よう。

七月××日

工場長の前に出てどぎまぎした。工場長だって、まっ黒になった作業服が九つもならんだんだから普通ではなかったろう。工場長はケガせぬようにと、そればかりをいう。なあに大丈夫だ。がんばってみせる。すぐ鍛造、熱処理、メッキにわけられた。

七月××日

岸壁の高花丸に見学に行った。先生が写真をとってくれた。ぼくは先生の腕前にケチをつけたくない。それでよくできるようにと祈る。

八月××日

かど屋のトンチンカン、トンチンカンの前にいつまでもつっ立ってた幼いころを思いだす。いま、ぼくらはそのトンチンカンをやっている。トンチンカン、トンチンカン、汗がポタポタ落ちる。トンチンカン、トンチンカン、二人の呼吸は合っている。トンチンカン、トンチンカン、丸パス、片パス、コンパスがつぎつぎにできていく。

八月××日

器具実習場もきょうまでとなってしまった。先生は一

人々をよんでなにかを話している。ぼくの番になった。「きみのお父さんはいくつになるんかい」「いません」「え、おらん、そんならきみが、がんばって……」なんだか泣きたくなって来た。

九月××日

きょうから機械実習場。ここの工場長も、ケガしないように注意を何回もくりかえした。弁当当番も、手洗いの水くみも一年生がやらねばならないそうだ。これも修業だ、がんばろう、そしてはやく二年生になろう。

十月××日

もう二ヵ月がすっとんでる。職種決定のさいには機械実習場を希望しよう。F先生のうまくない演説口調のあいさつに送られて製罐工場へと。

十二月××日

電気溶接、ガス溶接、切断、ニューマチック、ピョウうち、めずらしくおもしろいものばかりである。溶接では意外にもガスのほうがむずかしかった。ピョウうちはきつい。くたくたになる。

みんなは、いつもにこにこしている。「ワッハッハ、ワハハ」みんなはすぐ笑う。

ぼくらの九人組も、もう五ヵ月、いまでは一人々々の性質、気性、なんでもかんでもわかっている。みんなの呼吸はいつもぴったり合っている。

十二月××日

「あん先生は盗賊ん親分のごとしとるね」

「しからばわれわれは子分かな」

「ワハハ」「ウッフフ」

汚れた九人をひきつれて、カンテキにたく木ぎれをひろいまわる姿は、そう見えるかもしれない。でも先生は盗賊の親分でもなんでもなく、ぼくらがすこしでもあたたかく実習できるようにと考えてくださる優しい先生なのだ。

十二月××日

休憩時間にぼくらを二組に分けて、腕ずもう、棒押し、棒引き、いろいろなことをさせて、成績を表にあらわ

す。先生には子供っぽいところが多くある。おかげさまで、ぼくらは愉快にすごすことができる。

一月×日

鋳物工場である。はじめの一ヵ月は木型で実習することになった。ぼくらの指導員は、しじゅう目をショボショボさせているおじいさんだ。みんな意外な顔をしている。M先生は、あの方はもうながいこと人をみてきているんだから、ごまかそうとしたってごまかすことはできない、みんなまじめにやらねばならない、としきりにおどかされる。

一月×日

カンナを持って一ヵ月、中学で木工じまんのボにも、もうまけないだろう。弟の顔をみて、ウッフフどんなもんでえ。その日がくるのはいつのことやら、たのしみだたのしみだ。

二月×日

「おれがこまかときゃあ、砂遊びばすいとったもんのう。おれが砂遊びばしよれば、母ちゃんのきて、またしよる、着もんのよごるっ、ちゅうて遊ばせよらんじゃった。おりゃあ砂遊びばしてやろうと思うて、ここに来た」

という。鋳物の先生は愉快な人である。やさしい人である。職場にまで自分の子供の写真をはっている。

二月×日

みんな、ハッ、ハッと肩で息をしている。岸壁にすわりこんで……。海からの風なんか、ちょっとも寒くない。先生にはぼくなんかより大きな娘さんがあるというのに、いつも先頭をはしる。元気なもんだ。そして先生は話が上手だ。戦時中は女学生に体操を教えてたそうだ。女学生は、体操させる先生に見とれてまちがう、先生が注意すると赤くなって……と、このような話がつぎつぎに口をついて出る。

二月×日

きょうは型を七つもつくった。TよりもKよりも多い。湯を入れたのだがよくできているかな。あすはひとつ早い船で出勤しよう。

二月××日

下宿しているぼくが、母を思い出し、母にあいたくなるときは、病気したときと、世の中がいやになったときである。ぼくらの世界は、実習場にあるんだから、実習場がおもしろいときは、世の中がおもしろい。このごろぼくは母を忘れている。あす手紙を書かねば……。砂いじりもうまくなりましたと。

三月××日

きょうで一年の基本実習もいちおう終りである。器具も機械も製図も鋳造も、全部まわった。ヤスリを持ち、タガネを持ち、ハンマーをにぎり、焼入れ、焼なましもできる。鍛造もできる。機械運転もできる。溶接、切断、ビョウうち、なんだってできる。カンナももてる。ノコももてる。鋳型つくりだってできるんだ。

先生方のおかげで、小さくて青くはあるが、たくさんの実をつけたのだ。やがて大きく赤く熟すだろう。ぼくらは太陽にむかって大きくのびようとしているのだ。

四月××日

職種決定。機械場にこれた！ 希望どおりになったのだ。はやく家に帰りたい。はやく母に知らせたい。

六月××日

朝八時。サイレンがなる。すぐ機械に組みつく。十二時のサイレンがなるまでは、人間とは話さない。ぼくも、その他のだれでもが機械に話しかけ、機械と相談する。それこそ一心同体だ。よい製品をつくろうとするならば、だれでもがこうしなければならないのだ。夢中になってるときがぼくらの最大の幸福なときなのだ。先生はいう、きみらはまだ機械につかわれている、機械はつかうようにならねば……と。こうして機械ととりくんでいると、機械がかわいくなる。そうだ、きれいにふいて油をさしてやろう。

六月××日

鋳物場の先生にあいさつすると愉快になる。きょうも「こんにちは」「やあ、おきつうございましたろう」まじめなのだ。ぼくらを大人あつかいにしてくれる。世界

にこんなよい人は少ない。

七月××日
実習場で朝から一人で考える。
「なにを考えてる」「にくい！」「だれが」「おれが」
……「こいしい」「父」「さびしい」「泣きたい」
あす帰ろう、母のところへ……。

八月××日
入道雲がでている。
元気でいこう。
空にすいこまれそうだ。
落ち着いていこう。

八月××日
きのうはよい天気だった。
きょうもよい天気だ。
あすもよい天気だといいんだが。……

社会に生きて

但馬嘉勝
〔兵庫県　製糖工　十七歳〕

私は満十五歳、第五期生として新制中学校を卒業した。高校進学の夢も破れ希望も空しく、しょう然と社会へ変を現わした私は、隣り部落のMという菓子屋に勤め、夜は定時制高校に通った。菓子屋の主人は私が定時制高校

に通うことを理解して、自転車も貸してくれたし、仕事が忙しくても時間には家に帰してくれた。雨の日も風の日も隣り町まで一里余りの道を往復した。草深い田舎道を発電ランプの音も高く、自転車を走らせることは楽しかった。

だが、楽しいことばかりではなかった。梅雨のある日、自転車が店に入用であったため歩いて学校に行った。その日は四者会談を前にして、われわれ学生の希望や、出席する代表者の人選を兼ねた自治会が一時間目に行われた。四者会談とは、事業主代表、父兄代表、学校側代表、学生代表の四者の会談のことである。議長は委員長の松下がなり、自治会は進められたが、一学級から一名の代表者を選ぶのに議事進行妨害等があって、学級内は二つに分れ、騒然となった。

その責任は議長にあったが、大会をかしらとする一組が、不公平な議長をかばい、不公平な多数決で会議を自分らの自由にしようと企てたことが原因である。

私は会議の五原則を思い出していた。

1　少数の意見をも尊重すること。

2　会議員すべてに対して公平であること。

3　会議員すべてに対して丁重であること。

以上の三つは全然守られていないのだ。

4　議題は一時に一つずつとりあげること。

5　多数の意見によって決定すること。

以上の二つは曲げて守っている。つまり、優先動議はいつでも順序にかなっているにもかかわらず、議長は順序にかなっていないと、けってしまい、多数の意見だ、として討論を打ち切って、ただちに表決にうつってしまう。いかに多数決とはいえ、会議の五原則を守ってこそ有効であって、五原則の一つ、多数決だけ守っても、それは暴力行為でこそあれ、ほかのなにものでもない。

私は不満を顔面に現わしていた。室内は、個人攻撃する者、やじを飛ばす者、机をガタガタする者、乱暴な言葉のやりとりなど、いまにも大げんかがはじまりそうである。

議長はさっきから見守るだけで、一言も発しない。

大森らは外側に、私のほうは廊下側に、いつのまにか寄り固まり、真ん中の机はすわる者がいないのだ。

「議長！　なにをぼんやりしているのだ！　静めないのか？」

私はついに、さっきからの怒りをはき出すように、立つが早いか言って議長をにらみつけた。

そのとき、拍手とやじが私の体をつつんでしまった。

二階の二年、三年の組から「静かにしろ」と苦情を申込んで来たが、いまのままでは、静かにさせることは困難である。

「だまれ！　みんなだまれ！」

議長が大声で叫ぶが、一向にききめがない。

そのとき、カミナリ先生が前の入口からガラッとはいってきた。顔は笑っているが目は怒っている。みんなを、じろりじろりと見まわすと、みんなは一瞬だまってしまった。

「議長！」

私はここぞとばかり、発言の許可を求めた。議長は、みんなが一瞬だまってしまったものだから、どうしてよいかと迷った。私にすぐ発言権をあたえた。私は復光動議の休憩を提案した。全員がこれに賛成したので休憩にはいった。二時間目がはじまり自治会はつづけられた。議長は松下にかわって木下がやった。四者会談の出席者は私ときまった。一時間目のような混乱は一回もなく会議は進んだ。

私の部落からは、田下、木下、私の三人、同級生が通学していた。私は授業が終って帰るとき田下に、

「自転車に乗せてくれないか」

とたのんでみた。すると、

「乗せてやりたいが、パンクしそうなんだよ。悪いなあ」

田下はことわって、大森の仲間五、六人と笑いながら正門のほうへ走り去った。

私はただ見送るよりしかたがなかった。

――一昨日。田下は、前後輪のタイヤを、真新しいのと取替えたと、私にはなしたことを思い出した。それは三時間目の英語のとき。私が単語をノートしていたら、田下が話したのは上衣を買ったこと、タイヤを取替えたこと、カメラを買うため貯金していることなど、とりとめのないことをはなしたではないか。それにカミナリ先生の説教を二人ならんで聞かされたあと、一時間も教室のすみで立っていたではないか。――

いま、私の足もとに残る車輪の跡は真新しいタイヤを告げていた。私はさびしかった。入口を照らす電灯の光に、私の影は長く前にのめっていた。

もう一人、同じ部落から通っている木下という友だちにたのんでみようかと考えてみたが、木下の自転車こそ古くて、いつパンクするかしれない。私はそれを知っていた。

私の村に帰る者は、他にだれもいなかった。私は雨のふっているグラウンドを横切って校門を出た。うす暗い踏切を渡り、町内に入って行った。幾組もの自転車の群が私を追越して行った。

町中は明るかったが、先のほうは雨でけむって店はみなカーテンをおろしていた。駅前のカフェーだけがいまを盛りとばかりに、にぎやかな話し声を道までひびかせていた。H映画館の近くへきたとき、私のうしろで発電ランプの音が聞えてきた。

私が道端に寄ると、ちかづいてきた自転車から声をかけたのは、意外に女の子であった。私は人違いではないかと思って、そこらを見まわしたが、だれもそれらしい人影は見られなかった。私はおかしいと思って女の子を見た。女の子はナイロンの雨合羽を着ていた。私の横で自転車から下りると歩きだした。

私は歩くすべを忘れたように、しばらく立ったままで見ていたが、女の子がふりかえって笑いながら、

「いらっしゃいよ」

といったので、思い出したように歩きだした。私はキツネにつままれたような気がして、手をつねってみたが痛い。大丈夫と思ってみたものの、私はその女の子を知らないのだ。

「あなた、私をご存じでない？　私は、あなたをよく知っていますわ。タ・ジ・マさんてよぶんでしょう」

と彼女は笑いながら歩いた。

「はア……で、あなたは……」

私はすっかり当惑していた。

「いやよ、私に自分の名前をいわせたりしちゃ……あなたって意地わるね。ほら、ほら、去年の夏、日和山で釣りをしたでしょう」

彼女にこういわれると私にも思い出せた。それは東山公園に遊んだとき、天然水族館で彼女と釣りをしたことがあった。二人で老松のかげから日本海をながめたり、岩の上をかけまわったことも思い出せた。

「ああ、岸本さんか、思い出した。すっかり忘れちゃっていた、ごめん、ごめん」

私はてれていた。彼女は下を向いていた。きっとその日のことを思い出している。二人はだまって歩いた。町も過ぎてここから真っ暗な道である。警察の前もうす暗く、この先は製材所や醤油工場がつづいているだけで、民家はぽつりぽつりの程度である。

背後からたまたま照らされることもあるが、それらはみな学校帰りの自転車のランプである。なかには同級生が、「いよー」とか「よう」と、声をかけて追越して行った。醤油工場のあいだから田んぼにならぶ誘蛾灯の光が青白く見える。

「君はどこまで行くの？」

私はゆっくりとたずねた。

「わたし、さァねえ、行くとこまで行くわ」

彼女の表情は、なにかものさびしげな面持ちであった。民家の少し寄ったところに来た。小さな店が三、四軒ならんでいるがみな寝静まり、夜空に警鐘台が雨にぬれたはだをにぶく光らせていた。そこを過ぎると円山川の流れているところに出た。ここから道は二つに分れて、大川にかかっているT橋を渡っているのがT市からY郡町に行く道であり、川にそって川下へつづく道は、私の村からT市につづく道である。

橋のたもとのところに鉄でつくった古風な街灯がぼうっと光を放っている。

彼女はここまで来たとき、橋の欄干に自転車を立てかけて川上の真っ暗な水面を見ていたが、

「あなた、学校に行って眠たいと思ったことない？」

その静かな声は、川の流れに吸いこまれていくように思えた。

「眠たいときもあるね。やっぱり、昼の疲れが出るんだな」

私は無憂想にぽつりと答えた。彼女はずうっと私を見ていたが、また、もとの水面に眼を落して、

「わたし、一年余り通ったけど朝は五時に起きるでしょう、夜は十二時ごろまで勉強していたら、身体がつづかないわ。それにおフロなんかはいっている間がないんですもの……食事だってお茶で流しこみよ」

彼女は力弱く、なにか私に告げているように思えた。それは彼女一個人の不満かもしれない。が、私は夜間生全部の苦しみを彼女の口から聞かされたように思えた。

「一日五時間の睡眠時間では無理にきまっているじゃな

いか。お母さんにいって、もっと朝休ませてもらったらいいじゃないか。お母さんも理解してくれると思うな」
彼女は水面を見たままなにもいわない。新美寺山の中腹から、小さな灯火がまたたいて、水面に星のように一つうつっている。彼女は泣いていた。私はそれと気がついたとき、なにかなにやらわからぬままに狼狽した。
「きみっ、どうかしたのかい」
それだけいった私は、彼女の肩に手を触れかけたが、いそいで手を下すと、ただぼうぜんと見ていた。それはこまりきったとき、なにかよい考えを思いつくまでの心の空間の状態であった。
「きみっ、どうかしたのかい」
と同じようにたずねたが、その声は小さく不安げな声であった。彼女はハンカチで涙をぬぐうと、
「ごめんなさい、泣いたりして……」
とふりむき、私の顔をじっと見ていたが、また涙を流した。その一滴一滴が、ほおから欄干に落ちるとき、街灯の弱い光線を受けて金の溜りのように美しく見える。
「びっくりするじゃないか、急に泣いたりして」
私は笑いながらこういったが、実のところ、あわてたことを恥じていた。私は彼女からいろいろのことを聞かされた。それは自分が知っているような生やさしいことではなかった。
彼女の母親は大阪に住んでいた。彼女は叔父の家から学校に通っているが、叔父さんが理解のない人であることもはなした。
私は同情してともに悲しんだ。悲しんだあとの気持は夜気にもすがすがしい気持だった。
「夜間生は苦しいよ。仕事と勉強の両方を毎日しなければならないんだからな。でも、事業主や父兄が理解してくれれば、少しは楽になるんだが、その点、僕はしあわせだと思っているんだ。たまには歩いて通うこともあるが、そのときは、ほら、君といっしょにこうして語っていられるだろう。それに四者会談はあしたなんだ。僕も夜間生の希望をできるだけ話すつもりでいるんだ」
私はいまさらのように代表に選ばれたことに責任を感じた。真っ暗な川底から目に見えない力が私を襲ってきた。それは恐ろしかった。
むかしからこの川底に住んでいるという伝説の大なまずが恐ろしかったのではない。カミナリ先生が恐ろしい

のでもなかった。
私の頭に浮んでいるものは、あすの四者会談に出席する学生代表、事業主代表であった。それは学生代表の貧弱さに対し、事業主代表の堂々とした顔触れ……でっぷりと肥えた体格を見ただけで引け目を感じるだろう。
「あすの朝、起きるのに困るよ。今夜はこれで別れようか」
彼女はだまったままうなずいた。
「握手をして別れようか」
私がいうと、彼女もにっこり笑って、
「ええ」
とうなずいて、てれてしまった。私は彼女の、なめらかであたたかい手をにぎった。彼女はなかなか手をはなさなかった。
「さようなら」
「さようなら」
私は橋の欄干に手をかけて、その場を動かなかった。彼女も帰ろうとしない。
「どうしたんだい、帰らなくちゃだめだよ」
私は彼女を追い払うようにいった。
「但馬さんこそ帰らなくちゃ……」
彼女は笑いながらいった。私は一人であすの四者会談について考えたかった。
「じゃア、さよなら」
私は橋を渡らず、自分の村に向って歩き出した。彼女はいつまでも自転車に乗らず、私のほうを見ていた。
道の右側は竹やぶがつづき、ところどころ喬木が一段と高くしげり、左側は、屋敷の板べいがつづき、門のところだけ街灯の光で白く浮彫りのように見えた。真っ暗な道を歩きながら考えることは沈んだことが多かった。どうして夜間生はたがいに助けないのだろう。田下も、大森も……同じ苦しみをしていながら、それは昼間の疲れが、人間をこのようにしてしまうのかもしれない。
翌日、四者会談は行われた。広い講堂の真ん中に机を並べ、それぞれ向いあって座った。まず学生代表が多くの希望をのべたが、大岡という赤ら顔の事業主代表は、学生の希望をことごとく反対して、姑息で父兄、学校側代表を納得させてしまった。そのうえ、いままでの週一回の休校日を二回にせよと強く要求して、学校側が折れるしまつで、学生にとってはますます苦しくなるばかり

である。

われわれ学生は、六日で取る単位を五日で取らなくてはならなくなってしまった。これによって、毎日、一日五時間の授業をすることになる。学生代表は全員、四時間授業にせよと要求した結果、五時から一時間体育をやり、六時から四時間、体育をのぞく学科をすることになった。学生代表は自治会長一名、一、二、三年、各一名の計四名が出席していた。（四年生は開校三年目であるため、一名もいない）私をのぞく三人の代表は、学校側の案を承諾するといい、私は反対したが、ついに、学校側の案を来週から実施することになった。四者会談は学生の敗北に終った。

私たち勤め人は、農業をしている者に負けた。全校生中、農業を職業にしている者が約八〇パーセントであるから、一時間早く授業をはじめて、週二回休校日になったことを喜んだ。

校内は女子も男子も、学生代表のうわさでもちきりである。それは四人の代表に対して、悪いうわさではなかった。私の眼前に、三人の得意になっている顔が見えるように思えた。

一年生に四者会談の結果を発表し終ると、私はたまらないといわぬばかりに廊下に飛出した。二階の二年生の教室に走り寄ったとき、桝本洋子は三、四人の友だちと掃除していたが、私に気づいたか、

「まあ……もう帰るん、待っていてくれる」

彼女は私が思っていたよりも、明るい声ではなしかけてきた。

私はほっと一息して彼女をみつめたが、掃除していた女の子の視線が、私に向けられているのに気づき、

「手伝ってやろうか」

とほうきを手にとった。

このE定時制高校の近くにK工場があったが、彼女たちはみなそこに勤めていた。彼女たちはきょうの四者会談の結果に不満であった。私はほんとうのことをできるだけ冷静に語って、彼女たちの批判を求めた。彼女たちは、

「一週二回の休校は、勤め人の疲労をひどくする」

といった。それは休校日には、残業等を強制されないまでも、職友たちにたいして、義理にも残業しなければならないだろう。

「卒業できなくなる」
ともいった。それは五時から体育をはじめることは、勤め人の終業時間が五時であるから、体育の単位だけが取れなくなるからである。
四者会談があってからのE定時制高校は、毎日のように退校者が出た。十日も過ぎたある日、岸本洋子は大阪の家に帰って行った。一ヶ月も過ぎたころには、勤め人は私一人になっていた。——百姓学校——私は力いっぱいのびのびしりたかった。——利己主義者の学校——
私は勤め人の最後の退校者となった。それは広い社会を知るために、のびのびと学べる社会を求めて、神戸に旅立つからである。

竹原虎男
〔岩手県　農業　十七歳〕

静かなりこよい一夜の月清し
盆とりほうきに光るその一点

村田八重子
〔兵庫県　事務員　十八歳〕

夏菊ににがきことを問きながす
よき想い果てぬしずけさ百合ひらく
浴衣着て若き命をよしと思う

深瀬悦弘
〔新潟県　農業　十六歳〕

祖母の忌のめぐりきたり月見草
刈草の平つづきて落せいたり
夕蝉や教えられたる道とおく

酒井兼二

〔東京都　工員　十七歳〕

汗だらけの手が郷からの手紙受く

鉄材をかつぎこんだる裸かな

残業の電灯暗く火蛾群るる

かなしきことありて金魚を見ておりぬ

阿久津政治

〔群馬県　工員　十八歳〕

あてつぎのシャツを着かさねペンを持つ

さえかえり夜ふけの学びの筆にぶる

関勝男

〔岩手県　雑務　十七歳〕

かげろうの炎ゆる線路に工夫老ゆ

くたびれし案山子痩せの畑にたち

キャンプ張り飲事のくじをひきにけり

大滝実

〔新潟県　工員　十八歳〕

夕焼けて明るき職場明日もあり

菊香う二歳の職場秋の風

汗にじむ総身鉄の音かぶる

ある日のこと

川向秀武
〔東京都　部品配達　十六歳〕

「おい、早く弁当食べちゃえよ。仕事がいそがしいんだ」

社長がそんな言葉を自分にあびせかけた。

——もう一時をすぎているのに。

いま浜松町から川崎まで行って帰ってきたばかりなのだ。胸がにえくりかえった。なにか爆発しそうだ。

——なにをいうんだ。おれだって人間だ。ご飯ぐらいのどをとおさせてくれ。

すんでのところでさけんでしまうところだった。しかし、いわなくてよかった。いっていたら、たぶん、くびになってしまったであろう。一度ならがまんもできよう。二度、三度とたたきつけられる。このようなぐあいであるから、およそ他のことをも思いやられよう。

ああ、やはり自分はまだ子供なのだろうか。まだ心ができていないために、つまらぬ反抗心が生れるのであろうか。

——お前はいまくびになったらどうするのだ。家はどうなるんだ。

そんなさけびが自分の短気をしっかりとおさえつけたのかもしれない。

自分のクラスメートのなかには「そんなにあくせくする必要はないさ。どうしてもうまくいかないのなら無理したって、結局自分が損だよ。他人からしいられることはない。ばかげたことさ。だいたい君はおじいさんだ

よ。そんなにくよくよしながらあまんじているなんて」そういって会社を変えてゆく者もあった。

自分もそのような人を羨望の目で見たこともあった。そのとおり、いやなことをやったって第一おもしろくないし、自分自身のためにとってよくない——そんな誘惑のささやきにもあった。二、三度、会社をやめようと決心して母に相談したこともあったが、いつもさとされるのが常である。法律には、職業選択の自由が明示してある。「全て国民は職業の選択の自由……」だがそういっても、実際にはやっぱり労働者は一段と低くくらいしている。腹が立ったって、涙が出ようが、くやしかろうが、やっぱり働かねばならない。国民の義務だからでなく、食わんがために働くのだ。

にえきらぬ胸をおさえて、昼食のため倉庫に入った。だからといって弁当を食べる気はしない。たった一人、背をまるくして入らぬと困難なほど低いトタン屋根の天井のために、風もとおらぬむしブロのような倉庫のなかに自分が茫然とつったっているのを家族のだれが、知人のだれが、想像できるだろう。

学校では委員であろうと、議長をやろうと、いまこではそれはなんの意味もなかった。ただ力、労力を必要とした。弁当をひらいた。いつもの生揚げ。塩気があれば食べられようが、弁当のなかで生あたたかくなっていて、たべる気もしない。でも食べなければ体が持つまい。そう思って半分ほど食べて、残りはゴミ箱にすてた。残して帰ると、母が心配するにきまっている。隣りのタバコ屋のおばさんの家の勝手口にまわってぬるい水道の水を一口のんだ。

「川向君」自分を呼ぶ声がする。「おーい」気のない返事をしてもう一度、蛇口に口をもっていった。

「悪いけどこれを大至急なんだ、向うでお客が待っているんだってから頼むよ」

事務所の林さんがそういって伝票をよこした。

「OK、またリヤカーかい」

「いや自転車で大丈夫だろう。ちょっと重いかもしれないけど」

うす暗い倉庫に入って伝票に合わせながら、品物をとり出す。

カップリング百個、ブッシング三百五十個、ロックナット七百個、……品物をそろえてから車の箱にぎりこ

む。
「足んないのは、丸芳かい」
「そうしてくれよ」
自転車のスタンドをはずしながら聞いていた。出ようとしたとき、相棒が帰って来た。
「食べたかい」
「ああ、いまね」
「もういくのかい」
「急ぎものなんだそうだ」
むぞうさにそういいすてると、すぐに走りだした。
「秀武、気をつけなさいよ。きのうも十丁目角で事故があって、炭屋の子が肩の骨を折ったっていっていたよ。かわいそうに、絶対にスピードなんか出すんじゃないよ。手か足でも折ったら、とりかえしがつかないからねえ」
母のこの忠告とも冥顧ともつかぬ言葉は、けさ聞いた言葉であった。
「気をつけなさいよ」
二度も母がそういった。それも無理はなかった。六月には前歯を一本折ったし、このあいだは三輪車と正面衝突までして、いつでも生キズの絶えない自分を心配するからである。
新橋のガードぎわの問屋にいって不足分をおぎない、得意先にまわった。
「きたねえな。もう少しきれいなやつを持ってこいよ。これじゃ売りものにならねえぞ。電気メッキじゃだめだ。乾式のものを頼むぜ。このごろきたなくなったぞ。少し気をつけてもってきてくれな」
「すみません。気をつけます。こんどはいいやつを入れますよ。すみません、どうも」
ここでもこんなに、商売がら頭を下げるのを必要とした。伝票にサインをもらってそそくさと逃げるように自転車に乗って、つぎの得意先である春日町に向った。そこも同じようだった。
「なんだ、一品足りないぞ。弱ったな。まあいいや、伝票を消しておこう」
そういって伝票をくれた。
「どうもお世話さまでした」
それからまた自転車に乗って帰途につく。
……〝ゆりかごの歌は、カナリヤがうたうよ〟

自分は童謡が大好きだったので、学校でも、ときおりロずさむことが多かった。自転車に乗っているときも、しぜんに口にのぼってきた。事務所にいる福島さんが「君の自転車に乗っているのを見ると楽しそうに歌をうたって調子をとっているよ」

といっては笑われた。学校でもよくわらわれる。

スタコラ、スタコラ、ペダルに合わせながら、うたいもした。

「はい伝票」とさし出す。「おお、ご苦労さん、おそくてなんとかいってたか、はっははは。少しぐらいおくれたって大丈夫さ、はっははは」社長が空虚ないつわりの笑いをした。

「まあ、のんびりやれよ。暑いからな。ああ、そうそうそれじゃ少し休んだらこいつをやってくれ。さっき催促されたんだ」

「はい」

倉庫に入って積んであるカマスの上に腰をおろしてごろりと横になった。「ああ、いやだなあ」なんだか腹がへって来た。

自転車にリヤカーをつけて、三十貫ほどある長さ十二尺の電線管を三十本のせた。少しグラグラしたが、浜松町から神田美土代町まで二回も往復して運ぶわけにはいかず、無理に出発する。田村町に出た。すごい交通量だ。十二尺もあるパイプだ。うまく運べるわけがない。まして運送人夫でない自分には困難な大作業だった。ちょっと気をつけないとパイプの先が自動車にあたるおそれがある。全神経を集中しての大作業だ。

信号が青になるといっせいに出る。リヤカーの輪に小石がはさまって動かない。横に動かせば動くが、パイプが自動車にあたる。どうしようかとまごまごしていると、うしろでブウブウと情けようしゃなくわめきたてる。やっとの思いで石を取りのぞいて出ると、信号が黄色でストップ。「早くしろよ！　なにをしてるんだ」タクシーの運転手にどなられた。自分にはそれに反抗するだけの気力もない。ただ帽子をとって「どうもすみません」こういうよりすべがない。ああ、自分はなぜこのようにさげすまねばならないのだろうか。「えええい、ちくしょう」心のなかでタチビルをかむ。

やっと終った。時間を見たら五時近い。ああ、またおくれてしまった。すべてが自分にたいして無慈悲であ

り、時間までも無慈悲に進んでいく。「おくれると思ったら、お雨が学校に行っているのを承知なんだから、悪いけど仲間の人に頼んだらいいのに」母は自分がおくれることを訴えるたびに、きまってこのようにいうのであった。自分にはよくわかっていたのであるが、実際には、とてもいえそうもない自分であった。それゆえに母にそういわれると、よく責められているような気がして「そんなことをいわないでくださいよ」とつきはなすようにいっては履だたしくなるのを感じる。自分がわがままであるからだろう。ときおり、時間にせかれて、手を、いや顔まで洗わずに、倉庫を飛び出すのがめずらしくない。「なんだ、顔が真っ黒だぞ。よく恥ずかしくなく電車に乗ってきたな」級友によくそういわれた。きょうも手を洗うのも、もどかしげに倉庫を飛び出した。

「おばさん、さようなら。ヒデちゃん、バイバイ」

そうお愛想をつくろってから、カバンを小わきにかかえ、練習帳を一冊手にもって走り出した。でもすぐ疲れた。

いそいで飛び乗った。耳がジーンと鳴り、眼がグラグラッとした。貧血だなとすぐそう思った。ポンと投げるようにして網棚の上にカバンをはうり上げて、つり革に全身をもたれながら外を見た。

「ああ、きょうもおわりか」

自分の全力を失ったようにつり革から手をすべらして、がむしゃらにすわってしまいたい衝動に駆りたてられる。

これでは、自分の体がつづくか心配だ。なんの興味も、あすの楽しみもある勤めではない。ただ憎悪を感じているだけの自分。いまの時勢からしてみて、職があるだけでも、たしかにさいわいであるかもしれない。職を求めても得られないこの時代に、お前はずいぶんにわがまま者だともいわれようか。

「巣鴨、スガモ」

改札口を飛び出して、停留所まで歩く。大丈夫だ乗れそうだ。そう思って懸命にかける。あと、四、五メートルにいったとき、ジジ……と発車のベルの音。待ちかねたように発車してしまった。ああ、なんという無情、えいとカバンを地面にたたきつける。学校につくと校門をくぐって中庭に出る。

校庭のヒイラギの木が、その巨体を新鮮な緑の葉につ

つまれて枝を四方にのばしている。

水道口にいって一口すすいだ。階段をやっとのぼって自分の教室の前に立った。うしろの扉をそっとあけて入る。いちばん前である自分の席にそっと腰をおろした。すべての力が抜けたように、頭を低くたれてしばらくは本など取り出せない。四時間の終りを告げるベルの音とともに多くの生徒たちは家路につく。「きょうは委員会か」出欠表を公表するのであまりさぼれない。一言も、発言せず、むぞうさに採決の挙手をくり返す。いまかいまかと終りのベルの音を待っている。ベルが鳴った。いちばん先に廊下をぬけて玄関口に出る。

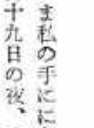
「おやすみなさい」守衛のおばさんにそういって門を出た。星はいつも変らぬ光をまたたかせている。うす暗い背景のなかを、一人とぼとぼと行く自分の姿は、まるで老いている者のごとく、もはやまいっている影をさらけ出してはいないだろうか。いや、そんなことはない、絶対にない、と自分で打ち消してやる。

自分は長男である。母は自分に絶対の信頼と確信を持ち、母は希望のすべてを託している。母にはいままで、おそらく幸福が訪れたこともない。普に生活におびやかされて、その日一日をやっと過して、ただひたすらに子供の成長を楽しみに、あすの希望を祈っているのである。そんなに子供に頼りきっている。「お前が一人前になれば、それで私は満足だよ、きっとよくなって母さんに孝行しておくれ」こんなに自分を頼りにしている母さん。　すべてを託されている」何回も何回も胸のなかでこだまする。

自分はあせった。早く母さんを安心させねばならない。でもいまはただなぐさめに、相談しあうことと、もう一つ懸命に勉強するだけだ。まず勉強だ。だから金があれば本を求め、時があれば勉強の機会を求めた。だがそれを遂行するには自分はあまりにも意志と闘志が柔弱であった。

「お前はこれから自分を完成しようとしている。でもよく考えて思慮ぶかく物事をかたづけなさい。お前は一方的だ。かならずしも勉強一本やりで成功はしない。よく考えなさい。お前はあまり体が丈夫でない。無理をしてはいけない。それに勉強だけでは人間は完成されるものではない。ひろく見識をふかめなさい。勉強がよくできたところでかならずしも完成されないし、幸福でもな

い。いろいろものを見、たくさんの本を読みなさい」
自分の頭のなかに、誘惑のささやきが忍びこむ。そうだ、本を読もう。芝居も見よう。自然にも親しもう。誘惑のささやきは強い――いやそうでない、自分の意志が弱いのだろう。それにちがいない。
それにもう一つの大きな力が自分をみちびいた。それは自分の昼の仕事だ。仕事は自分のすべての力を搾取して、学校のほうまでは力を貸してくれぬように思える。成績はだんだんと落ちていく。一番から四番へ、四番から七番へ、七番から二十八番へと、中学一年のときは学校で一番だった。それなのにいまは二十八番だ。母は顔にはあらわさないが心配しているだろう。母を失望させては申訳ない。そう思ってはあせりにあせった。あせるほど誘惑のささやきが耳につき、仕事がすべてを忘れさせた。身も心も空間にとんでいる。せっかくの休日も茫然と無意味に過してしまう。「どうしたらいいのだ」
「秀武、お前は体が弱いんだから気をつけなさいよ。なにをするんでも体がなくてはだめだからね。早く寝なさい。もう一時ですよ。あした疲れるよ」
なんと慈愛のこもった言葉だろう。ああ、許してください。自分はなんといういいかげんなものなのだろう。
「がんばれ、そして早くお前の母親をしあわせにしなさい。早く、早く……」
そう良心が自分に命ずる。
職業を変えたかった。仕事が解決するなら、すべてが解決されようとも思われた。
でも、自分のいまの働きは、重労働であるゆえに、他の人々よりは多く給料を受けている。いま、自分の給料なしでは家の生活が成立しないのだ。食うのに困難をきたすのだ。「こまった、こまった、どうしよう」
「いまやめたら、そんなにお前に給料をくれる所はありませんよ」
と母もいう。
それらのことが、自分をまよわせている。
〝ボン、ボン〟柱時計が二時を知らせた。あすも同じように働きに出ねばならない。



三百円の万年筆

前田尚美
〔熊本県　繰糸女工　十七歳〕

いま私の手ににぎられているこの万年筆は、ことしの八月十九日の夜、文房具店から胸をワクワクさせて買って来たものだ。安いので百円からだんだんにあるが、私のように書くことが多いと百円ぐらいの安物ではすぐペン先をへらしてだめにしてしまう。それに万年筆でいやな思いをしたことがあるから、思いきって超硬質ペン先つきの、三百円もするのを買って来た。

いやな思いをしたというのは、万年筆をほしいほしいと思いながらも、安月給でそんなものを買う余裕がなく、手紙や、機関紙〝ともしび〟の原稿を書いたりするときは、仕方なく友だちから、三拝九拝して借りていた。そしてある日、借りていた万年筆を返したY子から、もの凄くきつい文句をいわれたのだ。直接私へたたきつけたのではなく、他の人たちへ、

「この万年筆は、つい最近買って来たばかりなのに、前田さんに貸したら、ペン先は折られちゃうし、ちっとも書かれんようにしてしまっとる。ああもうこんなものでは字なんて書けんっ。くそっ、腹が立つ」とかんしゃく起して当り散らしていたとか……。私はそれをひとから聞いて、びっくりした。そんなふうにしてしまった覚えがないし、またY子が直接自分へいってくれないのを大いに憤慨して、Y子のところへ万年筆を見にいった。そして書いてみた。ちっとも書けないといってたが、私が書くといつものようによく書けた。肉太ではあったが、

ペン先は折れてなんかいない。大げさな、中傷するようなもののいい方をするY子へ、少々向っ腹でいった。
「なんね、ちっとも書かれんといってたけど、このとおり書けるじゃないね」
「あら、私が書くとちっとも書けんとよ、あなたはよっぽど押えて書くとばいな」
彼女はそういいながら、ためしに、押えて便せんに走り書きしてみた。
「いやあん、私がはじめ書くときは、こぎゃん肉太うはなかったけん。ペン先のつん折れとっとだろう」
まことに彼女は、憎らしいほどの冷たい眼をしていうのだ。弁償せよといわんばかりに……。部屋のなかの四、五人が、思い思いの顔で私たちの言葉のやりとりを聞いている。その人たちの眼も思いなしか冷たく感じた。
「だって、ペン先が折れてるならこんなに書けないはずよ。あなたは私に貸すとき、『この万年筆はよっぽど押えて書かんとつかんよ』といったでしょう。それで私、押えて書いたのよ。そうね、はじめより少しは肉太くなったかもしれない。でも『前田さんに貸したら、ペン先は折って、ちっとも書かれん』とブンブンだったらしいけど……あなたからそういわれるのは仕方がないもん。私が借りたのが悪かったんだから……」
私はこのとき、もう二度と借りまいと思った。万年筆の一本ぐらいなんとかして買おう。彼女のは百円の安物だったから、いつのまにかペン先をへらして、肉太くなったのだ。それを、あんなふうに大げさにいわれて、聞いてた他の人たちは、きっと、私を軽蔑したにちがいない。「前田さんは、ろくなもんじゃないね、ひとの万年筆を、書かれんようにしてしまって返すなんて」と……。自尊心を傷つけられたようでくやしい。
――どうしても、万年筆を買わなくては――そう思いたって、やっとこの万年筆を、O型インキ止め式の女持ちを買ったのだ。文房具店から出るとすぐ、箱をあけて取り出しては引っこめたりして、気もそぞろに寄宿舎へ飛んで帰った。もうひとから借りなくともいい。また、この間のようにいやな思いをしなくてもいいのだ。ワーッとがむしゃらに駆け出して、はねまわりたい衝動を押え、私はこの新しい万年筆をギュッとかたくにぎりしめた。うれしい！　たまらなくうれしい。ようし、いまからこれで思う存分書きまくってやろう。私の喜び、私の誇らし

さを知っているこの万年筆、すでに愛着し、私の魂がふきこまれたこの金色に光るペン先で、あの忘れられないりつぼんたる思い出をここに書こう。

六月の中旬だった。八時間労働から解放されて、フロに、洗濯に、外出にと、みな思い思いの行動をとっている夕刻……私は押入れの戸にもたれて、機関紙〝ともしび〟をめくっていた。そして「もの思い」という題でのっている自分の作文を、じっと見つめた。読まなくても自分が書いたものであるから、どんなことかは、すぐ頭のなかにパーッとよみがえって来る。ものおもいにふけって、引揚げ当時のことから、それから入社以来いままでの生活苦を思い出して、書いたものだった。私はまたもや、思い出さずにおれなくなった……。

「母ちゃん、重いよう。ねえ一休みして行こうってば――」

小学五年だった私は、泣きそうな声を出して、商品と取りかえた背中の大豆や米の入ってるリュックをひとゆすりした。ギシッと音がする。あたりは夕闇がこめて、前　歩く母の背中の大きなリュックがほの白く浮いて見える。私たちは千田村の山道を急いで歩いていた。

「なにいってますか。早く帰らなくちゃ、真っ暗になってしまう。こんなところで休んだらだめだめ。ほら、もうすぐお家が見えてくるよ。ね、がまんしなさい」

母はやさしくたしなめるように、大きなリュックをゆすった。なかには石鹸や化粧品から、小間物にいたるまでの商品がつめこまれているのだ。母の言葉で、仕方なく額の汗を手のひらでぬぐい、リュックのおしりを支えて足をひきずった。肩へくいこむように痛い。ともすればヘタヘタとひざをつきそうになるのをやっとたえて……。

もとタイピストだった母は、終戦後家族とともに満州の大連から引揚げて来て、すぐに職を見つけねばならなかった。父のいない家庭を支えるためには、どんなにしてでも働かなければならなかった。しかし、三人の子持ちで、まして就職難のときに、なかなか良い職のあろうはずがない。そして、やっとありついたのは〝番ちょ傘〟の手内職だったのだ。材料は店からもらって仕上げるのだが、一枚につき二円か三円の賃金をもらう。母が一生懸命作って一日にやっと二十枚くらい。それでは生

活して行けないので行商をはじめた。ふってもてっても、真夏の酷暑の最中をもいとわず、往復五里くらいある村まで売りさばいて歩くのだった。母は感じのいい人に見えるらしく、受けがよかったので、食べていくのにこまらないくらいの収入はあった。

ある夜、母がめっきり太くなったふくらはぎをなでながら、

「フーッ、ずいぶんまた大きくなったもんだねえ、これがほんとの大根足か……はっははは。毎日歩くからこんなに発達して大きくなるんだよ」

ひざに抱かれてコックリ、コックリやってた末弟の四つになる博臣が、母の大きな笑い声に、びっくりして目をさました。

「うん、大きいね……ワッ、かたい！」

私は母のふくらはぎをおさえて目をクルクルさせた。

「尚ちゃんのとくらべてみようか？　どうお……ねえ、母ちゃんの足、尚ちゃんの二倍くらいある。あっはっはっはは」

母は愉快そうに笑った。ひざにまたがって、目をショボショボさせてた博臣は、母がうれしそうに笑ってるものだから、自分までうれしくなったらしく、キャッキャッとはしゃぎ出して、自分のおしりを、母のひざにどしんどしんともちつきみたいにやったっけ。あの母の笑いには、みじんも暗い影はなかった。貧苦な生活にも負けないような、明るい、働く喜びにみちあふれた笑いだったのだと思う。つらかったが、夏休みのとき、母とともに行商していたころが、貧しいながらも楽しい家庭だったと、たまらなくなつかしい。

私が小学校を卒業するころは、なんでも行商の取締りとかでできなくなり、さっそく収入のなくなった生活は、大黒柱である母を痛めつけた。食っていくためには何とかしなくてはならない。母は、職を求めて毎日のように出歩いた。しかし、あるのは飲み屋の女給とか、旅館の女中といった転落の道しかないらしかった。幼い私たち姉弟三人と、祖母を餓死させぬために、母は観念の目をとじて、ある旅館の女中に雇われていったのである。身を持ちくずすからと、母はきらって軽蔑さえしていたところに、運命は皮肉にもそこへおちいり、潔癖な母に苦痛を与えた。そのころの母はよく「死にたい、死んでしまいたい」とこぼし、はては「ウ、ウッウウ……」

と泣きさけぶのだった。そういうとき、私はたまらなくなり、ブイとそとへ飛び出して、人気のない山道とかお宮などを泣きながら歩きまわった。そしてしきりに、「母ちゃんのバカ」と泣きじゃくった。それは、母に向ってどなってるのではなく、焦燥にも似た、なぐさめるすべも知らない自分に対してののしりであったろう。幼い私には、母のせっぱつまった気持なぞわかろうはずがなく、涙が枯れたころにボンヤリと家へ帰るのだった。

母はとうとう、村をへだてた川向うの××旅館へ行ってしまい、家のなかは穴があいたようになった。いままで、母の体臭が、愛情が、こもっていた暖かい家庭が、急に、味気なく冷たくなって、やるせない気持に、姉弟三人はたまらなくなって、母のふところを恋しがったものだ。たまの日曜にちょっとしたひまをみつけて帰ってくる母が、なによりも楽しみで待ち遠しかった。店にしばられた女中生活は、むやみに家へ帰ることもゆるされず、帰れても長くいることができない。

母と接するそのわずかなひとときを、姉弟は貴重なものとして、母のかたわらを一ときも離れずに、学校での自分の様子や、勉強ぶりを報告するのだった。が、帰るごとにアカ抜けして化粧するようになった美しい母を、私は変にねたましいような、あのはでに化粧した顔を、一皮ぐるりとひんむいてやりたいような気持にかられた。職業がさせるはでづくりが、いいようのない嫌悪感を覚えさせるのだ。

「これが、私の最愛の母なのか」私はときどきフッと、心のなかでつぶやいてみることがあった。しかしすぐにその軽薄な言葉を悲しくうち消した。

「母だって好きこのんであなったのではない。私たちのために、生きるために……」とそう考えて、なんとつらい世の中だろうと無性に悲しかった。

私が中学生になっても、母はやっぱりそのままだった。学校で委員をしたり、役員になったりして活躍していた私を、他の少数の友だちが「あの人、頭はいいかもしれんけど、人間はいいかどうか？　お母さんが旅館の女中してるってだもん」と、旅館の女中ということにことさら軽蔑をふくんでいうのを、もれ聞いたことがある。いやしい女中の子供として蔑視しているのだ。そう思って、私は憤然となり、かつまた劣等感におちいる自

分をふるいたたせて、そんなことをいうやつを見返してやるには、一生懸命勉強して相手をぐんぐんリードしてしまうことだと思った。あこがれの教師になる夢を実現させるためにも、また、母を軽蔑するやつを見返すためにもと、もうれつに勉強した。だが、中学三年になってはじめて自分が高校にも行けず、夢もやぶれたことをさとった。

母は、どんなにしてでもといってたが、家計の苦しさが許さなかった。意気消沈した怠惰な一年間を過し、みるみる下がった成績ではあったが、卒業するときはどうやら優等賞をもらえたものの、ちっともうれしくない。腹立たしさと、くやしさでいっぱいだった。一方は喜々として進学する。なのに、向学心にもえつつも、貧乏な者は行きたくとも行けずに、黙々と働かねばならないのだ。高校にも行けず、あこがれの教師の夢も実現できない貧乏を、心の底から、いきどおらずにおれない。いや、こういう運命をたどらせた戦争をこそにくむ。いままで貧乏ゆえにしいたげられて来た根本原因は、かぞえきれぬ多くの人々を犠牲にした、血みどろの戦争にあるんだ。

しかし……それが、裕福な生活から貧乏へ転落させられたり、希望から遠くへだてられて、打ちひしがれたり、このような社会の生存競争のはげしさを味わわせるそのものが、私に与えられた試練なのかもしれない。なにもかも戦争が戦争がといいかぶせるのはよそう。いったとて過ぎたことはどうにもならないのだ。また、貧乏をいきどおることもやめよう。貧乏には貧乏の生き甲斐があるだろうから。あすへの運命を切りひらくことに努力することが、賢明なのだと思う。

〝運命を切りひらく〟と口でいうのはやすいが、なかなか実現しがたいものであることはいうまでもない。一朝一夕にしてなるものでなく、たゆみない努力にある、と信じる。高い人間性をつくる尊い試練だと思って負けずに闘うんだ！　幾多の艱難にくっせず、少しでも向上するのだ。高校へ行けず、製糸女工となってることに、劣等感を起していじけることはない。そう思って力んだ私の体内を、考えたぎるような熱い血が奔流した。手にしている〝ともしび〟が、かすかにブルッと動くのを見て、いいようのない感激をおぼえた。そのとき、

「前田さあん、面会よーっ」

と寄宿舎の玄関のほうから高くひびいて来る声に、私はハッとして頭をあげた。またも呼び声が聞える。
「前田さあん、おらんとねーっ」
少々ヒステリックになったらしい。
「はあーい」
と遠方もなく大きな返事をして、〝ともしび〟を小机の上に置くと、急いで部屋を飛び出した。
「面会ってだれだろう？　友だちかしら？」
あれこれと、友だちの顔を思い浮べながら、絹糸のような小降りのなかを傘もささずに事務所へ飛んで行った。そして、事務所の木戸口の向うに母の姿をちらっと認めた。
「あ、母ちゃんだ。わあーっ、うれしい！」速度を加えてかけよった私は、息をはずませて、
「ああ、母ちゃんだったつね。はーっ、きつかった、面会っていわれたから、尚ちゃんはだれだろうかと思った」
喜びにはち切れそうな私の声に、母はちょっと笑ったが、すぐ暗い深刻な表情をした。いつになく白粉気のない、深刻な母の暗い顔を見て、「なにか悪いことがある」そう直感すると、いままでの燃えるような喜びが、水でジューッと消されるような感じがした。喜色満面の顔も、次第にいてついたようになっていくのを感じながら、母の言葉を待つそのひとときといったら……。母はなぜか、あるいは事務所をはばかってか、木戸口と大門とのあいだのマエを納めてある倉庫の前まで私をさそった。洗濯のきいた長袖の白いブラウスに、もと私がはいていた紺のフレヤー・スカートをして、前かがみの姿勢で、力なく歩く母の後姿をじっと見つめて、ひかれるようについて行く。
倉庫の前に来て二人は立ち止まった。私は一刻も早く母が深刻な表情をしている原因を聞きたかった。いや、それでいて聞きたくないような……。そのように矛盾した心の動きが、全身を緊張させる。長い、無気味な沈黙に、私はもうたまらなくなり、
「なんね？」
ときいた。あたりはうす暗く、いつのまにか雨がやんでいた。
「あのね、尚ちゃんにいうけど、母ちゃんいま病気してるもんね。故っとくと生命が危いって病気よ。子宮ガン

ができてね。すごくはれているらしく、出血がとまらないんだよ……。それでね、ちかいうち手術をするようにいわれたけども、母ちゃんのように心臓の弱いものは、……手術中に死なぬとも限らんし……、もうあきらめてるよ」

低く、なにもかもあきらめきったような、とぎれとぎれの母の言葉は、真っ暗闇の奈落の底へつきおとすように、一語々々が強い迫力をもって私に襲いかかった。

（バカ、なんてそんな気の弱いことを、死なぬとも、かぎらんなぞと）

「母ちゃん、そんな気の弱いことでどうするね。病気は心の持ち方第一だっていうでしょう。大丈夫ってば。母ちゃんが〝生きよう〟って心から思うなら、絶対そんなことない、ねえ母ちゃん！」

私は母がすっかり〝死〟にとらわれているのを、りつ然として強くゆさぶった。それから、私はそんなことをなんどもくりかえしいったようだった。早く手術したほうがいいともいったっけ。とにかく、母は二、三日うちに入院するから、そのときは来てくれといって早々に帰って行った。下腹を痛そうにおさえて、歩くのも苦痛らしく、トボトボと去って行く後姿のなんと悲しげに見えたことか……。

消灯の太鼓が、「ドーンドーン、ドーンドーン」と寄宿舎いっぱいに鳴りひびく。きっかり十時なのだ。急に部屋のなかの電灯がパッと消えた。寝床のなかで私はじっと空間を見つめて、きょうのこわいような母の言葉を思い出す。

（放っとくと生命があぶない。子宮ガンができて出血がとまらない。心臓が弱いから手術中に死なぬともかぎらん。もうあきらめてるよ）ああ眠れない。寝床を転々としながら、母が、遺骨となっておさまる幻影をおいやるようにするのだった。

ともすれば、製糸女工となって、劣等感におちいりやすい私を、母はどんなになぐさめはげましたことか。四月にもらった手紙では、

（前略）お前が向学心にもえて、一生懸命勉強してくれたけど、上の学校にやられずついに製糸女工にさせてしまったことを、母ちゃんはほんとうにすまないと思っています。私にそれだけの力がなかったのです。生活だけでやっとでした。下には博則もいることだし、二人も上

の学校にやることは、とってもできそうもなかったのです。わかってくれますか。貧ぐはつらいものですね……。上の学校に行かないからと、劣等感を感じていじけていることはいけません。社会を広く見てごらんなさい。学問はなくとも、成功、出世している人はざらにあるのです。女は学問はなくとも、いい夫をもって幸福な家庭の妻として、暮している人はざらにありますよ。お前もこれから女の仕事を勉強して女らしくなること。教養を身につけることですね。文学書を読むのもいいでしょう。有名な人の講演会などすすんできくように。人格の向上につとめることですね。他人にたいして親切に、ていねいに、骨身おしまずお仕事すること。お友だちとけんかなどしないよう、あまり自我をはらないことですね。そうすれば、きっとお前はみんなからすかれます。そしていつかはしあわせがめぐって来るのです。上の学校に行けなかったからとてひがみ、自棄を起したりせず、もっともっと明るい子になってくださいね。太陽は平等に私たちの上をてらしています。いつかは私たちもいっしょにしあわせに暮せるときが来るでしょう。それを信じて強く生きていきましょうね。（後略）

と離れていても、母の愛情は私の胸にひたひたと押し寄せている。そのようにして、いままで女中生活にたえながら、愛情深くはぐくんでくれた母が、死ぬかもわからぬ病気になっているのだ。それも一つの試練なのではないか。しかし、それにしてはあまりにも残忍だ。

六十路の祖母は、あとで家族の一員になった祖母の弟と二人で、老いた身にムチ打ちながら荒地を開墾し、現在では私たちの尊い汗のにじみとおった一反あまりの耕地を、たいせつにはぐくみ食糧をおきなってはくれてるが、生計をたてるだけの力はない。母の収入、私のわずかな収入が、やっと支えているのだ。それが……。

それが、母が死んだとなると、私はどうすればいいのだろう。いまの私の収入ではどうしようもできない。それでは、もっと高給のパチンコ屋、飲食店の女給、旅館の女中……？　中学卒の私などには、そんな道しかないようだ。いやだ。そんなところに行くのは。だが、私も母と同様にいっさいをあきらめて、祖母や弟たちを養うために、行かねばならないようなハメになるだろう。これが試練なら、私は負けていっそ死んでしまった方がいいと思う。喜怒哀楽のない空虚な世界へ……。

いまのままで母を死なせたくない。あんまりだ。どんな言葉をたたきつけても、いいようのない死への恐怖はただ私をりつ然とさせるのだった。

〝神よ、私はなにものぞまない、ただ母の生命をうばわずにいてくれ、それだけだ。この苦しみを察して願いをかなえてくれるなら、ほんとうになにもいらない。母の生命をうばわないで。

私は子供のようにいっしんに神へさけびつづける。心の底から打明けてすがる友も、先輩もいない自分には、形のない神に呼びかけるほかない、このやり場のないせつぱつまった心を、自分ながらあわれに思った。

(ああ、母ちゃん、死なないで!)

生活記

川崎昌男

〔新潟県　ガラス工　十六歳〕

私はこの三百円の万年筆で、母の病気が私を煩悶させ、りつ然とさせたことを思い出しながら書きつづった。その前に、〝ともしび〟の自分の作文を見つめて過去を思い出したことも……。神は、私の一生の願いを聞きいれて、母の生命をうばわずにいてくれた。手術後の経過もよく、二週間あまりの入院で、いまでは元気にもとの所で働いている。

母が、「もし母ちゃんが死んだ場合は、火葬にしてね」といったことや、手術直前に遺書を書いたことなどは、ほんとうに私の心を寒々とさせたものだった……。

母は元気でいる。それで私は満足しよう。万年筆も、私もだいぶんつかれた。いまからさきもなお、この万年筆は私の心を描いてくれることだろう。

昭和二十八年四月一日　実社会へ

きょうこの日、ぼくの職場生活の第一歩がふまれた。

空はあいにく雲でおおわれ、雨がシトシトとふっていた。ぼくの門出になにか不安な気持がわいてくる。ぼくのつとめる工場は、電球を作るところで、人数は二十五人、きわめて小さな工場である。工場の周囲はタモギの木がとりまいている。その木の根本にガラスのかたまりがいっぱいとりちらかしてある。一歩工場のなかへはいって驚いた。歩くたびに砂ぼこりがたつ。そのなかで自分の持場を黙々とやっている人、どら声をはりあげて歌をうたいながらやっている人。しかしみんな熱心にやっている。

そのうちに工場長がぼくを紹介してくれた。「こんど新しくはいった川崎だ。みんな仲よくし、よくめんどうを見てやってもらいたい」というと、だれかが「よおす」と、どなった。みんながどっと笑った。いままでどうしてよいやらめんくらっていたのだが、これでやっと気がらくになった。「よろしくおねがいします」と頭をさげた。きょうはなにをすることもなく、帰ってきた。家に着くと気がゆるんだせいかぼんやりしてした。

それにしても、ぼくが社会に出ようと出まいと少しも変らない。海に小魚を放したぐらいだろう。だが、まてよ、この小魚だって海にはいればいろいろの危険にあうだろう、波にもまれ、ほかの魚に追われる、しかし小魚は負けないで、いつかは大きく生長して、十分に活躍するだろう。

ぼくだっていまは小さくても、やがて十分に活躍するときがあるだろう。

四月十五日　見習

いまだに仕事らしい仕事も全然していない。毎日みんなの仕事を見て歩くだけ。退屈でしようがない。あまりひろくもないところで、見るといってもたかがしれている。銅が鳴ってこまってしまう。二、三日前に気がついたのだが、ものすごい、おこりっぽいのが一人いることだ。少しのしくじりでもしようものなら大きな声でどなる。身もちぢむようである。H君の説によると根はいい人なんだそうだ。とにかく工場の人はみないい人ばかりだ。

四月三十日　最初の給料日

みんなが古ぼけた事務室に集まった。妙なことにだれ

の顔もいやにこわばっている。どういうわけだろう、ふしぎだ。なぜみんなが喜ばないのか。まるで人が変ったようである。それも月給をもらってみてわかった。一人の短気な工員が袋を地にたたきつけて「こんなものなんでえ、たった半月分じゃねえか」「ちょ」と舌うちをした。また、あちこち少しずつかたまってブツブツ不平をいっている。ぼくも自分の給料袋を開いてみてびっくり。はたして半月分しかない。どうしたのだろうとK君に聞いてみると、不景気で会社がつぶれそうなんだそうだ。いまやっと気がついた。きょうのいままでだれも教えてくれなかった。目の前が暗くなったような気持になった。ぼくにとっては、最上の喜びの日が最悪の日になった。帰りの足もしぜんおそくなる。きっと家では母や弟妹たちがまっているだろう。弟がセンベコを買って来てくれといっていたが、気がすすまない。カラスが一羽飛んでいった。

五月二十五日　見習

はいってから二ヵ月になる。不景気といってもやはり作業はしなければならない。ぼくもやっと一人前の仕事を教えられ、少し上手になったような気がする。ぼくのすることは、電球のうしろのほうについているシンチュウの口金をつけることで、まだガスを入れたばかりの熱い電球を手袋をしてすばやくやるのだが、見ていたときはなんでもなさそうだったが、実際やってみると、なかなかどうしてうまくいかない。たちまち、ぼくの横に電球の山ができる。気が気でない。すると、「なにしている」「ノロマ野郎」と大声でぼくをどなった人がいる。「しまった」と思っても、あとの祭り。来たのは例のおこりっぽい人。ぼくをおしのけるようにしてぼくの仕事をやりだした。見ているうちにそこにあった電球は流れていってしまった。すっかり感心した。感心するとともにこの人に感謝した。そしていつかK君がいっていたことを思い出して、おもわずニヤリと笑った。

六月十日　楽しい昼休み

毎日楽しい日がつづいた。工場の景気もだんだん悪化してきたというと矛盾しているが、楽しいというのは昼休みだけ。きょうも昼休みに自転車で散歩した。ぼくたちにとってはこのひとときがいちばん楽しい時間だ。土

手の上をゆるいスピードで走る。緑色に光った水がゆっくりと流れ、やなぎが水をあびているあたり、いちめん緑にぬりつぶされ、土手の傾斜面ではどこかの工員がねそべっている。このひとときだけは苦しみも悩みも忘れて、この環境にひたるのである。

六月十六日　工場倒れる

運命の日、ついに来る。というとすこし大げさだが、ぼくにとっては重大事件である。けさ会社側から「ついに事業不振のため工場を閉鎖するとともに全員退職を通達する」といってきた。予期していたとはいえ、ぼくはあぜんとしてしまった。学校を卒業してわずか三ヵ月、早くもぼくの身にふりかかったこの災難。どうしたらよいのだ。半分泣き顔でみんなはと見ると、二、三人の工員とおばあさんたちが目をしょぼつかせているが、そのほかの人たちは別にこまったようすもなく、やたらにじょうだんを言ったり、おかしくもないのに笑っている。この光景を見てぼくの心は憤りさえ感じた。なぜみんなが悲しみを顔に現わさず、それと正反対の顔をしているのか。心のうちではみんなせつないのだ。それをやけ気味にじょうだんやなにかにあたりちらしている。電球をたたきつけているバカ者もいる。なぜみんなで素直になぐさめあわないのか。「おれなんか、工場ぐらいつぶれても平気だ」といわぬばかりの顔を見ると、はりたおしたい気がする。窓からはいつもと変らぬそよ風が吹いてくる。ぼくらをあざ笑うように、またなぐさめるように。

六月三十日　職求め

あれから十四日間、ぼくにとってはもう苦しいかぎりであった。毎日職業安定所にいき、また毎朝の新聞を目をサラのようにして適当な所がないかと探して、やっとこれならと勇んで面接に行くと、かならずといっていいくらい、ほかの条件はなんのことはないが、夜学に通っている、父は死に、母親だけしかいないという二つのことがひっかかってしまう。愛想のよかった相手もきっといやな顔をする。それがはっきりわかるくらい、ろこつに出すのである。そのときのぼくの気持は心の底からムカムカしてくる。ここでかならずことわられるのだ。面接を終ってことわられて帰ってくるぼくの心は、空虚な不安定なフワフワした気持だ。貧乏にあえぐ弟妹と母と

ぼくらにとっては、一日でも働かないことは生活にひびくのだ。こんなとき、きっと父を思い出す。父さえ生きていたら、こんなにまで苦しまなくともいいだろうに。いまさら思い出したところでどうにもならない。また思いきって学校など退学して、どこか遠いところへ働きにいきたいなどと思うこともある。そんなとき、なぐさめてくれ、はげましてくれるのは母であった。もうぼくは自分の希望などはどうでもよかった。学校さえいけるものならどんな仕事でもよいと敏安に申し出た。そしてあったのが現在の工場だ。○○硝子製作所。名前だけはちょっといかめしいが、内容はどうなのやら。安定所員が「どうだね、ここにきめたまえ、学校卒業するまでがまんするさ」なんでもなさそうにいう所員の言葉にさえ反感を持つ。よく学校で友だちと口争いしたものだ。「ガラス工場だけは絶対にはいらない。あんな衛生的に悪いところなんか」この意見がぼくたちの仲間の八割。「人間どうにもならなくなれば、そんなことはいっていられない。お前たちだってそうならないともかぎらないぜ」これが二割ぐらいをしめていた。もちろんぼくは前の意見であった。そのぼくにいちばん早く、こういう運命が来たとは実に皮肉である。まあそんなことはどうでもよい。あすは面会日、こんどこそは絶対にはいらなければ。

七月一日　面接日

なんとなく条件は進み、例の二つの条件もぜんぜん影響なし。「工場を見学して、よかったらあしたからきなさい」ということであった。ぼくはさっそく工場に入ってみた。なかは十五坪ぐらい、ガラスの管が左前のすみにぎっしり。机がコの字形にならべてある。といっても細長い机が三個しかない。その上にブリキの平べったいタンクがいくつもならべてある。モーターがうなって、それぞれのタンクから細長い小さな火がふきでている。その火でみんながいろいろの形の品をつくっている。熱心にくいいるような目で汗をかきながらやっている。それにくらべて下の少くところには、いちめんにガラスのくずがとりちらかしてある。これを見てちょっとガッカリしたが、まあいい、明日からやれるだけやるつもりだ。

七月二十九日　見習

ぼくの仕事は底止めといって、室外やさしい仕事で、

もうすっかりたれてしまった。ここにいる人たちはみなぼくたちと同じ年ごろの若い人たちばかりだから、表面はみんな仲がよいが、ときどき、おたがいの目が火ばなをちらしていることがある。原因も大体わかるようなこともあるが、あえてぼくはそれをつきとめるようなことはしない。たとえ表面だけでも仲よくしていればよい。そのうちに心の底から親しくなることもあろう。

八月七日

主人はぼくたち夜学にいっている者には、気味が悪いくらい親切である。話によると、いそがしくて残業する時でも、学校へいっている人は残業はしなくともいいのだそうだ。またきょうなどは、そうじのため学校が遅れてはと、毎日の時間を十五分早く終ることにするという。ぼくたちは心の底から感謝した。感謝するとともにこれからもぼくたちのために、好意をもってくれるようにねがわずにはいられない。

九月二十三日　会合開かれる

ぼくたちの工場では月に一回会合が開かれる。目的は、自分たちの工場をよりよくして欠点をなくし、愉快な工場にするというのである。だから金銭関係の問題は取り上げない。十五、六人のガラス工場でこのような形式はめずらしいではないか。少し鼻も高くなる。これが長くつづけば申し分ないが、ぼくの見たところでは疑問である。けれどもこの会合を機会に、みんなの団結ができ、いままでのへんになじめない気持が少しでもほぐれ、楽しくなればこんないいことはないではないか。

十月一日　見習期間終る

きょうから見習期間が過ぎ、やっと一人前の腕になった。もうだれにも後指をさされなくても堂々とやれる。見習を過ぎると請取りといって自分の腕しだい。品物も多く作れば自分の利益になり、反対に少ししか作らなければ自分の損になる。したがって仕事が熱心になる。これが人間のいつわりのない気持かと思うと苦笑が出てくる。とにかく全力をつくすつもりである。

昭和二十九年四月一日　卒業一周年

卒業してから一年、ぼくにとっては実にあわただしい

苦しい月日であった。またいまも苦しい。卒業したとき考えていたことが、どんどんくつがえされるようなことが、いくつも起きた。あまりにも世間をあまく見過ぎたような気がする。また工場にも幾多の事件が起きた。たえがたい屈辱も受けた。そのたびにじっとこらえ、がまんしてきた。ほんの社会の断片しか見なかった一年。これからもどんな修所があるかしれない。しかしぼくはへこたれないぞ。ぼくには夢と希望がある。たとえそれが実現しなくとも少しでもそれに近づけば……。いや実現させよう。ぼくの力で絶対に実現させてみせる。いまの工員生活は、ぼくの人生の試験だと思って忍耐しよう。卒業一年後、新たに社会を見なおした。見なおすと同時に新しく勇気がでてくる。

指

斎藤義祐

〔東京都 プレス工 十七歳〕

その日は北風の吹く、寒い日だった。「ガクン」いつもと違った異様な音とともに、右の人さし指を強くなぐられたような気がした。「やった！」と思ったときにはもう第一関節はなく、ツメのついた肉のかたまりが刑についているのを見た。左手できずをおさえ、ふらふらと責任者であるFさんのところに行き「Fさん、指やっちゃった！」とふるえながらいった。

「どこ、見せてみな」Fさんは心配顔できいた。血だらけできず口がわかちなくなった無気味な指をFさんに見せた。Fさんはきずを見るなり「病院だ！」といって表

の自転車置場に僕をつれて行き、荷物台に乗せて近くの外科医院へといそいだ。

両手とも血だらけ、青ざめた顔、油だらけの作業衣と、そのときの自分の姿はおかしかったにちがいない。道を通る人たちがみなふりかえって見ていたから。ちかくのK医院に医者がいず、つぎのS医院についたときにはけがをした指は、一本の棒のようになり、ぜんぜんものを感じなくなっていた。手術室にはいり、ますいがかけられて手術がはじまった。きずは痛くはないが、メスやハサミの音をきいているうち、あの無気味な指がいっそう形の悪い指に変ってゆくような気がして、なみだがでてきてしようがなかった。「これから自分は一生不具者なんだ、落した指はもう、もと通りにはならないんだ」と心のうちで悲しくさけんでいたことを、おぼえている。

医者は僕のなみだを見てきずがいたむと思ってか、しきりに、「痛いですか？　痛くないでしょう」と、いっていた。手術がおわり医院から会社への帰り道、Fさんからけがをしたときのことをきかれたが、けがをしたしゅんかんまで、機械を無視していたことはたしかだ。Fさんはいった。「仕事中、仕事に完全に熱中している状態を一〇として、そのうち仕事への意識が一以下になったときはじめてけがをするものだ」

僕はその通りだとは思ったが、あのとき、あの機械に安全装置さえついていたら、このけがも未然にふせげたのではないか、だれしも何時間も気をはって仕事をしていることはできないと思う。気のゆるんだときにこそ、役に立つ安全装置ではないか。安全装置は絶対につけるべきだと、Fさんの意見に賛成しながらも、心のどこかで反対している自分だった。会社では仕事の能率が少しぐらい上がらないからとの理由で、安全装置をつけたがらないが、自分のような悲劇をふたたびくりかえさないためには、つけるべき安全装置は絶対つけるよう望んでやまない。

悪夢のようなその日、一月九日は自分の一生を通じて絶対忘れることはできないだろう。腕を肩からつって家についた。なんにもいわず奥の部屋に入り、家の人たちが心配気にたずねるのを、ただだまって、なみだのたまった目で窓の外を見つめたまま、聞えぬふりをしていた。あのとき、家の人たちに心配をかけまいとしてほうたいをかくしていたのに、父はすぐ感づいたらしく、「義

祐、どうしたの？　会社でなにかあったのか」ときいた。自分は思いきって家中の視線を浴びながら、みんなが食事をしている部屋にはいっていった。不自由な左手で食事をしているうち、無性に悲しくなり、なみだがでてきてこまった。そんな僕を、けがのことについてはあまり聞かずに、そっとしておいてくれた家族の人たちの思いやりに感謝している。あのとき、だれにもあいたくなく、ただ一人でいたかったのだから。眠られぬ夜だった。いままでいちばんながく感じた夜だった。

翌日からT病院に通いだした。途中知っている人にあい、けがのことを聞かれるのをおそれながら、毎日々々治療に通い、二ヵ月目できずはなおった。しかしそのあとには、第一関節は完全になくなり、自分でもおかしくなるぐらい、ぶかっこうな指に変っていた。

これから一生のあいだ、この指のために、つらいことや苦しいことなど、たくさんあるだろう。

しかし、つとめて正しく、明るく、指のきずに左右されることなく、健全な毎日を送ろうと努力している。

働きつつ学びつつ

小出敏世
〔東京都　唐員　年齢不明〕

一

どうもはっきりしない目ざめだった。たちあがった僕はしゅんかんに目まいを感じて、かたわらの机のへりに思わず両手をついた。顔をあらっているうちに、ずきんずきんと頭痛がはげしくなった。ノドへつかえるような

ご飯を懸命にこらえて二杯食べた。いつもは大食の僕がもし一杯すらも食べなかったら、心配性の母がなんというかを考えると、目をつぶる思いでのみこんだ。出がけに母が「顔色が悪いよ」といった。

しかし僕の両肩は、二年前に父が結核で寝こんで以来、家計の半分をになっているんだと思うと、母の言葉に甘えてはいけないという責任を感じながらクッひもを結んだ。平気ですよ、なんでもない――」いいのこして玄関を出た。ふらふらする体に気をはりつめて都電に乗った。はげしい震動のなかで頭がますます痛んだ。じわじわ額に汗がにじむ。しっかりつり革を握って体をささえながら、おそってくる眠気に異常な状態を意識した。有楽町で下車して朝の人波にまじって歩きながら、うつろな気持で鉄の裏戸にたどりついた。会社のうす暗い部屋のすみでやっと仕事着に着かえて、一生懸命掃除をしていると、頭痛以上にしぼられるような腹痛が併発して、その場にうつぶすようにしゃがみこんでしまった。でも、まだほとんど掃除していないと思うと、勤めて日の浅い僕は、侮辱されるようで必死にたちあがった。会社の人々がつきつきときた。そして十時ごろ、僕はとうとういたみつづける頭痛と腹痛にがまんができなくなって、なにひとつ品物を運搬せずに早退を届け出た。

汗をながして真っ青になって家にもどってきた僕に、母は驚いて床をのべ、カゼ薬をのませてくれた。フトンがとても暖かだった。そのまま熟睡して目がさめたときは、妹も弟も勉強していた。起きあがったが目まいがつづいて不安だった。ふとみた時計が五時をさして、あと三十分で夜学がはじまる。いそいで着かえて出て行こうとした僕に、台所にいた母はのこしておいた卵を二つ割ってのませてくれた。それは病床の父に買ってきてあったのだということはよく知っていた。じーんとしてきた目がしらに恥ずかしくなって、僕は「ありがとう」もいえず「行って来ます」と精いっぱいにそとに出た。熱っぽい顔に夕暮の風がこころよかった。

二

きょうは最初の月給日だ。給料はもらったのに、あまりうれしくなかった。ポケットの平ったい封筒が、たまらなくものさびしかった。せつなかった。でも家に帰って母に渡したとき、母は心からよろこんで二階の父の病

室にもっていって、僕のことや僕の会社のようすを語っていた。僕もぱっと心がはなやいだ。

母はおりてきて、僕にやさしく小遣いをくれた。夕飯ののち、茶をのみながら家中でお菓子を食べた。楽しいだんらんだった。妹たちが「どうもありがとう」とまじめくさって頭をさげるので返答につまった。母は父の栄養のために、バナナなどを買ってきたそうだ。あんなわずかな給料で、父が早く丈夫になってくれるなら、ほかに望むことはない。父の病気がよくなっていくことは、結局、母の苦労がへっていくことなんだ。僕はこの小遣いで、妹たちに雑誌を毎月一回買ってやることを、固く誓った。

三

十時半。母がそっとおいていってくれたお菓子を食べた。甘い味だけが舌にのこっている。ひっきりなしに口にはこんで、みんな食べてしまってから「しまった」と後悔する。健康第一のモットーがまざまざと浮んで、こんなところで実行がやぶれたと思うとたよりない。下向きのまぶたが時折発作的にけいれんする。ゆとりのある生活がほしい。でもそれはぜいたくだ。濁流のなかでくいのようにふみこたえなければならない、いまの僕の家。働くことが唯一の手段。

兄はまた勤先で十一時までの夜業である。母は二階で内職をしている。読書にふけっている僕はよほどらくな身分だ。こうやっていると中学校時代が淡い湯煙みたいに思い出される。しみじみとなつかしく楽しいことばかりだったような気がする。でも、でもいまの僕はちがう。僕の手や足が労働でたくましくなったように、いっそう意志も思想も男らしく伸びなければならなくなった。

四

ほんとうに何日ぶりだったろう。ひさびさの銭湯につかったあとの心地よさ。気持がゆったりとした落着き。帰りは、兄と二人でならんで歩きながらいろいろしゃべった。無口な兄は、興がわかないらしく歌をうたった。僕も調子を合わせた。二人の歌声がおそい夜の町に澄んでひびく。二人はよろこび、二人の秘めた話。心の苦しみも身の疲れも、さっぱり洗い落してきたので快い。まが

り角の八百屋さんの果物の色彩が、かわききったノドに甘い汁の欲望を呼び起す。すると兄が「なにかおいしいものでも買っていこうか」と僕にいって、リンゴを二つ買ってくれた。やさしく思いやりのある兄を、僕は尊敬している。なにかにつけて気の粗雑な自分とみくらべながら恥ずかしくなるのである。

五

社用で市ヶ谷の写真店へ行った。急な九段坂を一気にとばかり登り終ったときは、体がへなへなと折りたたまれる感じがした。汗が泉のようにわき出して、ふいてもふいてもとめどなかった。さあもう一息だと力づけながら、自転車を市ヶ谷の駅のほうに走らせた。

すると、ちょうど下校時間だったらしく、同じ方向に女学生が行列のように長々とつづいていた。どっちに目を向けても、清潔そうなセーラー服がちらつくのに僕は多少あわて気味だった。汗がぽとぽとズボンの上に流れた。なんでもないことなのに、同じ年ごろの女学生が大ぜいいるということはたまらなく恥ずかしかった。そして自分が外見や見栄にこだわっていると思うと、意志の軟弱さに嫌きしりしたいほどだ。

「彼女たちは彼女たちでりっぱな人生行路がある。しかし僕には僕の生き抜かなければならない途がある」僕はそう思ってじっと心をしずめた。こじんまりしたきれいな写真店についた。持ってきたフィルムなどの写真材料を点検してもらっているあいだ、僕はせつないほど昔が回想された。

父が丈夫でぴんぴんしていたころは、ほんとうに楽しかった。夕飯のあと、父がみんなを集めてゲームや手品をしたり、また兄と僕を呼んで、じっと大きな目で二人の顔をみつめながら、古人の徳行などを語って聞かせてくれた。母が留守のときは、さびしそうな僕らにきまって手伝わせ、父は腕にヨリをかけて特別料理をしてたくさんたべさせてくれた。いまでも父の手作りの大きなドウナツは忘れられない。父の心は男らしくて寛大だった。まかったことはあくまでもしなかった。思えばなに一つ不自由のなかったあのころから、父一人で会社の経営に悩んでいたらしい。苦しみの蓄積に疲労しきって、血をはいて倒れた父に入れ代って、いま労働している兄と僕は、父のために、家中のために、そして僕ら自身のため

に働くことは当然なのだ。

点検済みの受取書をもらってそとに出た僕の目には、女学生のいそいそと帰る姿がうつり、またしても自分を卑下し、不運を悔む気持をとり去ることが、そのときはできなかった。

六

先生の声が大きく教室のなかにひびく。組のなかは活気にみちている。先生と活発に意見をやりとりする者もいる。勉強意欲に燃えている集りだからだろうか。でも昼の疲れで、机によりかかってまどろんでいるものもきっといよう。窓外は夜のとばりにつつまれている。

四時間目終了のベルが校内に鳴りわたると、夜学生は緊張から開放された喜びに家路に急ぐ。その帰途は僕ら夜学生どうしの会話に花が咲く。「もうきょうは朝から運搬しつづけで、授業は半分ねむり心地さ」一人の友がいう。僕と同じだなと思ってなぐさめる。「まだ君はいいほうだよ。僕は住込みだから、主人の機げんばかり心配するよ。他の店員もいるから、ろくろく勉強も手につかないんだよ」本屋に勤めている友が口をはさむ。住込みの経験のない僕には深くは考えられないが、その友の顔を見ているとうなずかないではいられない。「僕は自炊だからつらいよ。夜おそかったり疲労しきったときは、めんどうでパン買ってきて食べるのさ。でもパンばっかりだと胃腸をこわすから、自分勝手な料理やらかすのさ」そういってひとくさり自分でやった料理を語る。

おなじ年ごろの彼らがこんなにも苦労していることを思うと、少しぐらいのつらさに負けられない気持がふつふつと胸にたぎる。

近づく試験に彼らは、それぞれの困難を克服しながらがんばるんだと思うと、歩きながら僕の心も勇気と決意がみなぎるのである。

泉崎創平

〔群馬県　事務員　十七歳〕

胸あけて寝る父よ夏やせきわまれり

農夫の折り太き指もて田草取る

稲継舜一

〔兵庫県　農業　十六歳〕

年々にこれが最後の秋という老いゆく祖母の背を流しけり

山口栄三

〔青森県　農業　十七歳〕

亡き父の作業衣を着るこのあしたかすかに古き土の匂いす

あきらめをあきらめにつつ秋の夜の雨をききつつ湯に浸り居り

下駄の音ききてか馬は馬戸棹をしきりに鳴らす夜学より帰れば

北条松広

〔岩手県　農業　十五歳〕

夕暮や穂の出ぬたんぼのあぜ道に人等集いて凶作語

目つむれば昼も眠りに落ちてゆく母の苦労をしみじみと思う

長雨の後の仕事の忙しさ親に交りて畑に草取る

遠田啓文

〔埼玉県　工場雑務　十六歳〕

馬鹿などと他人に言われしことのなき幼き日々のなつかしくして

家を出て三月ばかりは故里の夜のくだける音の恋しき

一週間の職場

水村信子
〔山形県 印刷女工 十六歳〕

私が小学校六年生のとき、父と母とは離婚をした。その後、私は母一人の細腕で育てられた。私はこの春まで人々の想像もできないような悩みをしてきた。私と同じ年ごろの子が楽しく遊んでいるとき、私は小さな妹の子守りやら、家事の手伝いに追われて、遊びらしい遊びもできなかった。

中学校生活——それも苦しみながら、どうにか切りぬけて、この春卒業することができた。なにひとつわからない私。そんな私が社会の荒波のまん中に、ひとりぽっちでほうり出されたのだ。私は卒業するとすぐ、母の勤めている市内のある医院へ、事務員として勤めることになった。

私は、はじめて社会に役立つことができるという喜びに心をはずませて、母にともなわれて医院の門をくぐった。しかし驚いたことには、みんなが喜んで迎えてくれると思ったのに、その逆だった。

私を迎えてくれたものは、院長先生はじめみんなのあまりにも冷たいまなざしだけだった。初日、みんなにあいさつがすむと、私は婦長さんに案内されて事務室へいった。そこでしばらく仕事を見ていると、院長先生がきて、

「水村君、君はここでなく治療室のほうを手伝ってください」

そういわれた。私はふしぎに思った。なぜなら、事務

員としてここへ勤めるはずで、看護婦になるつもりはぜんぜんなかったからだ。でも、はじめはみんなそうするのかしらと考えて、私はすなおにうなずいて治療室のほうへまわると、婦長さんが心得顔で私を招いた。私は救われたように婦長さんのところへいくと、小さな仕事を与えてくれた。

私は生れてはじめて社会のお役に立つことができるのを、ほんとうにうれしく思った。私の心ははずみ、小さな胸はおどった。

私の仕事。それは汚れたガーゼを洗うだけのことなのだが、教えられた手術場へ一足ひとりで足をふみいれたとき、私はなんともいえない喜びを感じた。小さな声でたらめな歌をうたってしまったり、あまり広くない美しい手術場で、たったひとり仕事をするときの楽しかったこと。私は、「私にさずけられたはじめての仕事がそれか」と思うと、またしても快活な気分になり、仕事が終って治療室へもどったときは、自分でもわかるくらいに顔が上気しているのを感じた。そしてまた看護婦さんたちにいいつけられて、患者さんにホウタイを巻いてやったり、ガーゼを渡したり、また注射器の消毒をやったり、つぎつぎと仕事をやってのけた。患者さんたちはセーラー服を着たこの小さい私がめずらしいのか、低い声でささやいたり、にっこり笑って会釈をしたり、またじっとながめたりした。

そんなときには私の心は浮かれ、得意になり、楽しい一日を過すのだった。いっそのこと看護婦になろうかとも考えたくらいだった。しかし、社会とは私の想像したようなそんな美しいところではけっしてなかった。その夜、この楽しい一日を姉に便りしようと私が事務室に行くと——この医院へくる前、事務室を使って勉強してもいいという許可をえていたので——男の事務員の人に、「ここへ入ってはいかん」としかられてしまったので、がっかりして部屋にもどった。

部屋の六畳に五人が寝、電灯はたった四〇ワットというありさまである。そんな暗く狭いところで便りなんか書けっこはないのだが、仕方なく私は床のなかでこっそり書いた。

なぜ、みんなが私にあんな冷たい目を向けるのだろうか。それはあとでわかったことであるが、当時調理婦として働いていた母が、金をぬすんだというぬれ衣を着せ

られていたのである。それをちっとも知らずここへやってきた私。なぜ母がことわってくれなかったのだろうか。母としては身にまったく覚えのないこと。それにその娘までを人々が白い目で見るなどとはまったく知らなかった。それなのに来てみればなんということなのだろう。盗人の娘、泥棒の娘、だれしも冷たい目で見るのが当然である。

こうして初日から、私はあわれな日を送らなくてはならなかったのだ。あるときは、

「事務室へだれもかれも入れてはいけないよ。このあいだみたいに金がなくなるからね」

とか、また、

「二人泥棒がおってはねえ」

「どうせ日雇していた人だもの、どうも」

などと、私の前で聞えよがしに人々がそんな言葉をかわしているのだ。

もちろん、私の母はここへ動める前までは日雇をして、その日その日の生活をささえてきたのだ。それがなぜいけないのだろうか。日雇と一言のもとに軽蔑できるものだろうか。私は母の潔白をあくまで信じていた。そして神をも。神はきっといつかは、私たち母娘の潔白を人々に知らせてくださるにちがいないと。

それから一週間。そのあいだのなんと長かったこと。しかし私には、手術場へひとりで仕事をやりに行く時だけがなによりの楽しみだった。十時と三時にはきまって、なにもかも真白な美しい手術場へ一人足を入れるのだ。その喜びは私以外、だれ一人として味わえなかったことであろう。

悲しいうちにも楽しいひととき、それはこの時間だけにかぎられていたのだ。しかし、一週間目の日、院長の奥様に、

「家ではとてもあなたを夜学に通わせることはできないから、もしどうしても通いたいならば、どこかよそへ行ってください」

といわれた。それがあまりとつぜんだったので、私は返事もできなかった。大人はまたしても約束を破ったのだ。私は完全に事務員も取り消され、夜学へ行くことも取り消されてしまったのだ。大人はあまりにもでたらめであることが、私にははっきりわかった。ほんとうは学校へ行かせたくなかったのではなく、泥棒の娘を置くこ

とがいやなのだったのだ。
私は結局、医院をよすことになった。それにしてもこの一週間、悲しいあいだにも、少しでも社会の人たちの役に立ったこと、それによい社会勉強ができたこと、それは私の人生にプラスするものだと感じている。その意味でこの医院へ来たことは、いまとなってはかえって再びにさえ思える。
もちろん、この一週間は、どんなに心のうちで泣いたことだろう。泥棒と誤解された母。その誤解をだれ一人としてなぐさめてくれる人もない社会、そしてまた犯人が出ないままに、医院の先生方にも納得してもらうこともできない気弱な母、でも、もし母がくやしさのあまり、その医院をやめてしまったら、私たち母娘は一家心中でもやりかねない。そのような私たち一家なのだから、どうしていまさら母がやめようなどと考えるだろうか。辛抱のできるぎりぎりのところまでやっているのだ。
私はこんなみにくい世の中を見るのが、つくづくいやになった。でも医院の人々へ別れを告げてそこを去る日、そのとき、私は多くの人のいままでにないやさしい目を見た。看護婦さんたちは口々に、
「水村さん、たいへんだったわね、でもきっと犯人は見つかるわ、あなたのお母さん、けっしてそんなことをなさる人じゃないわ、とてもいい人よ」
また台所の人々は、
「信ちゃん、またときどき遊びにきてね」
といって、私をなぐさめはげましてくれた。
私は、人はこんなふうに変るものかとその変りかたに驚いた。これも自分がまじめに働いたためのだとし、他人のお世辞とは知りながらも、考えずにはいられなかった。でも医院の先生方が、最後まで私の気持をわかってくださらなかったことが、くやしくてならない。私は、家に帰ってから誤解というものの恐ろしさをつくづく考えた。
その後、犯人はAという看護婦だったことがわかったとはいえ、しかし私たち母娘に着せられた疑いは、私たちの心に一生消えないしみとなってしまった。なぜなら私は医院をやめた数日後、もとの中学のときの先生に会ったとき、先生は、
「水村さん、医院のほうをやめたんだってね」
とたずねられた。このことは、まだだれにも話してな

いのに、と思ったので、
「どうして知っていらっしゃるのですか」
ときくと、
「うん。ちょっときいたので」
と、いわれただけだった。
私の頭にはピーンと来るものがあった。
「先生は母のことも知っておるのだな」
と。いつもの先生ならじょうだんの一つや二ついって、そのうえ、つぎの職場の心配をしてくださるのに、そのときはそれ以外、なにもいわずに別れてしまった。私は先生と別れてから、涙がほおをつたわるのをどうしようもなかった。
また母の知人たちも、もうこのことを知っているという。醜聞はすぐひろまってしまう。そして医院内ではとっくに解決したことが、医院外の世間ではまだまだ解決されないのだ。いちど誤解を受けたら二度と取り消せるものではないのだ。世間の評判というものは、ひろまるときはだれからともなくいいつたえられるのに、いざそれが真実でなかったとしても、だれも進んで取り消してくれようとはしない。なかにはかえってその悪い評判に輪をかけて、人の不幸を快しとするような人々さえいることを、私は悲しまずにはいられない。
私はあの医院へつとめにいったことで、社会の矛盾をつくづく知らされた。世間についてなにも知らなかった私、その私に社会は自分の理想どおりにはいかないもの。また矛盾が、いかに多いかをはっきり教えてくれた。
生きていくには、その矛盾を乗り越え乗り越えしていかなければならない。その心がまえがしっかりできたことは、私にとってなによりの収穫といいたい。いま私は新しい職場に、当時のことをよき教訓としながら希望を抱いていそしんでいる。

稲　継　舜　一

〔兵庫県　農業　十六歳〕

あすからは人の手になる牛冷やす

氷店二軒しまいて秋に入る

私の報告書

斎藤隆子
〔福井県　美容師見習　十五歳〕

私が住んでいる福井県というところは、昔から機業の盛んな土地で、福井県に育った女は、ハタが織れないとお嫁にもらい手もないとまでいわれているくらいです。だからハタが織れるということは、この土地の女にとっては欠くことのできない、たいせつな条件で、私のお友だちの大半が学校を卒業すると同時に、ハタ屋の女工さんを志望して就職しました。このようにしてこの土地の女の人たちは、幼い時分からハタを織る技術を身につけることに努力するのです。

私の母は、もともとこの土地に育ったものではありません。だからハタを織るすべも知らず、それかといって他にこれという身についた職もなく、私が三つのときに戦争でお父さんを亡くしてからというものは、土方やアメの行商、掃除婦などをして、来る日も、来る日も、それはそれは身をけずるような苦労をつづけてきました。この辛苦のうちに育てられてきた私は、一日もはやく一人前に成人して、すこしでもお母さんの負担を軽くしてあげたければと、そればかりを一日として忘れたことはありません。

いま思い出しても身の毛もよだつ思いがしますが、それは私が小学校の一年生のときでした。夜ふけた鉄道線路の踏切のそばで、私をしっかりだきしめ、

「隆子ちゃん、いい子だからこのお母さんといっしょに死んでちょうだい。お願い」

と、夜目にも無気味なまでにぎらぎらとした眼で、私を見つめた母の顔が忘れられません。

すいすいとホタルがとんでいる鉄橋の後方から、汽車の汽笛が鳴っていました。私は死ぬという恐怖よりも、いままで一度も見たこともなかったこのような恐ろしい母の顔がこわくって、

「いやよ、いやよ、こわいよ、こわいよ」

と、大声で泣いたことを覚えています。母は私が物心つくようになってからというものは、

「隆子ちゃんはどんなことがあっても、必ずちゃんと身についた職を覚えてちょうだいよ、でないとこのお母さんみたいに苦労しなければなりませんよ。お母さんがわるいお手本ですからね」

と、いつも口ぐせのようにいいきかせました。

私は一人娘です。大きくなったらおむこさんをもらって斎藤家を継がなければなりません。何年か先、またあの恐ろしい戦争が起るようなことがあって、私のお父さんみたいにおむこさんも戦争にとられ、もし不幸にして戦死でもするような悲惨な目にあったとしても、残された私が、ちゃんとした職さえ身につけていれば、死まで覚悟をして、鉄道の踏切に立った母のような苦労はしなくてもすみます。それは年老いた母にも安楽な老後を送ってもらえるのです。

私は母からいいきかされたように、なにかちゃんと身についた職を覚え、将来に備えなければと、学校を卒業する前からそう心に決めておりました。でもなぜか私は、この土地の女の人たちのだれもが進んで志望するハタ屋の女工さんだけは行く気がしませんでした。そこで看護婦、美容師、交換手、薬剤師、保母、教員、栄養士などの職種をいろいろと頭に描き、あれこれと考えてみましたが、現在の苦しい家計を思いますと、専門の上級学校へ入学するなどということはとうてい許されません。

美容師なら、美容院に奉公のかたわら技術を習得することができ、この職が私にはいちばん適していると思い、美容術を修めることに決心しました。いったんこう自分で心にきめた私は、この職に生涯をかけ、どんな苦しい目にあってもくじけまいと、かたくかたく自分にいいきかせ、誓ったのです。ところが奉公さえすれば簡単に修業ができると思いこんだのは大変な私のあやまりで、こんど従来の徒弟制度は廃止され、美容院に勤めるために

は厚生大臣の指定する一定の学校を卒業しないことには、勝手に弟子入りもできないし、また、雇主のほうも資格のない者を弟子に雇入れることはできないということをきかされ、受持の先生に相談しましたところ、それなら、月謝もなにもいらない職業補導所に入りなさいと教えられました。

しかし、職業補導所の美容科は最近ものすごく志願者が多くなり、十人に一人ぐらいの競争率で、頭も相当よくないと入所は困難だといわれ、日ごろからあまり頭のよくない私は不安でなりませんでしたが、案の条、受験の結果は不合格で、すっかり落胆しました。おとなりの町に私立の美容学校があり、そこは無試験でかんたんに入学できるのですが、月謝その他で月々千円ぐらいの費用がかかると聞かされて、これもあきらめるよりほかありませんでした。

こうしてせっかくの補導所は不合格になるし、私立の美容学校には入学もかなわぬし、私の決心はとたんに出鼻をくじかれたかたちで、一時は途方に暮れましたが、母がいろいろとかけまわった結果、お友だちの口ききで、手伝いという口実のもとに現在の美容院に無理に頼み、どうやら奉公することができました。

そのときはまったく天にものぼる思いでした。母と二人はじめてこの美容院にあいさつにきましたとき、美しい先生が出てきて、

「しっかり勉強してちょうだいね、努力しだいでは学校にも入れてあげますし、お店も分けてあげますよ」

といってくださったのには、すっかりうれしくなりました。

「親類の子で、ちょっと忙しいから家の手伝いに来ているのです、ということにしときましょうね」

といわれ、月々通勤で千五百円のお給金を下さるとのことで、

「まあ、千五百円も」

と私はびっくりして、そっとかたわらの母をぬすみ見たりして、心のうちでは目をみはりました。

最初の日からでもお客様のおぐしがあつかえて、ピンをはずしたり、クシをあてたりできるのかと胸おどらせて第一日目を勇んでいきましたところ、一日中お座敷の掃除、裏庭の草むしり、台所の水くみ、洗濯などと女中さん同様な仕事をさせられ、くたくたにつかれて、すっ

かりあてがはずれ、その日は悲観しました。そうして明けの日もまた次の日も……。でも、そのうちお店へも出してもらえるにちがいない、なにも修業だ、こんなことは最初から覚悟していたはずよ、と自分にいいきかせ、しんぼうして雑用もいとわず、はげんだおかげで、半月目ぐらいからお店のほうへ出られるようになりました。

でもお店へ出たといっても、お客さん用のスリッパをそろえたり、お客さんがおんぶしてきた赤ちゃんをだきおろして整髪がすむまでお守りをしたり、

「しばらくお待ちください、どうぞ」

などとイスをすすめたり、つめたいお茶をくばったり、お仕事中の先生のうしろに立って、うちわで風を送ったりする。そんな雑用だけが私にあたえられた仕事でした。

しかし、そうやって先生についてお店で働けることはとてもうれしく、一日もはやく私も先生のようにノリのきいた真っ白い上っ張りを着て、とそんなことを胸にえがき、せっせと仕事にはげみました。おかげで、いまではそのあこがれの白い上っ張りを着て、お店で買ってもらったこれも真っ白いズックのサンダルをはき、先生の横に立ってクシといわれれば、ハイ、クシを、ブラシをといわれれば、ハイ、ブラシをと、助手の役目をしながらドライヤーの扱い方も、薬や化粧品類の名前もいつか覚え、下準備からあとしまつまでをいっさいまかされるようになり、それに、

「いらっしゃいませ。お待ちどうさまでした。どうぞ、毎度ありがとうございます」

などのあいさつもすらすらと平気で言え、

「まあ、よくお似合いですわ。クセのいいおぐしですこと」

などのおせじも、しぜんに口から出るようになって、毎日々々がとても楽しく、心に張りを覚えています。

でも夜の十時十一時になると、一日中の立ちどおしで足は痛むし、つらくて泣きたくなることもあります。帰りがおそいとかならず母がお店までむかえにきてくれますが、うれしいことには、まだ四人も五人もお客さんがいても母の迎えの顔がみえ　と、

「すみませんね、毎晩々々おそくまで残ってもらって、さあ、降子ちゃん、もういいからお母さんとお帰りなさい」

と、先生はいってくれるのです。
十二時ちかくなってうちに帰り、それから晩のご飯をいただくのですが、母も私が帰ってくるまでご飯を食べずに待っています。そのたびに私は胸がいっぱいになってご飯がノドにつかえ、なにか眼頭があつくなってくるのです。
「足が痛くって」
といえば、
「つらいでしょう、さあ、おだし」
と、私の足をもんでくれる母。
「つらくてしんぼうできなければ無理しなくてもいいから、おやめなさいよ、からだが一番大切だからね」
と、いつも私を案じてくれます。でも私は、
「へいちゃらよ」
と、なにげなく笑って答えるのです。小さくせまいおふとんに母と二人枕をならべ、
「いまに私が一人前の美容師になってパーマネント屋さんをはじめますから、お母さんはいつまでもいつまでも長生きしてよ」
といいますと、
「ええ長生きしますとも、お母さんはちょっとやそっとで死んだりなんかするものですか」
と、私の肩を強くだいてくれます。
じっと眼をつぶると、ピカピカと光るドライヤーや、青白く美しい蛍光灯のスタンドや水色のカーテンやきれいにみがかれた大きな鏡のある部屋で、サッソウと数人のお客さんを相手にして働く美容院の経営者である自分の姿がまぶたの裏でチラチラします。もうひとふんばり、もうひとふんばり、私はそうつぶやきながら、いつのまにか夢路をたどってゆくのでした。

深瀬悦弘

〔新潟県　農業　十六歳〕

この宿の朝のまどに仰ぎみる信濃のくもはしずかなるくも

母なくてなれぬ手をもてわが父がつくりしようかんうまがりて食う

夏のせんべい工

甲山明春
〔島根県　店員　十六歳〕

日が燃えている。
セミが焼けつくようになく。
水銀は故障しかねないほど昇ったまま。
ここには
炉がカッカッとほのおをあげ、
せんべいを焼く僕の胸や腕をいぶる。
百枚などは、まだためし、
千枚だって序の口さ、
一万枚焼いても半人前だ。
だが、まだ僕は見習中の徒弟、
——人間は働くために生きている。
それが僕のくちびるをしめさせる。
笑うな
トンボよ、セミよ。
笑うな
進学した友だちよ。
大工場に行った友だちよ。
——大臣はせんべいを食べないだろうか。
僕はたのしいのだ。
——日本の子供たちは
とてもせんべいが好きなんだ。

アンコ（日雇人夫）

向井利彦
〔兵庫県　工員　十七歳〕

日に焼けた顔。
しわのある顔。
タオルを巻いた首。
今日も、アンコのおじさんが
道をゆく。

人々は、妙な顔で見おくる。
私も気の毒におもう。
毎日仕事が変る。
あぶれる人もいる。
それでも、いつも
楽しそうにほほえんでいる。

鈴木光義

〔北海道　工員　十八歳〕

初めての月給

ああ……
もう、月が輝いている。
はださむい風が、
僕の家の方から吹いて来る。
一人の男が、えりをたて走っていった。
僕は、さむくない。
むしろ、風がみんなの笑声を
乗せて来るようだ。
そうさ、
生れて、初めての月給だ。
僕は、お辞儀をふって歩いた。
そうしなければならないような気がした。
二人の女が、僕を見て笑っている。
お金を、ちぎれるほどに、
にぎりながら、
いちもくさんに、
わが家、めざして、走った。

稲泉清祐

〔山形県　工員　十六歳〕

花火みてねむれぬわが眼ちらつきぬ

流れ星みてるあいまに消えてゆき

卒業してから

竹村淳子
〔三重県　紡績女工　十七歳〕

私が学校を卒業してから、早くも二年五ヵ月たつ。この月日のうちに、私はなんと心の遍歴をつづけたことだろう。二年五ヵ月前の私、中学三年三学期の私は、毎日進学したくてならなかった。

「級の人はずいぶん進学するんだって」

夜、私がこういい出すと、炉ばたの燃えている火を見ながら父はだまっていた。

「高校にゆく人はその人たちばかりで話をするし、先生も、おもにそっちに力を入れているわ。あーあ、どうせ就職なら、三学期なんか用はない。学校にいってもいかなくても同じことだ」

私はそんなことをつぶやいた。すると、父は私のほうを見て、

「お前はそんなに学校にいきたいのか。じゃあ進学しろよ。父ちゃんは骨と皮ばかりになってもいいから、お前は学校へいけ。そうすりゃあ、お前の気持はいいんずら」

父にこういわれると、私は悲しかった。やせている父。その額のシワの数は父のすべてを物語っていた。

「父ちゃんだってお前を高校へいかせたいよ、でもなあ……」

私は父の表情を見ていると、どうしても行きたいと思っていた心がくずれて来た。

「ううん、いいわ。こんなの心のちょっとしたわがままだもん、父ちゃん！　わしゃあ働く、三重県の紡績にい

って働く。そして父ちゃんや母ちゃんをらくにしてやるね。学校へいかなくてもりっぱな人はいるもの。父ちゃん！　ごめんね、学校いきたいっていって。もういわないから」

私は涙を出しながら、こう父にいった。そして二十七年の三月、信州に春がおとずれて来るすこし前、三重県の現在の会社に入った。

しかし現在まで私の心のなかには、高等学校に対するあこがれが残っている。私が年少労働者となったその日から、まだまだ学校に行きたいと思って私はもだえた。だが私の生活は一週間を基準に、朝五時から働く日と、午後一時四十五分から働く日の二つの正反対の生活の連続だ。こうした二交替の生活では、夜学も半分の日数しか出席できない。それに会社には学園があった。私は夜学にいかずとも、その学園で高校卒業ができると思って籍をおいた。しかしこの学園はけっして、高校と同じ程度の学力を身につけるためでなく、和洋裁を主とした実務学校だった。無性に向学心のあった私には、たいへんさびしいものであり、大きな幻滅を味わった。

一年目で帰省したとき、父は私のようすからして、すぐ私の心を見ぬいた。しかし、なにもいわなかった。また私もいわなかった。私は自分のうえに少しなりともかかっている経済の問題を自覚していたし、心苦しく感じながらも、私を少なからず経済の点で必要としている父は、私を進学させるだけの決心がつかなかったから。父はむかしのえらい人たちの物語をしては、「彼らはどんな逆境にも打ち勝って、そのうえに自分というものを立てたのだよ」と私にいった。そして父が若いとき、やはり、私と同じように向学心にもえ、苦学したことをかたってくれた。「なにも学校出たからって、りっぱないい人とはいえないんだ。学校出た人が悪人になっているし、また努力次第で学歴のない人だって成功している。結局、たいせつなのは心の持ち方だ。誠実で正直な人間になるようにつとめるんだ」といって強調する。

私はそのときだまって聞いていた。それから父は、手紙のなかで、高い教養を身につけたけれど、三十五歳になってもまだ独身でいる親類の人の話を書き、はたしてその人がお前に幸福に見えるだろうかと、いってくるのだった。

私は父にそういわれるたびに、どうして私がこんなに

学校にあこがれるのかと、自分の心を考えた。高い知識をえるために、とはだれもがいう。しかし卒業すると習得したことをおおかた忘れてしまう人が多い。私は将来先生　なりたいと思っていたので、そのためとは自分でも思ったが、漠然としたあこがれと、制服に半分心がひかれたのも事実だった。そして、だんだん父の言葉の意味が身にしみこんできて、私はしだいに現実的になってきた。

しばらくして私は、「やる気さえあれば、どこでも勉強できるのだ」という気持になってきた。いままで身がはいらなかった授業も一生懸命やるようになった。

しかしことしの三月、父から、もしかしたら一家で南米に移民するかもしれないと知らせてよこした。私はやっととりもどした心の落ちつきをうしない、学校にいけないと知ったときより、もっと大きな深いショックを味わった。日本の国にいることを当然と思い、べつに南米に行くということを、自分の身の上のこととして考えていなかった私は、勉強に心がはいらなくなり、だまって移民のことばかり考えるようになった。ねむれぬ夜が幾日かつづいた。しかし私は心の内面の不安と、なんともいえない複雑な気持を、人に知られることを好まないから、表面はなにごともないような顔をして、できるだけ笑って暮すようにつとめた。政府で許可さえくれたら、私の一家は太平洋の遠い向うの国で永住するのかと思うと、私は自分がどうしたらよいのかわからなかった。でも父のいうには、向うの国ではその人の努力しだいだという。

「学歴なんか問題でない、健康で健全な精神の持主ならいいんだ。なあ淳子、お前は数学のむずかしい問題をできるようになるために、学校へ行きたいといっていたけれど、人生にとってどちらがたいせつだろう。そうした日常用いないむずかしい数学より、人の心の和をたいせつだとは思わんかね。よく考えてごらん」

私はわからないながらも、まず人として、人間味のある方がたいせつだと思った。私の家は父母と六人の子供だ。しかも私が総領だからいちばん下は小さい。もしかしたら移民には行けないかもしれない。しかも行けずに国内で生活するとしても、私はもう以前のように、学歴だけにこだわっていないだろう。つぎつぎと起った事柄は、結局私にたいせつなことを教えてくれたのだ。

ことしのお盆に私は帰省して、老いた父の肩をもみながら、いっしょになってこの問題、移民について話をした。

「父ちゃん、私ってほんとうにわがままな子だねえ――」

私はてれくさかったが、こう思いきっていった。

「なあに、みな苦しみにぶつかって、だんだんねれていくのだよ」

といって笑っていた。

会社には組合の文庫もある。私はできるだけ本を読んで、心の正しい人になりたいと思う。二年あまりのうちに、私はなんと変化したことだろう。この二年五ヶ月は、私にとってたいせつな時間の経過だったのだ。

だまって別れた

中川典子

〔三重県　紡績女工　十七歳〕

母は、毎晩家計簿をつけている。私はそれを、つまらない家計簿とよんでいる。私が学校で習った家計簿とは、およそ縁遠い、いつ、なにを買うために、いくら支払ったか、ということだけが記されている家計簿である。

今夜も私のそばの机の上にノートをひらきはじめた。にこにこしながら、

「きょうはなにを買ったかなあ」

と、ひとり言をいっている。

「典子、あれはいくらだったかなア」

と、再三私を引きずりこむので、

「またはじまったなア」

と思わずにいられない。心からめいわくなのではなく

て、そのたびに弟と顔を見合わせながら、
「また好ちゃんがはじめたよ」
と、くすくす笑う。
夕食後のだんらんのひとときを、私たちはこうして過す。母の顔も喜びにみち、私たち姉弟も心楽しく、和やかなものがあふれている。
母はよく、
「お前が働いてくれるおかげで」
と、心からよろこんでくれる。
これといっては目に見えぬが、以前にくらべて少しずつ豊かになって来た家の経済と、うれしそうな母の笑顔を見られるようになったことは、私のなによりのよろこびです。

一日の仕事も無事に終ることができ入浴もすませた。
十二月の真夜中の風は、電信柱をビュービューとならしていた。いてつくように寒い道を四人のお友だちと家路に急ぐ。
いつも通る桜並木にさしかかった。老大木が葉をふるい、枯れ枝のようになりながら星空の下にひろがっている。
美しい夜景だ。
私はここを通るたびごとに、
「自分たちはこうして青春の一歩一歩をきざんでいくのだが、これでよいのだろうか」
という、満ち足りぬ心を感ずるのだった。
毎日、糸を紡いでいるだけでよいのだろうか。

日紡労働組合宮川支部定期大会に参加した。それから組合主催の支部弁論大会に参加した。
ある友は、労働強化の原因と対策を、またある人は、文化水準の向上について弁論した。同じように汗とほこりにまみれて働いているお友だちのうちから、このようにすぐれた考えがのべられている。この事実は、私に幾多のことを教えてくれた。
毎日々々糸を紡ぐことと、つかれたといってはやすむことしか知らないで、若い身をもてあましている自分の生活は、反省されなくてもいいのだろうかと。
平安な日々にあきあきし、もっともっと生きがいのある生活を求めながら、手をつかねて待っているだけでい

いのだろうか。

女子工員としての自分たちの仕事を、つかれるといってはいとい、かつての女工という名を恐れては、自ら卑下し、無感動なままに過していっていいのだろうか。楽しかろうが苦しかろうが、私たちは青春をかけて、この仕事に従事しているのではないか。

休がつかれる原因を見きわめ、それを防止することも、つまらない見栄を捨てることも、つまりはぜんぶ、私たち自身のめざめにかかっているのではないだろうか。

農夫は激しい労働の報酬として豊かな実りに接することができても、私たちはいかに勤勉であろうとも、その報酬には接することができない。

不景気の波は敏感に伝えられても、豊かな時には盲目にされてしまっている。

正しい労使の関係が一日もはやく生れるよう、私たち一人一人は目ざめねばならないのではないだろうか。労働の意味を正しく感じとりたい。

私たちは若いのだ。大いに勉強しようではないか。

支部長が先頭に立ってメーデー歌を合唱した。

聞け万国の労働者
とどろきわたるメーデーの
示威者に起る足どりと
未来を告ぐるときの声

いい歌だ。胸に希望がわいてくる。

馬小屋の中で

清原正行

〔大分県　カソラ工　十六歳〕

もと馬小屋だった納屋のなかにミカン箱を二つずつ四すみに重ね、その上に畳をのせて居間とし自炊をはじめ

た。ナベ一つ、茶わん二つ、サラ一枚、ハシ二本で小さな七輪をパタパタやって飯を食べる。これだけの最低限度の食う用具のほかに枕とカスリのユカタ一枚である。

馬小屋の三方はもとは板壁かなにか張られてあったのだろうが、いまはもうなにもない。わずか一方にだけはワラを編んで壁代りとし、僕の働いているカワラ工場と仕切ってある。夜はここに寝る。いまは夏だからカがものすごくいる。じっとユカタにくるまって寝ていると、その羽音が何千匹かのものを合わせて、ウイーンウイーンとまるでモーターのうなりはじめのようである。三方が開放されているので、美しい夏の夜空も、寝ながらにして見える。キラキラと輝く星をながめていると、なんとなく物思いにふけりがちである。だれにも世話にならずに自分一人で生きているのだ。という自覚はあっても、こんな電灯もない暗い馬小屋の中で、ひとり淋々と毎日を送っていると、物を思う心もしぜん悲観的、感傷的になってしまう。

現在のように、一日わずか百六十円の賃金では食べるだけがやっとで、本を買う金も自由にはならない。雑誌一冊買うにしても相当の決心がいる。きりつめれば食費も八十円ですまぬこともないが、八十円の食費ではこの激労に耐えるだけの栄養をとることはできない。そこで工場の主人に、もう少し賃金を増してもらおうと思ってもみるのだが、カワラを作るのも相当の技術を必要とし、またこのカワラ工場に就職してからわずか一ヵ月足らずだしするので、人並みに仕事の能率も上がっていない現状だから、それも言い出しかねている。

カワラ工場に就職した最初の二、三日間は、突っつきくずしたり割ったりで、てんで仕事にはならず、これでは百六十円の賃金も高過ぎると思うくらいだった。だが、ものの一週間も経ってみると、けっしてそれは高いどころではなかった。五十キロもある重いセメントを運んだり、砂を運んだり、水を汲んだりしながら、一日中立っていなければならない。おまけに表面に塗る黒鉛で、休中まっ黒になってしまうのだった。

五時に仕事を終ると川で体を洗い、そのままドタリと馬小屋の畳の上に寝てしまう。足が棒のようになっている。これをゆっくりともみながら三十分ほどそうしている。あとは夕飯を食べ、日記をつけ、翌朝のため米を洗っておくだけである。

小さなナベから飯をワンに盛り、ゴマ塩やタクアンをお菜として夕飯を食べはじめる。一個のミカン箱がテーブルである。僕が飯をたべていると、同じ馬小屋のなかにつながれている主人のセパードが、クンクンと鼻を鳴らす。この犬は終日、牛や馬の骨をしゃぶっているのに人が少しでも口を動かしているのを見ると、舌なめずりをしながら鼻を鳴らす。汚い、いやな犬だ。暗い馬小屋のなかで、犬と同居させられながら、ひとり飯を食うのはなんとも哀れで、さびしいものである。

僕は犬と同等に扱われるだけの価値しかない人間なのだろうか。いくら主人の犬だからといって、犬特有のいやな臭気が小屋中に充満したなかで飯を食い、寝なければならない理由がどこにあるのだろう。主人は気づかないのだろうか。それともどうせ家も親もない孤児だからやとっているだけでも十分じゃないか、さびしければ犬とでもなぐさめあうがいい、という考えなのだろうか。

――ここで自炊をはじめて以来、ずっとこのことを考えているのだが、まだ主人にはなにもいえないでいる。

ちっともおいしくない夕飯を終ると、ナベに焦げついた飯粒を帯して翌日の米を洗う。これがすむころはすでに暗くなっている。馬小屋には電灯がない。ローソクや油を使っては不経済だし目も悪くする。だから字を書いたり本を読んだりするときは主人のいる母屋のほうに行く。少々気苦労を要するが、ここなら新聞も読めるしラジオも聞ける。高校にゆけないのだから、せめて社会情勢の判断だけは学校に通う者に負けないようにと、新聞やラジオのニュースには気をつける。

近くの高校に通う友人から、教科書や参考書を借りて勉強もしてみるが、昼間の疲れで、二時間も活字を追っていると眠くなる。勤労と勉学の両立するか否かの問題については、ずいぶん論議されているようだが、これはなかなか大変なことである。たいてい働きながら勉強するという種類の人たちは、学歴が浅くて、就職しても、内容的、金銭的にめぐまれていないようである。だから従事する職業も肉体的に疲労しやすいものばかりで、夜、人々の寝しずまったあとまで勉強するということはなかなかむずかしい。簡単にできるものではない。

どんなに力んでみても、まぶたが重くなるのは当然である。それに使用者側の理解を得ていないと、たとえば住込みの場合だと、翌日の仕事にさしつかえるとか、電灯

料が不経済だとか、学校にゆかぬ者が本を読むとは生意気だなどといわれたりする。現に僕がそうである。十時からNHK第二放送で放送されているNHK高等学校講座を聞こうと思っても、ラジオをかけては眠られぬとか、メーターが上がる、などといわれると、そのまましぶしぶ馬小屋へ帰らねばならない。

こんなに理解のない人も珍しいくらいだが、腹を立ててやめてしまっても、どこも同じで中学校を卒業した程度では良い就職口があろうはずもなく、いまはあきらめて九時半までで勉強はやめる。もし近くに夜間部や定時制を持つ高校があれば、自炊しているのだから自由に入学できると思うのだが、田舎にいる悲しさで、そんなものは汽車で三時間も先きの大分市まで行かなければならない。

勤労と勉学の問題で、定時制高校や夜間部に通っている者は普通より一年多い四年間で修得できようが、僕のように自学自習の者は普通の二倍も三倍もの時間が必要であると思う。

朝は五時半に起きる。七輪でパタパタと火をおこしてナベをかけ飯を炊いていると、どうしても一時間はかかる。それから食ったり茶わんを洗ったり便所に行ったりしていると、ちょうど八時ごろになる。それからはまた立ちつづけの一日の労働がはじまるのである。高校に進学できないというあきらめがあるから、進学できなければできないままに、将来どうすれば最も幸福になることができるか、学歴はないがそれを乗り越えて、ほんとうに人間らしい人並みな生活をするためにはどうしたらいいか、というようなことを僕は現在しんけんに考えつつある。一面、僕はまたちっともまじり気のない美しい恋愛がしてみたいとか、大臣になって国政をきりまわしてみたいとかいったような、まったく不可能に近いうわついた考えも大いに持っている。カワラ職人などにはなりたくないのである。

仕事をしていて、午前中しゃべる者はあまりいないが、午後になるといろいろのことに話がはずむ。話の内容はたいていだれがどこの大学を受験した。落ちた。だれは頭がよい。悪い。同じように金を使って大学を出るなら東大でなければだめだ。代議士には東大出が多い。代議士になれれば大したものだ。大臣にでも望みなきに非ずだ。などとすべて立身出世に連なった話ばかりであ

る。これならば何度話しても尽きない。でもこれは金持の話で、貧乏人には遠い彼方のかすんだ存在なのである。

現在の世の中では、上級学校に進学できない貧乏人が、唯一の立身出世の道だと望みをかけるのは、警察官か自衛隊員になることだけである。これがいつも工場での談話の結論となる。工場の主人も周囲の人々も僕が十八歳になったら自衛隊員となることをすすめる。食べた上に五千円も六千円も給料をもらえるのだから、こんないいものはない、というのである。

僕もそう思わぬではない。でも兵隊さんになるのはいやだ。戦争には行きたくない。死にたくない。現在の青年が自衛隊や警備隊に抱く、不信と不安と憤怒は僕も持っている。一日中立ちずくめで、体中まっ黒になりながら、夜は夜で疲労のため半ばまぶたを閉じながらの勉強でもいい。美しい恋愛もできなくてもいい。戦争に行って死ぬよりましだ。

一日も終り、一人馬小屋のなかで夕食を終えると、明るいうちに日記をつける。なんの変化もなく、なんの得るところもないこの暗い現在の生活をどうにかしなければ、と焦りながらも結局どうすることもできずに、毎日がズルズルと過ぎ去っていく。

住込みの日記から

志賀幸一

〔静岡県　タンス製造見習　十六歳〕

僕の仕事を正確にいうと、タンス製造見習ということになるんです。ことし中学校を出ですぐ、市内のあるタ

ンス商店へ住みこんだわけですが、その家の主人も家族の人たちも、みんないい人ばかりです。こんにちでは、昔のような徒弟制度はありませんが、仕事となればあいかわらず難行苦行の修業なのです。

その第一が早起きでした。いつも六時五十分か七時ごろに起きて、あわてて朝飯をかっこんで、学校へすっとんで行った毎日を過してきた僕には、五時などという起床時間は、死ぬほどつらいことでした。でも、それは日がたつにつれて慣れてきましたが、いまだにいやになってしまうのは、自分の時間がないということです。

朝の六時ごろからはじめて、日が沈むまで仕事をします。つまり暗くなるまでです。たいてい夏は七時ごろまでやります。冬は、もう少し早く終るだろうと思いますが、冬のことを考えると、かじかんだ手に水をすくって、カンナをとぐ姿や、こがらしをついて配達に行く自分が想像されて、夏でもふるえがきます。

とにかく僕は、修業というものが、いかにつらいものであるかということを、知らせてもらいました。

主人は、しっかりやれば、五年ぐらいで一人前になれるといってくれましたが、それもしっかりやればの話で、ぐずぐずしていれば、何年たっても半人前なのです。またこのさき長い月日のあいだには、病気にもなるでしょうし、どんな事故がおこるともかぎりません。こんなことを考えると、まったく生きていくのがいやになることがあります。なぜ人間なんかに生れたのだろうと、猫がうらやましくなってしまいます。

でもこうした苦労のなかにこそ、味わえる喜びもあります。

僕はまだ見習ですから、タンスをみがいたり、木を切ったりするだけが仕事ですが、ひまなときには、ハイチョウや、チリトリなども作らせてくれます。へたくそですから、他店で六十円のものなら、四十円ぐらいに売りますが、安いからなかなかよく売れます。十個あったチリトリが五つになった、四つになったと、日ごとにへっていく気持は、なんともいわれぬ楽しさで、買ってくれた人の顔が仏様みたいにみえます。それから、いつも三時になるとおやつにパンが出ますが、これも楽しみの一つです。こういうことは、他の工場では見られないことでしょう。

僕の父は口ぐせのようにこういいます。

「修業とは、長い、暗い、人生のトンネルだ。一歩一歩要心して少しずつ進まなくてはならない。進行は困難だ。苦しくて、泣きたくなることもあるが、一度そのトンネルに踏入ったからは、途中でとまってはいけない、わき道へそれてもいけない、ただ前へ進むだけだ」

僕はこれを自分の金言としております。父は、一人っ子の僕になんとかして一人前の職をつけようと懸命になっているようですから、それを唯一の張合いとしてがんばっていますが、このあいだのように、あやうくこれもゆるみかけそうになりました。

それは、僕がちょうどリヤカーをひいて配達に行った帰りでした。そうです、やがて七月の太陽が、西方の家家の屋根のすぐ上で真っ赤にかがやいている六時ごろのことでした。

道ばたで学校友だちのA君にばったり会ったのです。A君はあるオートバイ会社へつとめていましたが、僕の話を聞いて、「そんなに、おそくまでやるのかい」と驚いていました。それはそうでしょう。A君は通いですが、六時にはいつも家へ着くし、月給も、僕の何倍って、とっていたのですから……。

A君は、それを、とくいげに話したのです。僕はほんとうにA君がうらやましくなりました。自分でいうのはなんですが、学校の成績だってA君よりできたはずです。A君があれだけなら……と、ムラムラッと、へんな気を起してしまいました。

ある日、父がきたとき、このことを話してみると意外に父は激怒して、「なにをばかなことをいうんだ、目先の欲につられて職場を変えてばかりいたら、生涯安月給取りで終りだ。日ごろお父さんがいっている言葉を忘れたか」と、どなられるやらお説教やらさんさんでした。でも、そのおかげで忘れかけていた金言を思い出して、やっと自分がまちがっていたと悟りましたが、さて、さとってみると、いままでのうらやましいという気持は消えてしまって、反対に、いまにみろという闘志が、わいてくるのですからふしぎです。

A君が、まだ弁当を持って通っているとき、僕は目抜きの通りに店をだして、店員を大ぜい使ってと、いつのまにか空想に落ちてしまいましたが、ここでもまた一つ、うまい話がいかに強い魅力を持っているかということを教えられました。

立ちん坊

田原幸平
〔山形県　店員　十六歳〕

レクリエーション

レクリエーションと称して店員一同汽車にゆられること二十分、この地方では名の知れているある温泉地に行った。井上さんはずっと前から酒が飲めると楽しみにしていたようだが、私はあまり魅力を感じなかった。学校を一日ぐらい休むのは仕方がないとしても、家でゆっくり寝ていたほうが、もっとよいレクリエーションになると思っていた。しかしみんなそろって行くのだから、自分だけ参加しないというわけにはいかなかった。

私は胃を悪くし医者から飲み物を禁じられていたのでさめだったが、友だちはずいぶん飲んで酔いつぶれていた。そして酔うとしきりに自己を弁護するのだ。私もいっしょに騒げないのはさびしく、こんな泣き事にあいづちを打たなければならない自分が哀れで、やはり勇気を出してことわればよかったと思った。酔うのなら愉快に騒いで無邪気になるものと思っていたが、案外デリケートに他人の言葉に注意しているので、うっかりしたことがいえないこともわかった。

自分の病気を心配してくれたのだろう。上役の一人が、

「胃のぐあいはどうだ」

といってくれたので、

「注意していますから大丈夫です」

というと、
「注意なんかしなくともいいよ」
と、すこし怒った調子でいうのでびっくりした。深い考えもなく答えたことなのだが、非難の言葉にとったためだろう。
「酒酔いを愚劣だと思うか」
と重ねてききかえす。どうしてもっと自分を忘れて楽しめないのだろう。酔っている人にすれば、こんなことをいっていても結構楽しいのかもしれないが、私もそうだし、女店員にしてもつまらない一日だったろう。

集　金

今月も月末が来て集金がはじまった。金額は少ないが軒数はばかに多い。なんど行っても払わない家はきまっている。毎月五、六軒はあるので憂鬱になる。
それにしても、きょうはまったく失敗だった。集金を終えてから金額を合わせると、どうしても五百円の過金になる。私は集金帳をめくり、記載もれがないかと金額をたどると、石川という家が五百円で未納となっていた。もらってもしるしをつけるのを忘れることがあるので、考えこんでしまった。そう思いはじめるとどうしてももらって来たような気持になり、この家、きょういただいてきたのを忘れていましたと主人に告げた。
私は変な気持になって立ち上がったが、はっとした。釣り銭のことを忘れていた。五百円の釣り銭を差し引かなければならないことを主人も忘れていたのだ。私は急にいい出すのがきまり悪くしばらく本棚を整理し、いま思い出したように主人にそのことを話した。主人はああそうかという顔をしたが、そのつぎには変な顔になった。
あたりまえのこと、自分が悪かったのだ。過金が出るには必ず理由があるはずで、そんなものは、じきに判明するものだから、そう急いでむりに理由をつけなくともよかったのだ。私は物事をあまりにも深刻に考え過ぎ、なんでも一人で処理しようとするのだ。主人の目には、すなおさのない小細工のある奴だとうつったことだろう。いいさ、自分はどうせきらわれ者だ。だれも自分の味方なんか、いやしないんだから……。

小百科辞典

菅藤さんにたのまれた新聞を買いにいった——菅藤さ

んは〝小百科〟と自称する浅く広い知識の持主だ。書店で拾い読みした知識の蓄積は、とかくこんな人間をつくるようである。

私は走り出してから何新聞か聞くのを忘れたことに気づいたが、どうせちょっと目を通すのだろうと思い、私の好きな×新聞を買って来た。ところが菅藤さんは、

「どうして○新聞買って来ないんだい、なかったの」

ときいた。菅藤さんは○新聞のひいきであることも、取っていることも知っていた。だからこそ別の×新聞を買って来たのだ。菅藤さんは、

「しかし×新聞にもあるかな」

といいながら、広告欄をひろげ、なにやら書いていた。広告のクイズに応募しているのだ。家に帰ってからゆっくり書けばいいものをと思った。でも、わざわざ新聞を買って、店で書いたのは主人がるすだからだろう。主人が外出すると店員は勝手な私用をし、お客さんなんかめいわくそうに応対している。私もゆっくり読もうと思って本を手にしたのだが、

「だめだ、だめだよ、一人はお客さんを見ていなけりゃ、万引きも多いからな」

と菅藤さんにいわれた。みんなが働くのならなんでもないのに、自分だけ働くのはいやなのだ。他人のために働くなんて——そうすると私の毎日の勤労は主人に見せるためのものなのか、どうもおもしろくない。

菅藤さんは店の切手をはると、私にハガキを出してくるように命じた。

庄司国枝

〔宮城県　事務員　十七歳〕

百合さげて歩幅正しく出勤す

白き鍬に記帳疲れの眼をそらす

カンナ燃え職工光る背をあらわ

氷水荷役はげしき子に配る

ひぐらしに製材きょうのノコはずす

時任利彦

〔宮崎県　文選工　十七歳〕

亡き母が我にしたごとく妹の手をにぎりしめて町を行くかな

三百合

〔静岡県　農業　十八歳〕

光りつつ蛍とび出づ夕まけて川原の草をわが刈り居れば

日ねもすを馬草刈りたるわが野良着あらえど青き匂いのこれり

朝露にぬれし野良着を干しおきて乾く間しばし鎌とぎており

石にふれ火花を散らす鎌の先いたわりながら山の畑打つ

関口和章

〔東京都　雑役　十七歳〕

汗にじむほおに青葉は照りかえし人満つ電車の山峡を行く

まくりたるそでの際まで赤々と日焼けし皮膚のここちよき色

こころよき歌つくらむと思いしが疲れし心に何も湧き来ず

若人の働く中に混りて五十を過ぎし父もをらむや

私の過去と現在

高橋淳子
〔秋田県　バス車掌　十七歳〕

昭和二十七年三月十七日、その日は私にとって生涯忘れることのできない、心の奥深くきざまれた悲しい日である。

その日は虫が知らせたというのか、朝から気分がすぐれず、なんとなく勤務するのがいやで、重苦しい気分で乗務についた。

午前中は別になんのこともなく過ぎ、そして午後三時半、私はバスの車輪の下敷となって、まったく思いもよらぬ負傷をした。いまこうしているあいだにも、あのときのしゅんかんの情景がまざまざと、私のあたまをかすめる。やられたというしゅんかんまでのことはわかっているのだが、それ以後はまったくの意識不明で、気のついたときは、病院の冷たい感触の、薬品のにおいが、しみこんだかたいベッドの上だった。ベッドのまわりには、ものかなしい顔をした人たちや、あわれむような目をした同僚、そして医師と看護婦が、じっと私を見つめながら、なにごとか話し合っていた。

母は不安なおもも ちで、なにかいいたそうであったがなにもいわなかった。ものをいえば、涙がせきを切って流れ出るような顔だった。私のベッドのまわりにいる重なりあった人たちの顔も一人一人見つめながら、自分がどうしてここへ来たのかを考えた。そのとき、私自身かえってまわりにいた人たちよりも、ふしぎに落ちついていたようだ。この人たちがこんなに心配していてくれる

のに、なにかをいわなければと思ったのだが、なにもいいたくはなかった。ただ放心したようにじっと病室の天井を見つめていた。

やがて医師の指示で、レントゲン撮影や、その他いろいろの精密な検査がおこなわれた。その結果、私は大右腿部の骨折の宣告を受けた。内出血がひどかったために、右足全体がうすむらさき色にかわってはれあがり、まったくこれが自分の足かと思われるほど、気持の悪いものだった。最初は、万一の場合は切断もやむをえないだろうと、いわれたのだが、主治医の懸命な処置によって、さいわいそれはまぬかれることができた。

しかしそれからの治療がたいへんで、毎日毎日が苦痛の連続だった。いろいろと治療をこころみたが、結局、切解手術をして骨をつなぎあわせなければならなかった。それも一度だけでは効果がなく、同じところを二度も手術した。二度目の手術は、三時間ほどの時間をついやした。胸から下は足の先まで全部ギプスでかためられていたので、ちょっと体を動かすことはできなかった。暑さと痛さのために苦しんだ。

手術をした傷は、ペニシリンのおかげで化膿もせず案外順調になおった。また骨折した部分も日のたつにつれてしだいになおってきたのだが、しかし約半年間もギプスをまいていたのと、ひざの関節の部分に、ほそい針金のようなものをとおしたために、ひざの屈伸の自由がきかなくなった。物療的方法もこころみたがやっぱりだめだった。骨をけずったために足も短くなった。

もはや不具になったことは決定的である。どうしても不具になることはまぬかれなかったのかと思うと、いうにいわれぬ悲しみが、ひしひしと私の胸をしめつけた。空虚な気持だった。こうして、私は苦痛と絶望と不安の約一年間を病院で送った。

私は見舞客の絶えがちになった、うす暗い、せまい病室で、おのれの運命をなげいた。しかし、いつまでもなげいていたところで、もはや取返しのつかない事態なので、ひたすら趣味の読書に専心して、つとめて自己の不幸を忘れることに努力した。人間社会の喧騒からはなれて、とかく忘れがちだった自然というものを身近かに感じたのもこのころからだった。よりどころのないうつろな気持を私は自然のなかに集中し、そしてこよなく自然を愛し尊敬した。そうするよりほかに、まったく自分を

なぐさめるすべがなかったからだ。

物事を深く追及して、冷静に思索する機会もえた。自己を反省もした。いろいろと勉強になったことはたしかである。だからといって、どうしてもおのれの不具を忘れ去ることはできなかった。それはいつの場合でも頭のどこかに陣どっていて、ときとして脳裏いっぱいにひろがって私をなやませる。

身体障害者といった自分の将来にまったく絶望した。これからの将来に、自分にいったいなにを求め、なにを目的として生きていったらいいのか、まるっきりわからなくなってしまった。夢も理想も情熱も瞬間にして消え去った。そして残ったものは人形のような悲しい存在だけだった。こうして失望のうちに、私は過去の幼少時代のことをいろいろと思い浮べた。私という人間は幼少時代からどこかしら陰性的な、暗い運命のベールに、おおわれていたような気がする。

ふりかえってみても、しあわせであったというには縁遠い環境のもとに育った。二歳のとき私は、父の弟、私からすれば叔父のところに養女となったそうである。私はその人たちを真実の父母と信じて成長した。いまから考えると(これは私のひがみかもしれないが)、養母はあまり寛大な愛情は示してくれなかったようにも思う。

やがて私は学齢期となって、小学校に入学した。学校に入ってからの私は、作文を書くことと、読書をすることに深い興味を持った。だから、あまり友だちとにぎやかに騒いで遊ぶことは、このまなかった。小学校時代から手あたりしだいに本を乱読した。でも読書は、いろいろな面で私を育ててくれた。ときには自分の知らない世界を教えられて、年寄りのように考えこんだりした。だから友だちと騒いで遊ぶことは、なんだかつまらないような気がした。

家に帰ってからも養父母とも必要以外のことはあまり話もせず、ひまがあれば本屋をきまよい歩いた。自分の思ったことを書くこと、読書をすることを唯一の楽しみとした。しかし本で読んだようなことが、実際、事実として私の身にふりかかってこようとは夢想だにしなかった。こうして私は、小学校五年の初期まで養父母のもとで成長した。

私が四年生のころから、あまり身体の調子がよくないといっていた養父が、ずっと床につくようになった。そ

して入院した。私は学校の帰りにはかならず立寄って養父をなぐさめ、その日の容体を日記に書いた。養父は前よりも優しくなったような気がした。そしてときには、

「本を読んでくれ、きょうは家に帰らないでそばにいてくれ」

などといった。私は養父の変ったようすに不安を感じた。そして、子供心にも、養父がこのまま帰らぬ人になるのではないかと思った。

私は一人床についてからそのことを考えて、ひそかに泣いた。そして急に甘えたくなった。私はいろいろおかしいことをいって笑わせたり、いたずらをして養父をこまらせたりした。そんな私を養父はしかりもせずにだまっていた。健康だったときの養父は、このようなことをするとじきに、小言の二つ三つはくれていたものに、と思うととてもさびしかった。

そうしたある日、私は病床の養父の枕べによばれた。いつになくあらたまって私を枕もとによんだのと、養父の顔がいつもより青白く、あまりにも深刻だったので、私は養父の顔を見るのがとてもこわかった。養父は私の顔をじっと見つめていたが、力のない目からポロポロと涙を流し、しばらくはなにもいわなかった。やがて涙ながらに語ったのは、私が養女である事実であった。

そのときの私の驚きと、悲しみは、まったくいうにいわれぬ複雑なものだった。涙があとからあとからとめどもなく流れ、そのために視界がぼうっとして、養父の顔もおぼろげにしか見えなかった。

養父はじっと目をつむっていたようだった。そのとき、養父は私以上に苦しんでいたのかもしれない。でも私は、この人たちが真実の父母でないなんてそんなことはうそだ。そんなことがあってたまるものかと、いくどもいくども否定した。しかしいくら否定したところで、事実であってみればしかたがない。養父は自分の生命の長くないことをさとって、真実を打ち明けてくれたのだ、と自分で自分にいいきかせて、最後に養父の言葉を信じた。

しかしまだ、小学校の五年生のころなので、それを信ずるまでには少なからず苦しんだ。それからの私は、父は生みの親ではなかったという意識に、強く私をおさえられて、

「お父さん」

とよんでいてもなんだか変な気がして、あまりよばないことにした。そしてまたいいたくもなかった。

ある日養父は、

「このごろあまりお父さんといわなくなったので、さびしくなったよ」

といって、目に涙をためて泣き笑いをした。私は急に悲しくなって、思いっきり、

「お父さん」

と叫んだこともおぼえている。それから数日後、養父は永遠の眠りについた。私はその死体にすがりついて心ゆくまで泣いた。そして、すくなくとも私が養女であったという事実を知らされる日までは、もう少し無邪気であった自分が、そのことを知らされてからは、養父にたいしてまるで態度が一変したことを心からわびた。そして、たとえ真実の親ではなかったとしても、自分にたいしてはよき父であったことを感謝した。

やがて養父の葬式もとどこおりなく過ぎ、落ちついたある日、私はまたしても第二のショックを受けた。それは、私が真実の親もとに帰らなければいけないことだった。親もとに帰るといっても、私はまだ見たこともない親である。養母は私を居間によんで、興奮した顔でそれを話した。このことは、以前に私が養女であったことを打ち明けたときに、養父が話をするはずであったが、養父はあまりにも私がかわいそうで、いうにしのびなかったというのだった。養父はきっと、無情な父であったとうらまれるのがいやだったのかもしれないと私は思った。

養母は、もうむこうの親もともすっかり話はついているのだし、またそうしたほうがどんなに私にとってしあわせであるかわからないと、なかば強制するように、なかば哀願するようにいってから、じっとうなだれていた。そういわれると、楽しかったことやしかられたこと、養父のことや学校のこと、いろいろなことが、走馬灯のように私の頭のなかをぐるぐるとかけめぐった。以前にもました悲しみと、心の動揺を押えるすべがなかった。そして私は考えた。ようやく片言まじりにものをいえるころから現在まで十年間も親子としていっしょに生活してきて、父が死んだからといって、なぜ生みの親もとに帰らなければならないのかと不審だった。そして、そうやすやすと子供を手ばなすことができるものだろうか、いままで示してくれた愛情はすべて虚偽のものであったの

か、親の権利の前には子は絶対服従的でなければいけないのか、いくら子供であるにしろ、一個の人間をそうかんたんに左右することができるものか、と憤りと悲しみの交錯した感情が、私を圧した。しかしそのあとから、私は養母に養母の生きかたがあり、もとより、私とはなんの血のつながりもない養母のこと、私がそばにいてはこれからの生活のさまたげになるのだろうと、一人小さな胸に自問自答して、すなおに生みの親のところへ帰る決心をした。それから数日して、現在の母方の叔父が、むかえにやって来た。いよいよ帰ることになったその前夜、私は家のなかにあるすべてのものに、いうにいわれぬ深い愛着を感じ、その一つ一つを手にとって、心ゆくまでながめた。

夜は夜で一睡もせず、家のなかやそとを、まるで、夢遊病者のようにさまよい歩いた。そして、それまで毎日書きつづった日記を全部焼いた。ただ一冊、養父が病床時代に養父の容体を書きつづったものを、私は私の身代りとして養父の仏前にそなえた。

翌日、養母は私たちを駅まで見送ってくれた。汽車の窓に立っている養母の顔をながめながら、この母が、私の真実の母ではなかったのかとふたたび見返した。そしていま自分は見たこともない男の人につれられていなかに帰る。私はいい知れぬ悲しさにとめどもなくでてくる涙で、窓ぶちをぬらしていた。いまから考えると、養母はたいへん気強い人のように考えられるが、あのホームでの別れの母は、眼に涙をいっぱいためて、私の手をにぎって離そうとしなかった。あのときの養母の顔だけはいまも私の脳裏にこびりついている。いよいよ発車のとき、私は、別れの悲しみにおしつぶされてしまって、どうしてもさよならをいうことができなかった。

こうして私は、その日から現在の母と弟妹たちと、生活を共にすることになった。しかし帰って来た生家も、私の想像に反して、まだいちども見たことのない父は戦死して、出征姿の写真だけが仏壇にそなえられ、母と幼い弟三人、妹一人が文字どおりの生活苦のなかにあえいでいた。しかしそんななかでも、私はやっぱり愛情の問題で苦しんだ。生みの親と育ての親と。親を親とよび、子を子とよぶことになんの変りはないけれども、そこは人間、やっぱり感情の動物、十年間もの親子の愛情の空白を埋めることはなみたいていではなかった。母はなに

かにつけて、弟妹たちと私とを差別していたように思う。

そんなとき私は、この人が真実に私の母なのであろうかと、すくなからず疑問をいだいた。そして一時は無情な親とうらんだ養母ではあったけれども、育ての親に強い郷愁と愛着を感じた。でも私は考えた。これはやっぱり私自身がもっとすなおになって、母の愛情をとりもどさなければいけないのだと。

それからの私は、母の愛情をえようといろいろ努力した。そしていままでのことは、すべて過去として忘れ去り、父の亡いあとのたくましいまでの生活意欲と、変ることのない母性愛を信じ、私たちを育ててくれる母に心から感謝の念をささげ、一日も早く、母の重荷の何分の一かでも、私がおぎなってやらなければと思った。また弟妹たちの将来も考えて、希望に燃えていた高校進学も、当然断念しなければならなかった。

母は私の就職をさがしまわったが、中学校を終ったばかりの私を使うところはどこにもなかった。日雇仕事から帰ってきて、夜、賃仕事の縫いものをする母のそばですこしずつ手伝いをする日が長くつづいた。ある日、友人から現在の勤先で募集していることをきき、さっそく願書を出してみたら運よく採用され、社会人としての一歩をふみだした。

こうして、私は現在の職場、秋田市交通局自動車課に、車掌として勤め、上役の命令を守り、職場の性質を理解し、より能率的により効果的に、自分で考案し、くふうし、忠実につとめ、月末にもらう給料袋に、少しずつ明るくなってゆくわが家のふんいきに、日々のつとめの楽しさを感じた。このころが、私の人生行路のもっとも楽しいもののように考えられる。世の中には災難とか不幸はつきもののようであるが、私にもその悪魔が、待ちかまえていたようだ。私は病床にあってこうした過去のことをいろいろと回想した。そして不具者となった私のこれからの人生への試練がはじまった。

やがて私は退院した。退院してからも、孤独を克服する力もなく、毎日毎日を意味もなくぼうぜんと過した。しかし、希望の夢がこわれたからとて、いつまでも泣くのはよそうと思い、失望のなかにも、そこになんらかの光明を見出そうと、またもとの職場にもどって働いていても、ときとしておそってくる患部の疼痛と、ひざの関節

の屈伸の不自由のために、思うような勤務はできなかった。

私は苦しんだ。こうした心の苦悩と患部の苦痛を理解してもらえないのが、なによりもつらかった。そして私は、五体の満足なものにたいして少なからず憤りを感じた。私はしだいに厭世的になった。本人の苦痛や苦悩をよそに、そんなことは問題外として、私のもらった労災保障額などをうらやましげに語りあっている人たちを、理解することはできなかった。私は、

「そんな金なんかいらない。もっとこの苦悩を理解してもらいたいんだ」

と叫びたかった。

それから私は、人間生活の裏面にたいしても、深く考えるようになった。そして私は、世の大人たちのあまりにも巧妙な手回しのよい処世手段に、まったくあきれてしまったことも事実である。また現実の社会では、すべての人間が自己の確実と自己の欲求を貫徹させるために、たえず闘争をくりかえしている。このように混然とした虚偽と偽善の世の中に、自分はなにゆえ生きねばならないのかを考えた。私は、つまるところ、人生とは無意味なものではないかという結論に達した。

私はショーペンハウエルの哲学書を愛読した。私はその書を読むことによって、自分はいまどんなことに苦しまされ、泣いているのかわからなくなってしまったのもたびたびだった。ときには、自嘲ににた感情が頭のなかをかけめぐった。私は真剣に考えた。みずから苦悩しない人々から出る美しい思想や道徳的談論は、耳には非常にこころよく聞えるが、それは口先だけのことでしかない。だから私はさけびたい、法律がなんだ、道徳がなんだ、そんなものいくらあったって、人間を救うものでなければ、なんにもならないのではないかと。

私は周囲の人々のなんの厚みもない、口先だけの同情にはうんざりした。それはいささかのあわれみはあっても、真実はないことを証明している。だから私は、自分のことは自分がいちばんよく知っている、よけいな気安めはまっぴらだと思った。そうした私に、幾人か宗教を信じたらという人もいたが、私は宗教なんて一時の気安めであり、また虚飾でもあると思った。私は、人生は楽しいことよりも、不快なことのほうが多いと思い、極端な厭世主義者となって、

「死は生なる事実の自然の継続にすぎないではないか」
という結論をえて、死を理想とし、すべてからの解放のためにいくどか死を決した。
しかし、そうした苦悶の日々をくりかえしているうちに、私は思いもよらぬ助言者をえた。その人は、年輩者でもあり、社会的にも地位のある人だが、不具者という意識のもとに卑屈になっている私を、真実の理解をもってなぐさめ、指導してくれ、私のためにいろいろと努力を惜しまず骨を折ってくれた。それによって私はいままでの人生観にたいして、少しずつ変った見方をするようになった。またそうしなければと努力した。そして私は、苦痛や、苦悩を、まったく忘却の彼方へ流し去ってしまうことはできないけれども、働くことによってそこから希望を見つけだそうと思い、人々のつまらぬむだ口を気にかけてはいけない、とみずからにいい聞かせ、真剣に仕事と取り組むことを心に誓った。そして私は自分から職場を楽しいものと、職場を愛し、職場を中心として夢の基盤をつくりあげたいと思った。
こうして私は真実に信頼しうる人をえ、なにごとにつけても打ち明けることのできるやさしい心の友をえ、やけくそだった感情をおししずめ、自己の向上のために一時的な享楽は望まず、ひたすら自己の目標をめざして、自分をみがくことを忘れずに精進しようと決心した。
すぐ下の弟は、修学資金やアルバイトなどをやって、全日制の高校に通っているのだが、家庭の経済的事情を考えれば、どうしても二番目の弟は高校にやることができなかった。勉強好きの彼のこと、どんなにか向学心に燃えているだろうと思い、かつて自分が進学を断念したときのことが思い出されて、ざんねんに思っているだろうと思うと、とても弟がかわいそうで胸がしめつけられるようであった。でも彼は、よくその事情をのみこんで、働きながら勉強することを誓った。そして学校の推薦によって、かつて私が幼少時代を過した東京に就職し、定時制の高校にも入学できた。
上京に先だって、私は弟に話した。
「これからあなたの進んでいく社会というところは、けっして学校時代に空想したようなところではない。むしろ、その反対の苦しいことのほうが多い。あまりにも複雑な矛盾した点を見せつけられて、びっくりすることもある。だからなにか問題にぶつかると、どうしたらいい

のか苦しむことがある。

しかし、そうした苦しみや圧迫に負けることなく進み、どんなにつらくとも、どんなに悲しくとも、がまんして前途に大きな希望を抱き、けっして失望などすることなく努力し、そしていつかは、かならずその努力の結実が報いられることを信じてはげみ、勤務に勉強に、がんばって、なんの恥じるところのないりっぱな社会の一員となってください」

と頼んだ。弟は、その一言一言を、よくわかってくれたらしく、

「わかりました。がんばります」

といったときの弟の顔は、真剣そのものだった。

やがて上京の日がやって来た。弟は、あとしばらく見ることのできない故郷の景色にみとれていた。その顔には一種の哀愁と、いうにいわれぬ別れの悲しみがただよっていた。発車のとき、母はあとからあとから流れ出る涙のしまつに閉口していたようだったが、いくらがまんしていても、そこは親子の情、思う存分に泣きたかったのだろうと思う。そこには、私にはわからないものがある。でも私は、一生懸命別れの悲しさをこらえた。いまここで涙を流したら、希望に燃えて出発する弟の前途に暗影を与えるような気がしたからだ。弟も涙をこらえていたようだった。

こうして弟は上京し、いまでは元気で働いているとのたよりをたびたびよこす。しかし、たまらなく郷愁を感じているらしい。

一時は不具の身を悲観し、家庭的にもめぐまれなかったことを嘆き、世の無情と、矛盾に憤りを感じ、世の中をのろった自分も、いまは気もおちつき、就職のために遠く離れて行った弟の年端もゆかない姿を思い浮べ、貧しく、その日その日がぎりぎりいっぱいの生活ではあっても、家庭的なふんいきのもとに働くことのできる自分をしあわせとし、毎日毎日を、地下足袋をひきずりながら、汗と泥にまみれて働き、女手一つで私たちを育ててくれる母に、心から感謝の念でいっぱいである。

光は働く道に

甲山明春
〔島根県　店員　十六歳〕

父よ、
母よ、
——学校と職場と
天ビンにかけた、ひとときのことが
しみじみ後悔されます。
それは
行けさえしたら学校は尊く
それが人間をたかめ
知識や技術をたかめますから
よりりっぱな社会人として
すぐれた仕事ができるでしょう。
だけど
国民としての教養だけで
いちばん底から働き
成人していくのも不幸ではありません。
僕は一徒弟となり
せんべい職人へ出発しました。
愉快です。
幸福でさえあります。
なにか悲しかった学生との訣別が
勇気を起させ
希望に燃えたたせます。

父よ、
母よ、
——学校と職場と
まるで天国と地獄との別れ道のように
思いなやんだものですのに
それは
自然のめぐみのちがいだけのことで
人間「僕」の価値でないことを
働きながら
汗をふきながら知りました。

父よ、
母よ、
あの、僕を育ててくださった家の座敷で
お茶の時間にせんべいを食べながら
僕のうわさをなさいますか。
そのとき
僕のためにいのってください。
日本一の
世界で一級の
せんべい職人になる僕のことを……。

永井光子

〔新潟県　縮布工　十五歳〕

風

まどから風がはいって来た。
音楽の本を
ぺらぺらまくっていく。
めくるとこまでめくって
ひきかえした。
にくらしい風ね。
もういっぺんもとになおしてよ。

蟻

蟻はころんだことがない。
わたしはこないだころんだけれど
蟻はころんだことがない。
じゃり道だって坂だって
へいきで、えさをはこんでる。
はたらいてる蟻なんてどこにもいない。
かあさんよびながら
うちへかえった蟻なんて
どこをさがしてもいないだろう。
わたしはいつでも見ているけれど
蟻はころんだことがない。

生活記

川谷広志
〔岩手県　農協員　十七歳〕

町はずれの北のほうにある小さな農協、それからまた北のいなかのほうへ電灯もない小さな小屋の家、八畳の部屋に七人の不自由な生活で、あるときはランプの薄暗い日も少なくはなかった。八畳の部屋でも家財道具があるため六畳ぐらいで、そこに七人の家族なのである。

中学を出てから職を転々し、勤先がおもわしくなかったり、不景気のため、職もなく毎日毎日ぶらぶらしていた。

はだ寒い三月の半ば、家にいてもおもしろいこともなく、ただ一日一日が過ぎて、弟が中学を卒業しないうちに、どこかに就職せねばならないと考えていた。

ふだんあまりいい顔も見せない母が、

「隣りの農協の組合長さんがお前を使いたいそうだ」

と喜んで家のなかにはいってきた。

これがいま僕の勤めている、町はずれの小さな農協である。

ああ、やっと職が見つかったか、すると授業料も払えるし、なんとかなる、と心のうちで一息ついた。母は職さえ見つかればあとはどうにかなる、いま職をさがしたってない、働こうったって職につけない人がいっぱいいる。お前にきてくれといっているから行け、となんどもくりかえして聞かせる。それから数日後、組合長がやって来て父や母になにごとか話して帰っていった。

この相談は、父にはどうもおもわしくなかったとみえ

てことわっていたが、やとわれたのである。
ただ母だけが喜んでいた。とにかく、この組合（農協のこと）はあまりよくない評判で、僕に、
「組合で金払うか？」
ときく人もある。組合長は父や母を上手な話で安心させたらしいが、職員たちは勤めはじめのころ、
「おめえ、どこの学校終った？　どこの高等学校終った？」
などときくのである。そうきくのはあたりまえかもしれない。
「商業学校終ってきた人だ、使いやすいが」
などと――。たしか僕のことをやとうとき、中学を卒業し夜間（定時制高校のこと）に行っているわらす（子供のこと）でもよい、と相談してきめたそうだが、どうせ金は安いし、こんなところに来るんじゃなかった。さがせば職はたくさんある。こんなきたないところで働くのか、と思うと反抗の気持さえ起ってきた。
もしもこんなことが父や母に知れたならと思い、がまんして勤めた。僕を加えて職員はたった三人、組合長は三十分か長くて一時間ぐらいすると、自分の都合で勝手に帰って行く。
「お前も一人前になったら、ウンと月給を上げてやる。早く仕事を覚えろ」
といったものの、組合長は早く帰るためにいっこう仕事を教えてくれない。職員もさっぱり教えてくれない。知らんふりしている。
組合長は父や母に、
「金は安すがんすけども三ヵ月したら上げあんすから、がまんしてくなんせ」
まちがいなく金は払いあんすからといったそうだが、それを思いだすと組合長の話がおかしくもある。
あたりの人たちは、
「おめえ、いいところに勤めたな、たいした金もらうんべな」
とだれもがいう。とんでもない、こんな安い金で使っていつまでたっても上げてくれない。話はまったくでたらめであった。
「わらしやど（子供ら）は、だまって、大人のいうことを聞いてかせぐんだ」
と母はいうのである。

いくらわらず、でも人をバカにしているとしか思われなかった。

二十一日は月給日。月給日という日はだれでも楽しいし、うれしい日なのであるが、おもしろくない。きまった日に払ってくれないこともある。これならいいほうで、やっと月給をもらっても翌日返したことがある。月給をくれたことにして全額貯金、これから少しずつ払戻すのである。わずかな月給をながめてたった一晩の喜びであった。組合長は早く帰るためこんなことを知らない。もちろん組合長の手から月給をもらったことは一度もない。経営困難なためにこんなことをしたのである。組合長は金をくれたつもりでいる。だから月給日という日はおもしろくない。

授業料を払おうと思って貯金から払戻そうとしたら、二、三百円ならいい、と職員の会計にいわれたこともある。こんなことがあってから母は、

「組合長はまちがいなく払うといったはずなのに、こんな安っぽい金払えぬのか」

と腹を立てる。でも僕はけっして組合長や職員をにくむわけではない。同じ年配の年少労働者が僕よりどんなに苦労して世の中で働いているのか、と思えばこれでも僕はめぐまれている。

夏からは農家の収穫期で、小さな農協でもたいへんいそがしい。十七貫余の米俵や麦俵を倉庫のなかで上げたり下げたりすること数十回、背負えば体が小さいからつぶされる。

だから両手でもち上げる。幼いとき足を病んだので、こんな小さな体で十七貫余の重いものを持たされると足がとても痛む。もうやめようかと思うときもある。でも百姓のためなら自分の足がどうにでも——と思うことがいくどもあった。あるとき母に、

「きょうはどんな仕事をした」

ときかれたことがある。きょうは麦俵百俵近く、になったというと、

「お前、小さいときから体が弱かったから無理をするな、あすから休め」

という。いまようやく僕の懸儀していることに気がついたらしい。このときほどありがたかった母の言葉はない。いつもなら大人のいうことをきいてかせぐんだといわれていたのに——かわいそうに思ったらしい。

夜は学校へ行くのがほんとうにうれしい。同じ年配の労働者の元気な顔を見るのが、勉強よりなによりで、一日の疲れを回復する場所でもある。夜学の帰り、いなか道をただ一人あるいて、家のなかに入れば薄暗いランプがまだついている。不便なランプの下だがホッとする。

家中は一日の疲れでもうみんなやすんでいる。

母のそばで寝ている末っ子の弟、ときどき、

「父さん電気いつつけるの？　電気をつければラジオも聞えるよ」

といったことがあるが、寝ている末っ子の無邪気な顔が薄暗いランプの光でかすかに見える。もうたまらなくなって涙が出てくることがいくどもあった。

わずかな給金をもらって、それも自分の使う金さえすぐなくなるのだもの、なにも知らぬ末っ子の弟にお金をくれようったってできっこはない。こうして親子が食うだけの生活でいっぱいなのに、もう六十にもなる父にまでたよって電気をつけようったって、それはいつのことか。弟たちにはつらい思いはさせたくないと、薄暗いランプの下で思うとねむられない。もう夜はふけてランプの石油はいくらも残ってはいない。

一つの訴え

岡野英子
〔福岡県　事務員　十六歳〕

労働組合は、その職場に働く人の人権を守るため、また労働者の日々の生活向上のためにつくられたものである。これは常識だ。このように働いているほとんどの人たちは、自分たちの組合を持っている。それによって完

全ではなくともある程度は守られ、また健康を保障されている。

労働者は組合をつうじて各職場の労働条件を調べたり、中小企業等はまたそれなりに調べられている。調べられた効果があるかどうかということは別として、その調べを受けない者が多数いることは、周知のとおりである。そのなかに特殊なものとして労組勤務の書記がある。組合は上下の差はひどくなく民主的ではあるが、必ずしも書記にとって理解あるものではない。むしろ封建的でさえあり、資本家にまさるともおとらぬ無理解、酷使を行うものであることを、私はぜひみんなに知っていただきたいと思う。

私の場合、教職員組合であるが、それは学問にある程度の理解があるということのほか、あとは他の労組となんら異なることはない。

一般に組合は時間的な区切りの非常につけにくいところだ。私が勤め出してから足かけ二年になるが、まだはっきりと時間のきまった昼休みは一度もらったことがない。闘争中など会議が三つ四つ重なると、食事をするときがなく、息をつくことのできるのは四時すぎ、それからおそい昼食をすまして、あとかたづけをすると五時にたり、疲れた体を学校にはこぶ。普通の日はひるの時間に適当に昼食をとる。友人が昼休みというきまった自由な一時間をもっているのがどんなにうらやましいことか、また当然のことでありながら、それのない自分をどんなにあわれに思ったことか。

満員電車から飛び出て、教室の机に向うともうなにもしたくない。すぐに授業がはじまる。眠るまいと思うがつい頭が下を向く。いっそ十五分か三十分ぐっすり眠ればあとは眠くないからと思って机にうつむく。目をさましたときはたしかにいいが、眠っていたあいだの授業のプランはどうしようもないのだ。家に帰ると疲れて、おそい夕食をとることだけが精いっぱいだ。そして明日のために眠らねばならない。

しかし明日は将来につづく、自分は将来のために勉強しているのではないのか、それなのに「明日」のためには、予習と復習もしないで眠らなければならない。このいちばん身近かな矛盾に悩むのは、なにも私一人ではあるまいと思う。

一学期の中間考査は五月二十日からであった。十五、

十六日が県本部の大会でいそがしく、ちょうど二十日は支部総会。ほとんど毎日膨大な原紙切り、謄写、電話、連絡等々、試験というのに勉強はなにもできなかったが、それでも疲れた体で三時まで起きていた。

試験の前のたいせつな日曜日が十六日でつぶされたのに代休もなく、それどころか二十日にひかえている二千人の組合員の総会のために毎日毎日がいそがしかった。総会はM小学校であった。運悪く学校とM小は市のはしとはしで、約一時間ぐらいもかかるところなのだ。五時四十分から学校がはじまるので、四時半に出ればいいと自分は思っていた。

しかしその日は午後から雨がふりだし、総会は一つの議案が思いのほかもめて、投票がなんどもある。普通のいそがしさではない。もう時間を気にするひまもないのだ。悪いことには、外は雨で時間の過ぎているのがわからなかった。私が気づいたのは五時二十分、外は雨がはげしくふっているが傘もない。学校に行っても遅刻だ。おまけに総会はまだもめぬいて、手を離すことのできない仕事が二つ三つある。その日の試験は三科目であった。どんなにくやしかったろう。こんなことなら毎日おそくまで勉強はしなくてもよかったと思うとおもわず涙が出てきた。

つぎの日、学校に行って先生に事情を話し追試験のことを聞いたら、学年末だけということであった。そしてつぎにいわれたことは、

「君は教組に勤めているのだから、試験だといえば休ませてくれるだろう」

と、ほとんど当然だというような顔である。そのとき、私は組合というところはそうなまやさしいものではないのだ、といい返してやりたかったがぐっとこらえた。

先日、市内各労組書記の会合をひらいたときに訴えられたことは、ほとんどが低賃金、労働強化であり、超勤手当や健康が保障されていない点であった。ただひとつ明るい話としては、県総評の人たちが、一昨年と昨年にそれぞれ三千円と一千円のベースアップを闘いとったことぐらいのことだけであった。

書記は毎年必然的に越年越夏の闘争の際、非常な労働強化をしいられる。しかしそうして獲得した金額を、やはり越年越夏の手当として受ける書記は何人いるだろう。いそがしいときに執行委員以上の働きを要求され、

その後に委員たちには慰労金などがあっても書記にはない。執行委員に通勤手当が出ても書記には定期代も出ない。このように労組自身が封建的な日本に、働く者のほんとうの幸せがあるだろうか、また当局が各労組をつうじ、会社をつうじて、その職場の労働状態を調べることは、その労組の書記にとっては、労働強化反対のための労働強化なのである。

労働省から出ている夢のような年少者メモやその他のパンフレットに書いてあることが、大企業にだけ適用され、他の大部分にはなんら具体化しない現実をどう解釈すればよいのか。私は叫びたい。虚偽でない真実の労働者の団結が必要なのではなかろうかと。

心の歌

福井勇二

〔東京都　見習工　十五歳〕

薄暗い土間のなかに先生の顔がぼんやりと浮びあがっている。ただひとみだけが熱情のため、きらきらと光っていた。「勇二君のお母さん、新制中学だけはぜひ……」といいながらも、わが家の貧しさに気押されたのか、うつむいている母とともにうなだれてしまった。たまらなくなった私は逃げるように暗い路地の汚れたへいに、もたれたままかくれていた。学校がなんだ……、行かなくたって……と心にきかせながらも、さびしさはおおいきれなかった。先生のクツ音が一つ二つと消えていくあとを、いつまでもいつまでも路地から見送る私の胸に、ぽつんと取残されたように先生が帰りがけ母に、「勇二君に最後のひとことです、どんな仕事にも希望と夢を持つよ

うに」この希望という先生の一言が、どれだけ私をなぐさめてくれたであろう。

そうして私は小さな胸に夢と希望をのせて、ある染色工場に技術見習とはいえ、小僧のような仕事を見つけて、社会の第一歩をふみだした。

朝五時ごろ、遠くの停車場から、東京から信州に行く列車の音が私のまくらもとに流れてきた。「もうだれか起きたかな」無気味にしずまりかえっている工場のなかを、ねむたい眼で追ったが、だれも起きている気配がなかった。ただ工場の大時計がカチカチ、なにか冷たいなかにも快いひびきで前夜来の疲れを、なぐさめてくれる。

「よかった」この染色工場にきてまもない私には、自分より早く起きる人がいるとなぜか不安でこわかった。それは数日前、この染色工場に母につれられてきたとき、母は主人や働いてる人たちに私のことをくれぐれも頼んでの帰りがけ、虫がなきだす草陰に立ちながら「勇二、体だけは大事にせんとな」と声をつまらせながら「それに勇二、ねむいけどな、朝は早く起きて、みなさんにかわいがられなけりゃ」「うん大丈夫だよ」母は小学校を卒業してまもない私を、たまらなくなったのか、年余の疲れでしょぼしょぼした眼をさけながら「勇二、またくるからな……これなにかのとき……」私の手のうちにむりやりに黒く汚れた百円札が、おしこめられていた。「おっ母あ。ぼく……大きくなるまで……まって」という言葉が涙とともに、胸もとにつかえたようで苦しくなっていた。母のやつれた姿が消えるまで立ちすくむ私の心のなかに……なつかしかった先生の口ずさむ歌がうかんだり消えたりしていた。

はたらけど
　はたらけどなおわが
　くらしらくにならざり
　じっと手を見る

「なにくそ」私はこの歌になにか反感を持ちながらも、くりかえしくりかえし同じ生活に追われる私の母や知合いの人たちのことをさびしく思いだしていた。窓をあけはなし、庭をはく手も東の空があかるくなるにつれ活気をおびてきた。「おはよう」「おはよう」と、くる人、起きる人のなかに工場の窓は朝の日光を、いっぱいに浴びていた。

朝八時、ボンボンと時計の音とともに、まちかねたよ

うにモーターが勢いよくうなりだした。この染色工場の仕事は、きものや洋服などの加工しない無地糸を、黒、赤、青と、とりどりの色あいに大きなカマで交互に染めあげ、各地の織物工場に送り、私たちのきもの、洋服になるのであった。脱水機、カマ、ネリアゲと立働く人たちは、私の腕、体よりは二倍も三倍もあった。そのなかでこれから働く自分に不安があり、こわかった。だけど体一つで汗が玉ころのようにとびあがっている人たちには働く喜びがあふれていた。それが私にはうらやましかった。

私の仕事はぐるぐると脱水機から、カマから、ネリアゲと、赤や白の糸を運ぶ役目であった。カマの下は真赤にただれた火の顔が怒りくるっている。ものすごい熱気にうれた工場のなかにときおり初夏の風がまぎれこむが、とまどうままに追い返されてしまう。二つの眼へ流れ落ちる汗に、ともすると乱れがちの足もとから「気をつけろ、カマのなかに落ちたら、どうするんだ」とどなる声ががんがんと耳もとにはねかえる。「めしを、どこにくってるのだ」あとからあとから追いかけるように、となり声がついてまわっている。「なにくそ」とりきむと、ますますヘマをする私の体をくやしくもあり、あつかいかねていた。時計はつかれも知らぬげに七、八、九、十……十二時とあゆんできた。ボンボン、ボンボン「めしにするぞう……」ガクン、ガクンとモーターが、ほっとしたようにとまった。「モーターにもめしをくれろよ」私ははじめのうちは、なにがなんだかわからなかった。それはカッカッと熱気がほとばしるような動力機に油をくれることであった。

食後、工場のなかとはまるで別世界のような木陰に板切れの将棋盤を持ちだして、遊ぶ工場の人たちのうしろに、私はいつでも用事ができるようにこしかけながら……ふと家のことを思っていた。遠く山の中腹にかけて立ちのぼる白い煙がゆらぐままにすそに消えていく。

風がでたのか、散らかった山の上の雲が北にむかって動きだした。

「勇坊……おやじがよんでるぞ」「そうですか」

工場の入口に立っている主人の四角な顔が、大きくほころびて待っていた。「勇二なれたかな……」「ええ」「うそをつけ。さっきも岩にどなられていたろ」顔が赤くなった私はうつむきかけた。「バカ、しょげるやつがあるか、あんなことはあたりまえだ」主人の口からまる

でかまどの口のように、たえずタバコのけむりが流れている。「勇二、忘れるところだった、今晩から町の夜学に行けるからな……」「ほんとうですか」うれしく涙があふれそうであった。「だれがなんといってもしっかりやれよ」

どこかの会社のサイレンがうなるままに一時を知らせている。「仕事をやるぞう」私の見た社会、まして小僧という位置にいての勉強が、どれだけ風あたりが強いかはじめから覚悟していた。それだけに主人の陰からの理解が涙がでるほどうれしかった。「おやじがなんていったんだ」こらっと肩をたたいていく人たちにもまれて工場に入った。すっかり疲れをなおしたモーターがグルングルンとかけだしていた。

「さあ行こうぜ」「よし」白い糸から赤や黄に染めあがってゆく重い糸が、私の腕におどりあがるようで、おもしろいように運ばれていった。「いよう、チビ公はりきるなよ、カマの中に落っこちるぜ」「ウワッハハハ」とひやかされながらも私の胸には、ほのぼのとした温かみがしぜんと口もとの笑いとなって現われていた。午後の仕事はまるで手足が機械のようにいうことをきいてくれた。初夏の日長もいつしか工場の油ガラスを通してくれはじめてきた。汚い窓ガラスに夕陽が惜しみなくてりつけ、ときおり、子供たちの家路にいそぐ姿が大きくうつしだされてきた。

脱水機、モーターは一日の最後の力をふるうようにカッカッと白熱でかけめぐっている。

午前中に山のように積んであった無地の生糸も大きな時計が五時をまわるころには、目のさめるような赤、黄、茶、黒とすっかり化粧され、工場のすみに美しく積みあげられている。

「終ったか」「まだまだいま少しだ」「早くしろよ」「よし」染色という仕事は夜間は無理で、できるなら陽が落ちないうちに色の見分けをするのだ。私はねりあげた赤ガマをホースで一つ二つと洗った。「チビ早く洗って魚取りでも行くか」仕事中は岩さんはじめみんな恐かったが、きれいに積みあげられた糸の山を見てからのみんなの顔は「よかった」……笑いと汗とタバコのけむりでごちゃまぜである。

とりわけきょうの私はうれしかった。学校に行ける——私の心はおどっていた。工場の窓をしめていくう

ち、「そうだ、おっ母あに手紙をだそう」と思った。最後の窓を閉めるとき、小さな体で背いっぱいのびあがりながら、遠く山の彼方の、母のいる故郷を見つめていた。「おっ母あ、まっててくれよ」私の体のなかから涙がかけあがってきた。

工場の人たちは帰ったらしく、しずまりかえった工場のすみで、あすの支度に余念がない主人が、うつむきかげんで、なにかしらべている。

時計がおなかをすかしたらしく、ボン……と一つを打つと止まってしまった。私は急いでネジをまきにかかった。はじめてこの工場に来てからの私のなぐさめ役だった時計……。

「勇二、早くめしをくって行けよ、おくれるぞ」ネジをまいてる私に主人はいった。

「はい」私は落ちる汗を、きたない手でふきながら、ぼんやりつきだした食堂のあかりにむかって、かけだしていた。

幸福

市川嘉寛
〔東京都　事務員　十九歳〕

ただ一人目さめて
君は何を求める
愛情、幸福、黄金か
もしそうだとしたら
君はあわれなアナクロニストさん

愛情は前世紀にはありましたがね
黄金には手がとどきませんね
幸福は来世紀には
ちょっぴりあるようですね

満　月

甲山明春
〔島根県　店員　十六歳〕

満月が
地球の歴史の上に
私の上に

満月は知っている
戦争も平和も
英雄も無名の戦士も
そして知っている
小さな私のことも

満月は
ひとりの上に照り
ひとりの上だけに照りはしない

私はきょう一日
働いたことを月に満足する

絵　本

石川襄嗣
〔群馬県　農業　十五歳〕

市場へトマトを売りに行っての
帰り道　町の本屋で　弟に
絵本でも買ってきて
やりたかったが
朝四時におきて
汗を流しながら
五里の道を運んだことを
思うと
たった五十円ぐらいの本でも
買えなかった

日記の中から

井田武夫
〔大阪市　事務員　十七歳〕

第一話

昭和二十九年七月五日

五月五日から、のびのびになっていた社員慰安旅行が、ようやくきのうときょうにかけ、紀伊白浜温泉に行くことになった。

白浜温泉は関西の熱海と呼ばれている湯の町。また千畳敷、三段壁がおりなす海岸美は都会の喧噪から逃がれるのに適し、日ごろの気持のアカを洗い落してくれるようだった。

一行中、最年少者の私は夜がふけるにつれ、他の人たちがくみかわしくみかわし痛飲する酒のにおいと場内のふんいきに陶酔した。大声で〝炭坑節〟などをうたい、日本人特有の醜態が目にあまった。

そのとき——

「おい、お前一杯飲まんか」

「はあ、僕よう飲みませんねん」

「なにやと、十八にもなりよって酒もよう飲まんのか」

「はあ……」と僕は赤面した。

「おれら、小学校六年のときから飲んでたぞ、あのころの酒はうまかったがなあ……」

と、みんな大変なけんまくだった。

しかし僕は一滴も口にしなかった。

「お前、ええところへつれたろか。来いよ」

「あかん。あかんぞ。子供には毒や」
僕にも彼らの行先がどこかわかることができた。しかし、僕にまで誘惑の手が延びたとは驚いた。僕はまだ子供で十分だ、でも月給は多くてもいいと思った。
みんなは社長から小遣いをもらい、バタバタと階段を下りた。
僕はそのとき、とつぜん、大人に対して憎悪がむらむらとわき起り、また不満と思う気持が身体中をおおった。——僕は大人になりたくない、そしていつまでもいつまでも童心を失うまい。しかし、あの人たちはもう一人前なのだ。子供の僕には理解できないことなのだ。大人になれば、しぜんとわかるだろうが……。
暗黒のなかで、波がピチャピチャと岸を洗いつづけている。

第二一話

昭和二十九年七月十七日

「岸さん、きのうはなんで休んだんや」
「うん、ちょっと用事があってな、社長さん怒ったはった？」
「社長はべつに……、おれが怒るぞ」
「なんでやのん？」
「昼食のときにな、社長がおれに茶をわかせいいよってんやんけ……」
「それで……」
「うん、ちょっと茶が多かってん」
「どのくらい入れたん？」
「小さい茶びんに、手に一にぎりや。ほんなら社長苦虫をかみつぶしたようになりよってん」
「ははは、ケッサクやな」
「なにいうてんねん、おれ、えらい恥かいたで」
「以後、私のすることをよく見習いなさい」
「はい。わっはっは……」
と、二人はそのとき大いに笑った。
「これからも、ときどき休みますから社長さんをこたいせつに……」
「おちゃいうなよ」
「井田さん、あなただけにいうわ、だれにもしゃべったらあかんで、ええな。実はきのうねえ、幼稚園の保母さんの試験受けてきたんよ」

「え、幼稚園……岸さんそれほんとか。そんな顔やったら子供が泣くわ」
「まあ、失礼ねえ」

しかし、その後彼女のもとに不合格の通知が来た。そのとき岸さんの顔には期待を裏切られた悲しさがただよっていた。ちょっと僕も同情せずにはいられなかった。

オフィス・ガールにあこがれる人々のうちにも、子供につよい愛情をもつ岸さんのような人もいるものかと感心した。でも女性は結婚により職場を離れるが、僕たちは違う。だからいっそう大きな夢を持たねば前進することは不可能なのだ。

長い人生に生きる。

りっぱな人間をつくり、そして生活力を増進させるため　夢を持つのだ。

夢。僕の理想。

それは僕が土木建築技師に。いやそれ以上に大建築会社の設立をと果てなき夢を描きはしているが、大成するまでに戦争が起らねばよいがと思うばかりだ。

父のない子をみるにつけ、いつも思いかえされる戦争。戦争が起れば僕たちの夢も生命もなくなるのだ。僕たちにはなんの責任もないのに……。

第　三　話

昭和二十九年七月二十三日

夏祭でにぎわう表通りで、友人と雑談中こんな話が出た。

「おい、最近、土木関係業者に汚職が頻発してるけど、お前とこはどうやねん」と、友人の高校生が質問してきた。

「ははは、おれんとこの会社は小さいから、そんなことあれへんよ。もし起ったところで僕らに影響はないよ」と答えたが、中学卒で就職できるのは、やはり小企業の商店か町工場ぐらいなのだ。ちょっとひけ目を感じるが……。

「せやけど？　井田とこら、公けの事業やったら大阪府から請負いするのんやろ。そのとき仕事を引受けるときはどなえすんねん？」

「そらな。府から仕事を発表したらやな、多くの請負店が集まって入札するんや。それから府当局は、その会社の営業状態、信用度等を調査するらしい、そのうえで契約すんねん」

「ふうん」
「中央市場と同じやな……」と八百屋の息子がいった。
「契約終了後やな、資材や原料の値段が上がった場合なぞ損やな？」
「そんなときは、たとえばやな、砂を十使用するところを八か九にとめて引合わすのんと違うのんか」と将棋をさしていた友人（この友人も某鉄工所に中卒で働きに出ている）がいった。
「そんなときもあるやろな。堤防工事などやったら、いまいいようなこともありうるわな」
「ふうん、そんなもんかな」
「おれら、学校へ行ってたらそんな生きたことなど教えてもらえへんもんな」
「しかし、不徳な業者も多いねんなあ」
「せやけど、台風や地震などの天然の災害でもうかるやから、なにか変な商売やな」
「〝台風が来ればもうかる土建業〟か」と一人が俳句とも川柳ともいえない句を一句ひねり出した。
中学卒で社会の荒波に漂流した僕と、その後高校へ進学した友人とは、もはや社会的の見地から見て僕のほうが上だ。卒業後二年でもう社会の裏面というものも見聞した。将来、この友人と僕はどちらが早く大成するだろうか。「よし、がんばるぞ」と未来に対し、おう盛な英気がわき起ってきた。

思い出

武田静子
〔山形県　女工　十六歳〕

暦の上では立秋もすぎや秋めいた朝夕、涼風が低い杉皮ぶきの小さな家へ流れこんでくる。夕食のあとかた

づけもおわり、一家そろってだんらんのひとときである。このときは昼のつかれも忘れて、みな子供のように無邪気に語りあう。

これは一日の日課ともいえよう。貧しいながらも一家七人(祖母、父、母、私、弟、妹二人)は、それぞれ生きがいある楽しい毎日を過しているのである。

祖母は母のおかあさん、若くして祖父に家を出られ、あらゆる苦労をして四人の姉妹を育てたのである。それで母は祖母の苦労を知りつくしているので、あと短い命を一日でも楽しく暮せるよう毎日努力を重ねている。父が弱い体をひきずって、家族のため大工の道具箱をかついで出てゆく後姿を見ると、いかにも貧しい人の影である。弟(中学一年)、妹(小学五年、一年)の三人は父母の手に導かれ社会に巣立っていくのである。

私の幼年のころ、無邪気に遊びまわる私は父母に愛された。はじめての子供だったためもあったと思う。父は高等二年卒業後、東摂村から香澄町へ家大工の弟子入りをしたのであった。弟弟子としてのつとめから、勝手の手伝い、あらゆることをしてりっぱに一人立ちしたのである。映画が好きで勤先から見に行き、夜おそく師匠の家へ帰る。家人にめいわくをかけないよう水をのんで床へ入ったことはいくどもあったとか……。こうして父は母のところへむこに来たのである。それから父は祖父のたくした家をとりかえそうと一心不乱に働いた。あくる年、私は生れた。なにも知らず無心にねむる私に、父は毎朝「静、父ちゃん行ってくっからなあ」といって出かけていったそうだ。

物心ついてから、よく旅から帰った父が、みやげに買ってくる大きなこけし人形、絵本などを、夜おそくおこされて目をこすりながら、もらったことがいくどか思い出される。

早く家を取り返そうと懸命だったが、それもむなしく医者にかよわなければならぬ身となってしまった。当時父は警防団の分団長であったため、医者に通うかたわら、病気の身をおしてツエをたよりに婦人会の防空の指導にあたった。こうして無理に動かしたのがいけなかった。私が一年生の真冬、いつ起きられるかわからない床についてしまった。病名はひどい関節炎だった。急に私の家は灯が消えたように暗くさびしくなった。母は妹を背に吹きあれる雪のなかを、父をソリに乗せて篠田病院へか

よった。家へ帰れば父は寒さのため床に入りぐったりと目をとじた。母は息をきらして妹を背からおろし汗をぬぐう。毎日くりかえすうちに父はますます悪化していくばかり、顔の肉はおち、目はくぼみ、一苦しみするごとにシワがふえるばかりであった。

母は絶望にうちひしがれた心を、気の強い祖母にはげまされ、毎日を父の看病に懸命だった。また父は死を待っているような顔で、食もとろうとせず、うつろな目をすすけた天井へむけていた。幼い私でもこのときほど悲しく思ったことはなかった。ただ無性に涙がこぼれるのである。食欲がない父のために心配し、牛乳をのませようと私は朝暗いうちに起きて、吹雪のなかを双目の牛乳屋まではしった。戦時中で配達などしてくれなかった。深雪をおかして行くときなどは、途中でひっかえそうと思ったこともいくどかあったが、父のやせほそった顔を思い出すと急に元気になってかけだしていった。

こうして暮していくうちに、せっかく家を取り返すのに旅をしてまで働いた金は、いつのまにかわずかとなってしまったのだ。いままでは金の方の心配はなく看病をしていた母は、金の心配がでてきてからは、あんなにふとっていた体が日に日にやせていくようであった。祖母は見かねて行商に出かけた。わずかな収入で親子六人はほそぼそと水をすするようにして暮した。戦時中のことなとて物は思うように買えず、病人のたべものまで不自由であった。地面にはえている雑草は食糧の一部となって口へ入っていくのだった。祖母の行商がうまくいき米を求めて来たときは、久しぶりでご飯を食べた。このようにしてどうにかこうにか四年生になった。あすから夏休みだという前の日、朝早くから大家と、こんどこの家をかりる人が荷車いっぱい世帯道具をつけて庭へ乗りこんで来た。前から予期していたことではあったが、ことわりもなしに来るとは思わなかった。父母はもう少し空家をさがすまでまってくれと頼んだが、涙も情けもない大家はがんとしてきかなかった。やっと頼って空家をさがすまで裏の六畳をかりることになり、いくらもない世帯道具をひっぱり出した。

私は弟の手をにぎり、おろおろしていたが、休のよくなおらない父がねじり鉢巻をして道具を出しているのを見ると、自分の前に立っている冷酷な大家をなぐりとばしたいほどにくらしかった。六畳におさまってみたものの

部屋がせまく七人もの家族がねられようもない。祖母と私はおばのところへとまりにいった。早く父母と同じところにねたいなあと思ったがしかたがなかった。でも幸いに父は快方に向い、起きられるようになった。でも昔とは変った「かたわ」となってしまったのだ。

母は死なれるよりいくらいいかわからないと私に話してくれた。かたわになろうと、父は私の父であると思うといくらか心が晴れた。毎日父は朝から晩まで空家をさがしたが、なかなか見つからなかった。青白い顔をしてツエをたよりにつかれた足取りで帰る父は、さながら苦労をしに養子に来たようなものだった。

だが、父はぐちひとつこぼさず、汗みどろになってあるきまわっていた。ある日、昔いっしょに働いていた友人が来て家のありさまを見ていたが、弱い体を無理と思うが神町の仕事の見まわりをしてくれという。そのかわり家から古材を持って来てここへ住むところを造れといった。父母はどんなに喜んだことか。それからというものは朝六時というと出てゆく父、夜は夜で帰るとすぐおそくまで住む家の仕事に、休むひまもないほど働いた。そのときの父は笑いを忘れたように働きつづけ、その年の八月二十五日、掘立小屋へうつった。やはりいくら小さくとも自分の家だと思うと心がやすらぐ思いだった。神が守ったか、父は日に日に丈夫になり一心に働くようになり、カユをすすりながらも楽しい毎日をすごした。

が、これもつかの間、またいやなことがおこった。私が五年に進級した初夏のことだった。祖父のよくないいろいろなうわさがようしゃもなく私の家へ入って来る。父母はこれ以上ほおっておくわけにもいかず、家へつれて来ることになった。そうなると祖母の腹はおさまらない。頭から大反対で「子供をすて、さんざん苦労させ、少しよくなったとて、おめおめ家へなぞ入れてはいけない」との一声だけだった。

父はこの祖母の反対を押し切って祖父を家へつれて来た。父母はなるべくやさしく祖父をあつかったが、祖母だけは声ひとつかけなかった。もちろんごはんもいっしょに食べず、いつも一人だった。自分をすててまでいったのだからしかたがない。これは当然のように私は心に感じたが、ある一方ではかわいそうだった。にくまれつづけられ、同じ家のなかに暮す祖父は、自分が悪いだけになにもいわなかった。こんなにおとなしかった祖父だっ

たのが、また酒をのみだした。よく一升びんをさげて来て、夕食のときなど、父にすすめていたが、父はにこにこして、体にわるいから少しいただくといって、二人でちびりちびりのむのだった。こうして二年がまたたくまに過ぎ去った。

酒が悪かったか祖父はたおれた。医者の診察の結果、中風とわかった。いくら酒ずきでも今度だけはこりたか、酒をやめて毎日ぶらぶらしていた。だんだん悪くなり、腰がきかなくなり、口も思うようにきけなかった。こんなことをしているうちにだれにきいたか、祖父に嫁われていたお松とかいう女が私の家へたずねて来た。祖母は青くなり外にかけだしていった。ぶるぶるといかりがこみ上げて来たのだろう。人のよい祖父はこの女にだまされたのだった。お松は「じい、こんなすみっこにねてないで、早くなおり私のところへおいでね」などといっている。いかにも人を食ったようなばばあである。母はいかり「よけいなおせわだ、いくらぼろ小屋でも私の家だぞ」とさけびたかった心をおさえ涙をこぼしていた。

お松が帰ってからだれも話をせずだまりあっていた。日曜だったので私はこのありさまを見ていた。いったいだれをにくんでいいのかさっぱりわからず、みないちようにくらしかった。父が帰りこの話を聞くとだまってびんせんに筆をはしらせていた。これ以上祖母を苦しめないようこないでくれ、というお松への手紙とわかり、みな安心して胸をなでおろした。

これが最後だった。いくにちも過ぎないうちに祖父は六月、この世を去った。死ぬ前日、めずらしく床の上におきあがり、一ぱいのませろと子供のようにねだった。母はすぐ買って来て湯のみについでやった。息もつかずのみほした。「もっとが」というと「あとええね。ばばにごしゃがれるどわれがら」と、ふふとわらった。祖母はこのときはいつもとちがい、死をわかってか「なんにもやねがら、いっぱいのめ」とやさしい声でいった。私はうれしかった。たとえ一度でもやさしいことばをかけてくれるといいのになあと思っていたからである。

ささやかながら葬式もとどこおりなくすみ、ほっと一息するひまもなく借金取りにおどろかされた。そっちにもこっちにもあるのである。祖母と母は「それ見ろ、死んでからまでやっかいかける」といっていたが、父はそうではなかった。いままでかえさなかったことをわびな

がら一戸一戸まわってあるいた。そのとき私はちょうど中学二年だった。

だが、それからほさほど心配なく暮せるようになった。私が三年になるそうそう修学旅行があった。父母は苦しい家計のうちからやりくりし、セーラー服とズックを買ってくれた。きっと行けないにちがいないと心に思っていたのにと思うと、父母のありがたさがしみじみと心にしみた。大ぜいの人々におくられて汽車に乗った。友達は笑いころげた。これを見るにつけ私は胸がいたんだ。父母の苦労が身にしみて、いくらさわごうと思ってもだめだった。まして父母の見ないところにいくと思えばなおさらだった。東京にいっても江ノ島へいってもめずらしいものがざらにある。買いたいものばかりだが、わずかな金だったがどうしても使う気にはなれなかった。それでおみやげも買わず、こんな詩をみやげとして家へ帰った。父母はとても喜んでくれた。

修学旅行記

おくられて

まちにまった修学旅行
大きいリュックサックに
うきたつ心をつめて
汽車に乗る
東京目ざして汽車は出る。

上野駅

ここが東京！
あこがれの東京
駅の中は大ぜいの
人人人……スピーカーの声
何十万とも知れぬ声声……音音……
これが上野の駅なのだ。

江ノ島

両側にならんだ店
店員の呼びかける声をあとに
静かに青い波を見ながら
夢心地で
島のさんばしを渡った
江ノ島はなんとすばらしい。

東京の夜

ラッシュアワーの時間だろう

人はにぎやか
自動車の行列
ネオンはまたたき
何とも知れぬ騒音
何か不思議な世界に
まきれこんだような淋しさ
これが東京の毎日なのだ

帰りの夜汽車

たのしい旅も
あわただしく通りすぎて
楽しく語る旅のあれこれ
つかれた体をうとうとと
夢にゆだねてなごりおしみながら
走る汽車の夜

山形駅

汽車は見おぼえある駅につく
元気に帰った私を
ほっとした目もとで
やさしく迎えてくれる母の姿

旅行も過ぎて、進学生の勉強と就職生の実習に日はあわただしく過ぎてゆく。私は進学したかった……ゆるされようはずはないのをわかっていながら、気持はにえかえるようにせつなかった。せめて就職だけは私の好きなものを選択させてくれればよいがと思ったが、これもだめだった。幼年のころから美容師になりたかった。学校を卒業したら、かならずやろうと心にきめていたのだった。美容師と聞いただけでもうれしくなるほどだった。

だが、祖母は前から苦労がたたり体が弱く、そのため母はそとで働くことができない。弟妹は小さくて父一人の働きでは生活はむずかしい。父母は私の願いをきいていたが「それは将来性のある職業で、希望をとげさせてやりたいが、お前も知ってのとおり、このままではうまいものもたべさせてやれない、いつだれが病気になるともかぎらない、つらいだろうがそれだけはがまんして、すぐお金のもらえるようなところへ就職してくれ、下の子供も小さいためお前がぎせいにならなければ、この家は立っていかないかもしれないんだよ」と言う、父母の意見である。

私はがっかりしてしまった。体の力がぬけていくよう

だった。父母をうらんだ。そして一晩泣きあかしたのだった。こんなわからない父母なのかとつくづくいやになった。が、そうした半面、家の貧しさが身にしみているのでどうしようもなかった。父母の反対を押し切ってまで進む勇気すらおこらなかった。先生にどんな職業につきたいかと聞かれてもわからなかった。いまのいままで心のうちは美容師のことでいっぱいだったからである。私の心にはうずまきがおこっていた。もっとも親しかった友達は、私と似たきょうぐうに育ったためか、とても気があっていた。二人のあいだにはかくしているものがないほど話しあった。

このとき、友達も職場実習は袋屋だったので卒業したらあるいは使ってくれるかもしれない。「なんだったら静ちゃんもいっしょにお願いしてみない」といった。私はどうしたものかと家へ帰り、母に相談したところ、ぐうぜんにも母が用事があって袋屋にいったとき、「卒業したら娘を使ってください」とたのんだことがあったということを聞いて、やはり町へいけば服そうまで考えなければいけないし、お願いしてみたらということで、先生のとりはからいでまたたくまにきまってしまった。うれしかった。心がきまらず沈みがちだったのも晴れ、元気を取りもどした。希望にもえて卒業を迎えた。社会の荒波を乗りこえて、どこまでも正しい道を進もうとちかいあい、たがいに進む道を考えながら卒業証書を手に友達と別れた。

希望にみちて入社した工場は個人経営で、名は武田紙製品工業所。二十人ぐらい工員がいるが大半女がしめている。それは各種紙製品が女の手で造られているからである。そのほか印刷紙類の仕事は少数の男の人でやっている。ここの町内では袋屋といえばだれも知らない人がいないほど有名である。所長武田好吉氏を中心に県外にまで手をのばしている。そのなかで茶袋が一ばん多い。これはみんな女工員の手でつくられている。工場全体がまとまって仕事をしている。やはり働くということはふつうの気持ではいけない。工場の入口を入れば、だらだらしている心もひきしまるような気がして毎日が楽しい。それにいい人ばかりである。

私は友達に感謝した。働くことによって、ああもしたいこうもしたいという希望がわいて来るのである。いくらかでもたしになることを習わせたいという所長

の取りはからいで、昨年は生け花を夏のうち習わせていただいた。おかげで小さい家の中も毎日花のにおいが鼻をくすぐる。

はじめての給料日だった。自分で働いた金だと思えば昼のつかれも忘れてはしって帰った。父母はもとより家内じゅう喜んで「何もわからない者にもこんなにいただくとは、ありがたいありがたい」といって神だなにあげて、なんべんもなんべんも、くりかえしながらおがんでくれた。涙をながして父母は喜んでいるのである。苦労のすえと思えばなおさら父母はうれしかったのだろう。私はうれしかった。つくづく金のありがたさが身にしみて涙がこぼれた。このようにして今日にいたったのである。父母はつねに「どこに働いていてもいやなこともあればよいこともある。いやなことを乗りこえてこそ成功するのだ。それにつけても長くつとめ自分の身をきずかなければならない」と教えてくれる。

働くよろこびと苦しみ

若井嘉子
〔東京都　電話交換手　十六歳〕

"蛍の光"におくられ学窓をたって、はや一年と四ヵ月あまりの月日がたちました。進学もあきらめねばならぬ私は、新聞の片すみの「交換手募集」の広告を見て不安な気持で応募してみました。履歴書提出、身体検査、筆記試験、面接、家庭訪問などの調査の結果さいわいにも合格の通知を受けました。そして三ヵ月、交換手になるための訓練をうけ、いよいよ交換台について、東京から北は北海道、南は九州の各地を結ぶ重要な仕事をこわごわやって

みました。

まちがいのないようにとの不安と、自分は大切な仕事を受持っているのだという大きな喜びとともに、どうやらきょうまで過し、完全とまではゆきませんが交換様式もおぼえ毎日多くの通話を取扱っております。そして正確な取扱いのほかに電話を利用なさる方が気持よく通話できるようにと心がけております。

ともすれば忙しいときなどいらいらして乱暴な言葉がとびだしそうで、自分自身はらはらしながら、ぐっとのみこんでていねいに応待していますが、よく交換手は応待が悪いという利用者の言葉をきくと残念に思います。

なかには短気な人、気分が悪くて応待が悪い人もいますが、全部が全部そんなではありませんから、いちずにそのようなことはいえません。私も急な頭痛や腹痛に応待困難なこともありました。そんなとき監督を呼んでかわってもらい医務室にゆくこともできますが、まだ新しい私にはちょっといいにくく、つぎの休憩時間までがまんしてしまいます。

でも、なるたけ関係のない利用者には自分の感情などあらわさず親切に応待したいと思います。たまたま感情をおさえきれずに言葉を強くする人も何千人の交換手のなかにはいるでしょう。そして夜勤のねむいときなども。私も現在のようにこの職業につかないころは、やはり交換手にたいして好感は持てませんでした。

現在でも感心しないこともありますが、だんだんそんなことがなくなるよう願っております。いつか局長さんが「交換手は感じがいい人ばかりだ。お嫁さんにもらうなら交換手にかぎるといわれるように」とじょうだんをおっしゃいました。短いあいだですが、以上のようなことをとおしていろいろ学びました。そしてたった一つの私の疑問は、交換手ばかりでなく、どこでも勤先では上役や先輩の気にいられなければならないということです。でも私にはまだどういうことだかわかりません。ただ一生懸命仕事をしているだけが仕事ではないのだそうです。

ある会社では課長や部長と趣味までも同じくしなければならないとか。お世辞やご気げんとりは大切な仕事だということを聞かされました。私など見ていてよくあんな態度や言葉が、無理につくった笑顔といっしょにできるものだと思います。はじめはいやな気持でみましたがこのごろは感心してみております。上役、先輩に対して

のいちおうの礼儀のほかに何が必要でしょうか。なぜきれいでもないものをきれいだといい、好きでもないものを好きだといわなければならないのでしょうか。人にいうと、私はまだ卒業して日が浅いから学生気分がぬけず学生的正義感というか学校で教わったこととちがうことが、社会では行われているので不満なのだといわれました。すこしなれれば、しぜんそんな考えは持たなくなるといいますが、私でもお世辞の一つもいえるようになるでしょうか。

お世辞やご気げんとりは職場のエチケットだといいますが、ほんとうでしょうか。私は卒業してから今日まで、いいえ、これからさき、お世辞がいえるようになるときがあれば、そのときまでこの矛盾に苦しむことでしょう。早くどんな方法でもよいからこの苦しみからぬけでて、りっぱな社会人となりたいと思います。

入社した若い人たち

安中弘資
〔新潟県　機械工　十七歳〕

中学校を卒業して鉄工所に就職した若い人たちが、はじめてふれた社会の種々相――その複雑な環境のなかから、なにを見、なにを感じたか。ある日の休憩時間のひととき、あつまった若い人たちから、入社いらいの感想をきいてみた。失敗談あり、あるいはうれしかったこと、つらかったこと、そのほかいろいろと印象の深かった話に花をさかせた。

A君「四月一日採用通知をふところにしてワクワクしながら家を出た。途中まごまごしておくれてしまった。泣きそうになって専修学校へかけつけると、入口に人事

課の山本さんが迎えに出て、『おお、A君か待っていたぞ』といわれた。教室ではみんながちゃんとしてすわり、遅刻した僕が入ってゆくと、みんなの注目をあびてあつくなった。規定の勉強がおわって、八日は現場の人がワザワザ学校まで迎えにきてくれ、現場に行くと課長さんが『よう、来たか』といって心よく迎えてくれた。僕は製鋼の熔接にきまり、職場の理解ある明るいふんいきのうちに一人前の職工としてまじめに働こうという決意に燃えたのです」

B君「僕ははじめなにも知らず親切心から友達のタイムカードまで記録してやったら門衛さんに注意され、就業規則の話を聞かされた。親切心が手伝いすぎてよけいなことまでしたものだと思った」

C君「職場の近くに高いガス井戸のやぐらがある。好奇心にかられて昼休みに友達二人とのぼってみた。登ることに眺めが広くなって、面白くてたまらずとうとうてっぺんまでのぼってしまった。町のデパートが見える。弥彦山、角田山、海の向うの佐渡が見える。山の下の工場はマッチ箱だ——川の上にポンポン蒸気が走っている。三人はこの雄大な景色を眺めてすっかり愉快になっておりてきた。すると班長さんが『課長さんの話では君たちはやぐらの上へのぼったそうだが、ほんとうか。事務所の窓からよく見えるんだ』あとで考えたら、課長さんは僕らのおりるまで心配して見ていられたらしい。班長さんは課長さんに忠告を受けたにちがいない。けれども僕らにはなにもそれ以上しかるようすもなかった。僕の良心が僕自身に深い忠告を与えました」

D君「僕の職場の親方は横目で人を見るくせがある。はじめこの横目が薄気味わるくて、よく口もきけなかった。そのうちにこれがくせであることもわかり、かつは親方がたいへん親切な人であることがわかった。他の人たちも親切である。あるときSさんという大人の人といっしょに仕事をしたが、この人はめっぽう早口でなにをいっているかわからない。聞きかえすのも悪いような気がしてボカンとしていたら、『なにをボヤボヤしているんだ、早く掃け』と、どなられた。これが工場へ入ってからのしかられはじめでした」

E君「僕のとこのOさんという人は、無口でいつもおこったような顔をしている。ものをいうのも怒り声である。ときどき僕の仕事のことでなにかいうが、はじめはてっ

きりしかられるとばかり思っていた。ところがいつも僕の仕事のよいところばかりほめてくれるのです。僕は仕事にはりあいがでました。そして人は見かけによらんもんだと思いました」

F君「僕たちのうちに朝『オスオス』なんてあいさつする人がいる。言葉も乱暴だ。あるとき僕のキサゲのぐあいが悪いので見てもらったら『これはだめだ、信濃川へぶちやれや』といったしまつである。そして僕に新しくキサゲとササッパをつくってくれた。ひるになると組長さんは『まんまにしようぜ』とまわってくる。そのまんまという声がとても親しみ深く聞える。そしてまんまをいっしょにたべながら仕事の話をしてくれる。鉄工所は言葉は荒いが、気持はみんなよい人ばかりだ」

G君「おらの組長、学者だぞ。図面の見方だの一角法だの三角法だの。すぐ埋べたへ白墨でかいて教えてくれる。家へ帰るときもいっしょだが、歩きながらも職場で必要な知識を与えてくれる。たとえば検査に水圧法と空圧法がある。液体は圧力を加えても体積が変らないから圧力もでず爆発のおそれがない。気体は圧力を加えれば体積はちぢみ同時に圧力を増すから、限度に達すると爆発のおそれがある。だから圧力試験は安全な水圧法が多く用いられる。また圧力はタンクの大小、側壁の上下、左右に関係なく均一である。こんな話をききながら歩いて沼垂駅ちかくで別れるのである。とてもためになる話を聞かせてもらえてよい」

H君「僕はひる休みには大人の人のために買物に行ったり、退けどきには湯をもってきてやったりする。これはサービスという意味でなく、手を離せない人や一生懸命に仕事をしている人に対して、『ご苦労さま』という意味でやるのだ」

I君「仕事にも職場のふんいきにも、だんだんなれてきたら、大人の人たちがアミダをして、僕になにか買ってこいといいます。本気でいっているのか、からかっているのか、わからんでこまることがあります」

N君「僕は旋盤工だ。Kさんの話では『工作機械の花形は旋盤工だ』という。なるほどと思っていたら、長いあいだミーリングにつかまっている人が『ミーリングは旋盤よりもむずかしい』と聞かせてくれた。それで僕は変に思ってYさんにきいたら『旋盤には旋盤のむずかしさがあり、フライス盤にはフライス盤のむずかしさがあ

る。やさしそうなボール盤でも一種独特の技術がいる』といった。かんたんに見える機械でもなかなかもので、おのおのの機械にはそれぞれにちがった特殊な技術がいるものだなあと思った」

S君「このあいだ工場の係の人から『君は陽性に転化したから注意するように』といわれ心配でならない。気のせいか、近ごろ胃のぐあいも悪い。課長さんも『自分の妹は看護婦をしているが君ぐらいの年ごろがいちばん気をつけなければいけないということだ。変だと思ったら遠慮なく相談するように』と心配してくださった。職場の人々があらゆる点に気をつけて親切にしてくれるので感謝している」

T君「僕は工場へ勤めて、休み時間のありがたさが、つくづく感じられる」

U君「だいいち、休み時間はたいへん楽しいものである。ひる休みなどに野球をして、大人たちをあっさりアウトさせるときは痛快だ」

W君は詩をうたってくれた。

よく晴れた秋のひる休み、
静かな河岸に座っていた。
ぼんやり空を見つめていたら、
白い雲が一つ二つ、
見る見る僕の好きな、
パスカルの顔のようになった。
パスカルは偉大なる科学者。
僕も偉大な技術者になろう。

飯島一秋

〔千葉県　工員　十八歳〕

友一人長く病みいて夏の日を工場やすみてわれは野にゆく

バス代でキャンデーたべしわれはきょう二里の夜道を徒歩で来にけり

たまにくる工場の休みを集まりてギターをならす午後の木のかげ

上原正夫

〔栃木県　農業　十六歳〕

飼葉切るわれの手もとを見つめいる馬のひとみのいじらしさかな

ふっくらとふくらみかけた稲の穂で実りの秋を知るうれしさよ

岩城散人

〔千葉県　農業　十七歳〕

将来のためになるらむ今宵また農業日誌たんねんに記す

夕立の去りたるあとはそれぞれの色なし庭の若葉しずけし

工藤智恵子

〔北海道　女中　十六歳〕

なにもかもあきらめ捨ててみたけれど目にしみるよなセーラの白線

亡き父の墓石の前にたたずめば過ぎし昔の肩車かな

坂内銀也

〔東京都　事務員　十六歳〕

なんとなく紙上にペンを走らせていさかいしたる友の名書きぬ

湯にいれてふと気づきたるかすかなる人さし指のきずのいたみを

日記から

仲野政義
〔兵庫県　工員　十五歳〕

×月×日

早いものだ。あれほど胸をおどらせて川崎養成工に入ってから二週間が経過した。しかしまだ僕は会社内になれていない。きょうの昼休み時間、会社内で迷子になってしまいそうだった。大きな会社はこれだからだめだなんて勝手なことを考えた。とにかく早く会社の空気になれたいものだ。まあそのうちになれるだろう。

また入社式のときに社長が「初志貫徹」ということをおっしゃっていたが、いまゆっくり考えると、なるほどと思う。この会社に入社前はんとうに僕はたいへんな意気込みだったっけ。しかしこうして入ってみると、なんでもないような、それが当然のような気がするが、実際あのときの意気込みだったら、きっと役に立つ人間になれるだろう。人間かならずしも弱くはない。〝なせばなる〟だ。これから会社での、いや中学校から飛び出していよいよ実社会においての人生がはじまるんだ。僕はまだ人生についてなにもしらないが、とにかく社長の言われたように入社したときのあの気持を持ちつづけるんだ。

「初志貫徹！」

×月×日　晴

きょうの国語の時間は非常におもしろかった。O先生が「春に咲く花でどんな花がありますか」っていわれた。さっそくI君が「サクラ、スミレ、ツツジです」とい

うと、O先生「ツツジは初夏ではなかったかな、たしか昨年の初夏ごろに見たがなあ」しかしI君は「いいえ、先生、たしかに春です……先生の見たツツジ、ボケとったんや」一瞬笑声で教室がはちきれそうになった。また少しあわてもののT君、本を朗読していて「足袋」という漢字が出てきた。T君は最初タビと読んだ。しかし、先生が「そうか」といわれると、T君すました顔で「イヤ、ちがいました。アシブクロです」またまた教室のすみずみまで爆笑の渦があふれた。いまこの日記を書いていてもそのときの情景が目の前にちらついている。

入社してから学科三日、実習三日の会社生活を送ってきたが、いつか実習でK君がハンマーの大振り基本作業で左手を打って涙をこぼしていたっけ。僕もそうだが、なんにせよ、中学校生活とはだいぶ変ったような気がする。

× 月 × 日

朝からシトシト雨がふっていた。天候のせいだろうか。急に中学校にいたときのことを思い出したので、晩さっそく先生に手紙を出した。実際、いま思うと中学校にいたときのほうがとても自由であったし、また学校から家に帰ったら、すぐ友達と釣りに行ったり、鳥を捕えに行きもしたし、それに朝は八時までも寝ていられたもの。中学校のころ、早く卒業して世の中に出たいと思っていたが、いまではその正反対で、できるなら中学一年生にもどりたいような気持である。先輩にそういったら、メソメソするな、といってしかられた。実際こんなあまい考えや気持では、現在の会社生活は送っていけないだろう。

× 月 × 日 晴

きょう実習で一、五ポンドのハンマーを作った。これからこのハンマーを使用するのである。ハンマーが仕上がったとき、実にうれしかった。たとえ小さなハンマー一つでも、自分の手によって作ったのだという生産の喜びである。ほんとうにうれしかった。

寮に帰ると中学にいたときの友達H君から手紙が来ていた。あまり懐しかったので卒業記念アルバムを引張り出して見たくらいである。H君のニックネームはタヌキだったっけ。それにF君はロッパで、僕はアチャコだな

んてたがいに呼びあったっけ。だが、それもいまはみんなバラバラになってしまった。ちょっとふしぎな感じだ。H君はペンキ屋に、F君はサンバツ屋に、またK君、S君、Nさんは高校に、それぞれ自己の道にいそしんでいるだろう。僕も高校に行きたかったが、しかし、よく考えると僕らのように働く者もいなければ、一つの国家というものがなりたたないと思う。いつか中学校で、世の中というものは数知れぬほどのより集まった部分からできていて、そしてそれらは必要があるからこそあるので、時計と同様に、もし一部分がなくなればうまくいかないと、こんなことを教わったが、まったくだ。だからこんな力のない僕たちでも、世の中のためになろうとしていると思えば、むしろ働いていることが喜びであり、力がわき出してくるのをとめ得ない。H君、F君がりっぱな社会人になるよう祈ろう。

×月×日　曇

天候は曇っているが、きょうはうれしい日曜日だ。しかし中学時代の日曜のようなわけにはいかない。朝のあいだに洗たくをした。こうして自分で洗たくをすると、親というもののありがたさがわかる気がする。洗たくのあとで実習日誌を書いたり本を読んでいるところへ、母が果物を持ってやって来てくれた。われわれ寮にいる者にとって、手紙が来たり家の人が来てくれることは、この上もない喜びである。母といっしょに昼食をとった。

夕方のことである。同室のU君、W君が「おい、これうまそうやろ。こんな大きいの三つ二十円や、安いから六十円買ってきた」といって、パンのような、いかにも、おいしいらしいフワフワした物をだしてみせた。寮の食事はきまっているため腹がすいて仕方がないのである。だから彼らは買ってきたらしい。そこまではよかった。しかし一口、口に入れたとたん眼を白黒させた。僕ももらって食べたが、いままでこんなものを食べたことはなかった。なんともいえない味である。結局、全部捨ててしまった。あとで聞くとこれはブタまんじゅうといって、ソースをかけて食べるものだということであった。安くておいしいらしいと食べ方も知らんのに買ってきて、と室長さんに笑われた。寮生活も、遠く家族と離れているのはさびしいことであるが、おもしろいものである。

×月×日　晴

きょうは実にうれしい日であった。たんに僕だけではないだろう。会社に行ってる人たち全部にとってうれしい日だと思う。だが僕なんかはとくにうれしいのだ。だって初の給料日だからである。担任の先生から一人一人給料袋をもらったときの気持、これはとうてい文字や口で表現することは不可能である。この気持は働いている者のみしか経験できないことだ。さっそく予算をつくった。なにしろ自分で自分の生活全面にかけて予算を組むことは初めてである。しかしこうして予算を立てるのは楽しいことだと思った。はたして予算通りにやれるかどうかが問題だが、部屋の他の者もさかんに予算をたてていた。ほんとうにきょうはうれしかった。

×月×日　晴

最近、人生というものについてよく考えてみたい気がする。また年長者の人に人生観を聞いてみたい。実際、僕の見た感じでは、中学のころ考えていた社会とは大変異っているような感じだ。いつか祖母が、表があれば裏もあるのが世の中というものだといっていたが、そんな気がする。僕は世の中ってもっと明るく朗らかだと思っていたが、みんな自己の生活に真剣そのものだ。僕もこうして働いてみて、ほんとうに世の中は自分の思うようなわけにいかないと思った。職種決定のときも僕は機械を希望していたが、仕上げのほうに入ってしまったのだから。現在では仕上げがおもしろいが、仕上げだときまった当時は絶望した。

いま、三万八千トンのタンカーを造っているが、よくあんなに大きな船ができるものだと感心せざるをえない。これは一人一人が力を合わせてこそでき得るのであろう。ことしの中卒就職者も相当あるそうだが、われら働く青少年一人一人が力をひとつにするならば、あの大きな船ができるように、この日本もますます進歩発展するだろう。

どの本であったか忘れたが、「自己の職務に熱中せよ！」とあったことを覚えている。まったく自分の職業を天職と信じ、そして全力をつくすなら、きっときっと幸福が来ると思った。

日記

奥村　勝
〔東京都　工員　十六歳〕

×月×日　月曜日

やっと午前中の仕事がおわり、昼食をとって午後の仕事にかかった。ちょうど三時になったとき、「君、部長さんが呼んでいるよ」と組長さんにいわれた。私はいわれるままに部長室に行き、部長さんの前にすわり「なにかご用ですか」とたずねた。

部長さんは「実はほかでもないが」といってから、言葉をきって、「君、わかるかい」といった。「いいえなんのことだかわかりません」と答えると、部長さんは、「じつは君、解雇されるかもしれないんだ。まあ悲観しないで仕事をしてくれたまえ」といって、部長さんは室から出ていった。私はあとに残って考えた。べつに悪いことしないのになぜだろうか。ふしぎでたまらない。私は考えながら室を出た。そのとき、五、六人の若い人たちが課長室に入っていくのが見えた。しかし、私はいそいで職場にもどった。みなが私のところにきて、「話ってなんだよ」とせがんできた。「べつになんでもないんだよ」といって、私は学校へ行く用意をして会社の門を出た。けれども部長さんのいった言葉が耳について離れなかった。

学校に着いてからも思い出しては考えて、勉強もろくろくできなかった。

×月×日　火曜日

いつものとおりに会社に行った。しかし、きのうの部長さんのいった言葉がほんとうだったらと思うと、仕事をする気にもなれない。会社の上役はひどいと思う。仕事がいそがしくなると、下の者にいいつけて、自分はろくに仕事もしない。また、これとは反対に、仕事がひまになると、私たちには仕事をさせない。私たちは、自分の仕事がおわれば他人の仕事を手つだうのに、なぜ上役の人たちはそうしないのだろうか。こういう上役の贈収がそのまま成績にのれば、かならずといってもいいほど、会社から解雇されるにきまっている。

会社がおわり学校に行った。すると担任の先生が私のところにきて、いきなり、「この間のレントゲンの検査の結果、君一人悪かったそうだよ」といった。私は顔中真赤になってしまった。なぜ先生は、こんなに友だちの大ぜいいるところでいうのだろうか。おもわず心の中で「先生のバカ」といってしまった。

会社のことでいっぱいな私の頭に、学校でもまた心配ごとができてしまった。なぜ悪いことが二つもかさなったのだろうか。「まあ、気を落さないで、たいていの人は気を落して自殺なんかする人もあるが、そんなに深く考えないように」私はあっけにとられてしまった。

会社では解雇になるかもしれない。また学校では胸が悪いといわれた。ほんとうにどうしたらよいのかわからなくなってしまった。まして、学校では、学期末の考査がはじまるのに……ほんとうにどうしたらよいのかわからない。私はなにも考えたくはない。このとき、私はこう思った。他の勤労学生もみんな私みたいなのだろうかと。もしそうだとすればこんにちの勤労学生はみんな不幸のどん底にいるのではないだろうか。

×月×日　日曜日

私は思いきって家の人に、いままであったことを話した。私の家は、父がなく、母と五人兄弟である。母は「まあ、しようがないよ、だれでもこんなことがあるんだからいいよ」といって、私をなぐさめてくれました。きょうは日曜日なので、なにも考えずに楽しく遊んで、いままであったことをわすれようと思った。けれど、心の底からは忘れることはできなかった。

×月×日・木曜日

私は知った。会社はずいぶんひどい。会社の経営がよくなると人を募集し、会社の経営が悪くなると、どんどん人を減らしていく。いまは少しいそがしいのでまた人を入れている。これらの人たちも、いずれは会社から出ていかなければならないのである。こんなことがいつまでもつづくのでは、私たち勤労学生は、どうしたらいいのだろうか。あえていえば、こう変化がはげしいと、職場と学校は、両立しないのではないだろうか。会社があっての学校だ、だから会社も勤労学生のことをもう少し考えてほしいものである。

津田遙子

〔秋田県　製版女工　十八歳〕

ある夜に

白いコスモスの散るほど鳴りだす古い時計
アカシヤの枝さき銳く月のかかる時刻を
低くつるした電灯のその明るい輪の中で
まだ不ぞろいの私の製版文字は
原紙のたしかな野の中にいたわりあって並んでゆく
清掃された部屋の窓開け放した朝からこの時刻まで耳鳴りのように静かなひびきは続いている
ぎり　ぎり　ぎり
鉄筆を握る手指さきから肩へ背へ胸へせつなく伝わり
めぐりしみいる音に噛みしめている歯のわずかな空間から
十七歳の歌にならない歌がもれる

カラ松のさびしい青枝を飾り
庭に花咲かせた百日草の燃える紅を一輪そえて
チエホフを読み更かす夜があった
幼い日から守りつづけてきた詩のささやかな灯が
風に会ったほど揺らぎ消えかかる日があった

その同じ古びてきしむ机により
凍てる日から激しい暑さの時を通して
やすり版に向う厳しい精進の日が重ねられてゆく。

川崎義光

〔岡山県　工員　十六歳〕

日曜日朝寝の床に日射しけり

つぐ人のなき母方の蓋あらう

義士主従船出せし浜卯波よす

ひろがれる船虫に潮よせみつる

北川正徳

〔広島県　工員　十八歳〕

大船台船すでになし秋の風

鉄路消ゆる遠き彼方や海光る

夕焼に巨船どっかと構えたり

酒井徹

〔高知県　工員　十六歳〕

みの笠や釣竿重し磯の雨

飛行機を手づかみにする入道雲

あげ潮に鳥細くなりかもめ飛ぶ

時任利彦

〔宮崎県　文選工　十七歳〕

電灯もゆれカーテンもゆれ涼み台

のぼりゆく風船ひとつ夏の空

無検印
編者
承認

雨にもめげず風にもめげず

昭和三十年八月三十日　印刷
昭和三十年九月　五日　発行

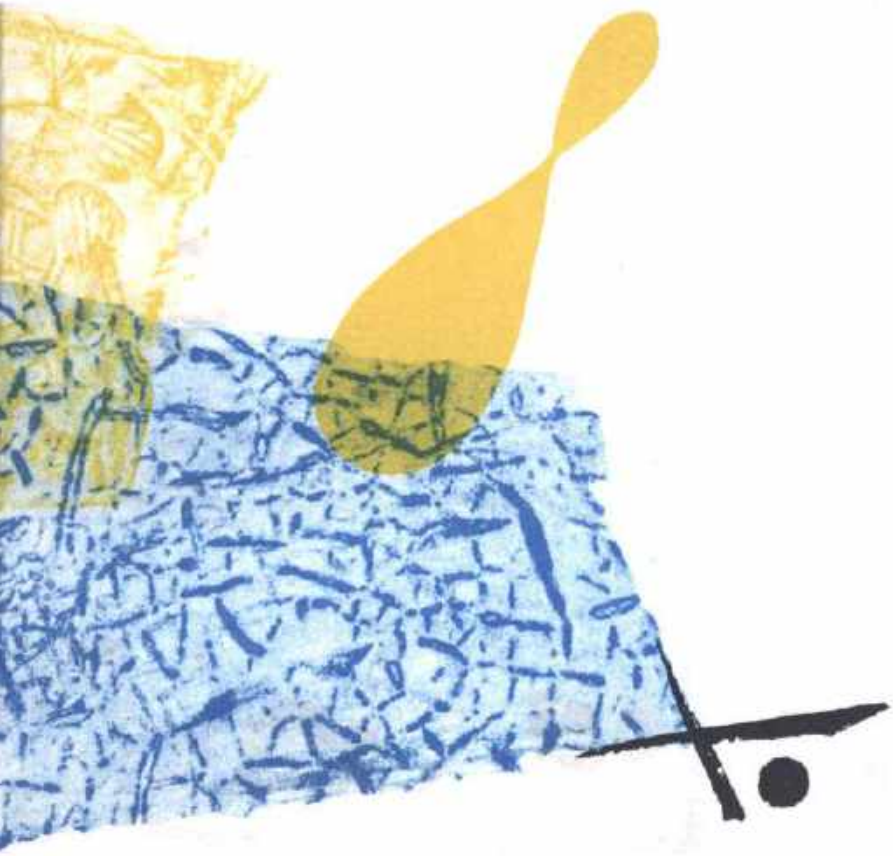
定価一四〇円

編者　労働省婦人少年局
発行者　渡辺智多雄
印刷者　大谷信一

発行所　読売新聞社
大阪市北区野崎町
東京都千代田区有楽町

乱丁・落丁のものは本社または最寄の取扱所でお取替えいたします

印刷・中越印刷株式会社　製本・後藤製本所



読売新聞社